

えびの市の城館跡



飯野城の門扉（黎明館藏）

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第45集

えびの市の城館跡

2008

宮崎県えびの市教育委員会

序

宮崎県の南西部に位置するえびの市は、肥後・薩摩・大隅・日向の分岐点にあたり、東西約26km、南北約20kmの逆三角形の市域を有し、北の急峻な九州山地と南の緩やかな綱島山系に挟まれた狭小な盆地であります。

中央の氾濫原は東西13km、南北1～2kmの地力豊かな砂質土壤で、集落や建物・工場用地以外では水田に1400haあまり、畑に180haあまり利用されています。南北の段丘面も含めた農地は3600haを数えます。大小20余の小河川は盆地中央を西流する川内川へ注ぎ、降雨量や湧水に恵まれ、河岸段丘も発達しています。こうした地理的条件から遺跡も多く、段丘面の殆どは周知の遺跡となっております。すでに古墳時代には数百基の地下式横穴墓を造営した母集団が6以上あり、生産地、加えて地理的要地として、重要な盆地として周知されていたようです。

12世紀後半以降、日下部氏、北原氏、島津氏へと領主が交代する中、肥沃な領土を守るために丘陵の先端部や台地縁辺の要所には次々と山城が築かれ、総数は40か所を超えます。これらの現況は畠地や山林が多く、形状を良く保っています。

本書は、市内に分布する山城ほか、館跡・砦・陣跡について纏めたものであります。発掘調査にまで至った山城は僅かであり、埋没遺構も多々あるようですが、掲載した縄張り図の殆どは表面観察による現況であり、不明な点が多いのが実状です。また、遺憾ながら消滅してしまった山城もあります。このような制約の中で、最大限の資料を活用して往時の姿を甦らせようと努力致しました。

本書が、貴重な文化遺産を後世に伝えるための基礎資料となり、学校教育や生涯教育の資料として活用され、埋蔵文化財の理解と認識が深まれば幸いです。

平成20年3月

えびの市教育委員会

教育長 上野 兼 寛

例　　言

1. 本書は、本市に所在する山城・館・砦・陣跡を平成16年度に纏めたものである。
2. 本書掲載の縄張り図は、市川政瑞・市田寛幸2名が平成8~9年に作成した原図を中野が構成・レイアウトした。なお、城域の大きさ・重要度を考慮して、縮尺を統一していない。
3. 縄張り図に使用した1/2500図は、昭和60年に本市が作成したもので、現況と若干異なる地割等がある。
4. 本文第3章の執筆は市田寛幸が担当し、中野が一部改変、第1章、2章および発掘調査地点の内容については中野が担当・編集した。添書は、入木和代が担当した。
5. 掘図の添書および出土遺物の実測・トレース・レイアウト原稿作成は、安藤紀代ほか、入木和代、上水内喜子、大重泉、大田山美子、芝原由喜、末継さおり、野田幸子、原山征子による。
6. 出土遺物の陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二副館長（現館長）に鑑定して頂いた。
7. 写真図版については、発掘関係のみにとどめている。出土遺物の写真は、特異なものに限定して掲載している。
8. 出土遺物や関係資料は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。

凡　　例

1. 掘図および写真図版の遺構で、S Aは竪穴式住居と平地式住居、S Bは掘立柱建物跡、S Dは溝状遺構、S Kは土坑・土壙墓、P Pは柱穴の略である。
2. 写真図版の個別遺構中のピンポールの長さは1mである。
3. 方位の表記の無い写真は、全て上が北である。

調　　査　組　織

調査主体　　えびの市教育委員会（平成16年度）

教育長	上　野　兼　寛
社会教育課長	白　坂　良　二
文化係長	松　田　和　伯
主査	鶴　永　靖
技師	中　野　和　浩
嘱託	市　田　寛　幸

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 城館の分布.....	2
第3章 遺跡の詳細.....	5
1. 大河平氏館跡.....	5
2. 大河平城.....	5
3. 今城.....	6
4. 永野城.....	10
5. 吉富陣.....	10
6. 薩摩陣.....	13
7. 球磨陣.....	13
8. 播磨ヶ城.....	16
9. 金丸城.....	16
10. 鮎野城.....	19
11. 長徳庵.....	33
12. 宮之城.....	33
13. 掃部城.....	33
14. 小城.....	35
15. 平城.....	37
16. 小城.....	38
17. 新城.....	38
18. 加久藤城.....	40
19. 净慶城.....	45
20. 圓田城.....	45
21. 妙見遺跡.....	62
22. 手仕山城.....	62
23. 徳満城.....	64
24. 新城.....	66
25. 東福城.....	66
26. 松尾城.....	71
27. 丸之尾城.....	72
28. 杉尾城.....	72
29. 赤花城.....	72
30. 古城.....	76
31. 猿ヶ城.....	76
32. 見吉城.....	78
33. 池山城.....	78
34. 西矢倉城.....	83
35. 矢倉城.....	83
36. 溝闇城.....	83
37. 稲荷城.....	86
38. 小屋敷城.....	88
39. 畑田城.....	88
40. 柿ノ木城.....	91
41. 鳥越城.....	91
42. 上江城.....	95
43. 古城.....	95
44. 田之上城.....	98
45. 田原陣.....	100

挿図目次

第1図 城構造の概念図.....	1
第2図 山城と館跡・陣跡・旧道・古道・番所跡 位置図.....	3・4
第3図 大河平氏館跡 繩張り図.....	7
第4図 大河平城跡 繩張り図.....	8
第5図 今城跡 繩張り図.....	9

第 6 図 永野城跡 繩張り図	11	第32図 園田城跡 遺構分布図	49・50
第 7 図 吉富陣跡 繩張り図	12	第33図 郭Ⅱ東端一堀切一郭Ⅰ西南部 遺構実測図	51・52
第 8 図 藤摩陣跡 繩張り図	14	第34図 郭Ⅰ西側斜面 断面層序図(1)	53
第 9 図 球磨陣跡 繩張り図	15	第35図 郭Ⅰ西側斜面 断面層序図(2)	54
第10図 播磨ヶ城跡 繩張り図	17	第36図 堀切・道路跡・溝状遺構 断面層序図	55
第11図 金丸城跡 繩張り図	18	第37図 園田城跡出土遺物実測図(1)	56
第12図 長徳庵～飯野城跡 繩張り図	21・22	第38図 園田城跡出土遺物実測図(2)	57
第13図 飯野城と屋敷群 分布図	23・24	第39図 園田城跡出土遺物実測図(3)	58
第14図 飯野城跡第1次調査区 遺構実測図	25	第40図 園田城跡出土遺物実測図(4)	59
第15図 飯野城跡第2次調査区 遺構実測図・断面層序図	26	第41図 園田城跡出土遺物実測図(5)	59
第16図 飯野城跡第2次調査区断面図	27	第42図 妙見遺跡 遺構分布・地形図	63
第17図 飯野城跡第2次調査区出土遺物 実測図(1)	27	第43図 妙見遺跡 S D-01・02遺構 断面実測図	64
第18図 飯野城跡第2次調査区出土遺物 実測図(2)	28	第44図 手仕山城跡 繩張り図	65
第19図 飯野城跡第2次調査区出土遺物 実測図(3)	29	第45図 徳満城跡 繩張り図	67・68
第20図 飯野城跡第2次調査区出土遺物 実測図(4)	30	第46図 新城跡 繩張り図	69
第21図 飯野城跡第2次調査区出土遺物 実測図(5)	30	第47図 東福城跡 繩張り図	70
第22図 宮之城跡 繩張り図	34	第48図 松尾城跡・丸之尾城跡・杉尾城跡 繩張り図	73・74
第23図 掃部城跡 繩張り図	35	第49図 赤花城跡 繩張り図	75
第24図 小城跡 繩張り図	36	第50図 古城跡 繩張り図	77
第25図 平城跡(中央部)と周辺地形図	37	第51図 猿ヶ城跡 繩張り図	79・80
第26図 小城跡 繩張り図	39	第52図 三吉城跡 繩張り図	81
第27図 加久藤城・新城跡 繩張り図	41・42	第53図 池山城跡 繩張り図	82
第28図 加久藤城と周辺の地形・ 屋敷群	43・44	第54図 西矢倉城跡 繩張り図	84
第29図 净慶城跡 繩張り図	46	第55図 矢倉城跡 繩張り図	85
第30図 S K-01遺構実測図	47	第56図 溝園城跡 繩張り図	86
第31図 園田城跡 繩張り図	48	第57図 稲荷城跡 繩張り図	87
		第58図 小屋敷城跡 繩張り図	89
		第59図 畑田城跡 繩張り図	90
		第60図 柿ノ木城跡 繩張り図	92
		第61図 鳥越城跡 繩張り図	93・94

第62図	上江城跡 繩張り図	96	第68図	VII・IX区 遺構分布図	105・106
第63図	古城跡 繩張り図	97	第69図	大型掘建柱建物跡	
第64図	田之上城跡 地形図	98		遺構実測図(1)	107
第65図	調査区 位置図	99	第70図	大型掘建柱建物跡	
第66図	発掘坑・遺構分布図	101・102		遺構実測図(2)	108
第67図	II～VI区 遺構分布図	103・104	第71図	田原陣跡 繩張り図	109

表 目 次

表1	出土遺物観察表(1)	土師器・土師質土器・中世国産陶器	31
表2	出土遺物観察表(2)	輸入陶磁器・近世国産陶磁器	32
表3	出土遺物観察表(3)	土製品	32
表4	出土遺物観察表(4)	金属製品・石製品	32
表5	出土遺物観察表(1)	繩文土器・土師器・土師質土器・黒色土器・須恵器	60
表6	出土遺物観察表(2)	土師器・土師質土器・黒色土器・東播系須恵器・中世 国産陶器	61
表7	出土遺物観察表(3)	輸入陶磁器・近世国産陶磁器	61
表8	出土遺物観察表(4)	石器・石製品	61

図 版 目 次

図版1	飯野城跡1次調査区全景、2次調査区遺構検出状態、南東部遺物出土状態	
図版2	2次調査区完掘全景	
図版3	P P-05半截断面層序、完掘全景、P P-22～断面層序	
図版4	P P-34断面層序、東半部掘り込み作業	
図版5	P P-22出土金銅製飾金具、P P-30出土金銅製鍍金金具、P P-22出土炭化粉	
図版6	園田城跡全景(合成写真)	
図版7	郭I北半・郭II完掘近景、郭I南西部道路跡とその周辺・断面層序	
図版8	堀切断面層序、堀切と犬走り	
図版9	堀切～郭I南西斜面・郭I北半完掘状態、堀切周辺北側斜面階段状地山削り出し状態(北 西から)	
図版10	堀切周辺北側斜面階段状地山削り出し状態(北東から)、堀切～郭I北側斜面階段状地山 削り出し状態	
図版11	郭I南西部斜面断面層序、遺構実測風景	

- 図版12 郭Ⅰ南西斜面地山削り出し状況・南壁層序、中断部断面層序
- 図版13 手仕山城跡全景、南東部郭試掘状況
- 図版14 手仕山城跡近景、中央部北側盛土造成による郭面拡幅状況・大走り造構
- 図版15 堀切北半部遺物出土状態、中央部断面層序
- 図版16 郭Ⅱ東端中央部断面層序、南側断面層序、郭Ⅲ南半部純文時代早期遺物出土状態・断面層序
- 図版17 田之上城跡近景
- 図版18 田之上城跡と北田遺跡（集合写真）
- 図版19 VI区完掘全景
- 図版20 VI区南半部完掘全景
- 図版21 VI区北半部完掘全景
- 図版22 S B-05完掘全景
- 図版23 S B-06・09～16とその周辺
- 図版24 S B-07とその周辺
- 図版25 S B-08・60・65とその周辺
- 図版26 VII・VIII区完掘全景

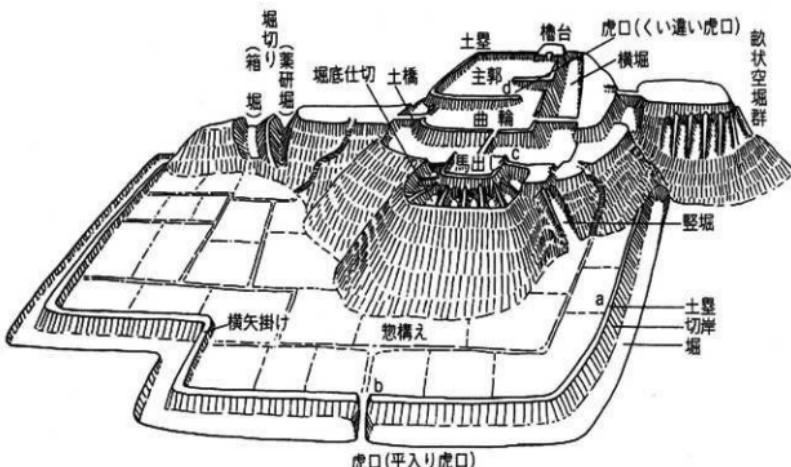
第1章 はじめに

南九州山間部において、その中心的位置には本市の加久藤盆地がある。当地域の北には熊本県の人吉盆地が、西には鹿児島県の大口盆地が、南東には宮崎県の都城盆地があり、これらは加久藤盆地を遙かに凌ぐ規模がある。九州山地と霧島山系に挟まれた当盆地は、東西13km・南北5km前後であるが、肥沃な土壌が豊富な農産物を育み、領土を巡る争奪戦が繰り広げられたのも当然であろう。

平成5年度から10年度にかけて、宮崎県教育庁文化課が主体となり、県内の中近世の城・館・屋敷・砦・要害・陣等について分布調査を実施し、その成果を公表した。⁽¹⁾『報告書I』では地名表・分布地図が、『報告書II』では遺跡ごとの説明と主要城館の縄張り図が掲載された。後者では文章・図面ともに制約があり、全ての城館の縄張り図が出来ていたにもかかわらず、一部しか掲載されなかったのが残念であった。そこで、市教育委員会では、本市における城館等について、詳細に纏めることにした。

本書における用語は、基本的には第1図に準ずるが、「曲輪」は全て「郭」として統一している。また、顯著な畝状空堀群は1例も無く、惣構えの構造を有する山城は、飯野城と加久藤城にその可能性がある程度で、広域的な構造の解明には及んでいない。加えて、土塁や堀などの長さや幅・高さ・深さといった正確な計測値は無い。

なお、近現代の畠地化開墾や宅地造成によって、郭や帯郭等の形状を呈していたり、土壘状に残土があったり盛土されたりすると、遺構として誤認している部分もあると思われる。堀切や堅掘は埋没しているものが多いと思われ、必然的に縄張り図には表現されない。本書掲載の縄張り図は、これら諸要素を含んだ未完成のことであること、調査員によって構造図が若干異なるであろうこと



第1図 城構造の概念図（千田嘉博他『城跡調査ハンドブック』新人物往来社1993より）

は御承知願いたい。

註

(1) 宮崎県教育委員会 「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ」 地名表・分布地図編 1998

同 「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ」 詳説編 1999

なお、「報告書Ⅰ」掲載のカキノ城については詳細不明のため、本書では扱わない。

第2章 城館の分布

現在、山城として39ヶ所（うち、園田城跡については発掘調査後に消滅、田之上城跡については約半分が調査後に開闢整備、赤花城跡については遺憾ながら個人の造成によって消滅）、陣跡として4ヶ所、館跡として2ヶ所を周知している（第2図）⁽¹⁾。

盆地の北面・川内川右岸は高位段丘が主で、開折谷が多い。山城は丘陵の突端や独立丘陵頂部に立地し、盆地を見渡せる地点には必然的に築城されており、300~500m間隔で全山城の3分の2が分布している。対して盆地南面は扇状地や緩傾斜面の広大な丘陵～低位段丘が広がっていることから、占地の条件が悪い。主として中央部、長江川両岸と東部扇状地の北縁に立地し、西部は稀薄である。

山城の発掘調査は少なく、飯野城本丸の部分的発掘⁽²⁾、田之上城跡の郭内23%（16000m²）⁽³⁾、妙見遺跡（全面）⁽⁴⁾、千仕山城跡（平坦面のみ）⁽⁵⁾、園田城跡（平坦面と一部斜面）⁽⁶⁾の5ヶ所にすぎない。少数の調査例からの推定は困難であるが、12世紀後半頃から山城が築かれ始め、中世後半においては、東側は相良氏対策として飯野城と田之上城が拠点となり、中央～西部では加久藤城と徳満城が拠点となったほかは山城や砦的機能の、中世の一定期間のみ存在した山城が多いのではないかと思われる。氾濫原での居住は困難であり、古墳・平安時代以降の集落と重複する山城が多く、園田城のように、柱穴が多すぎて建物の復元が困難な状況となっている遺跡もある。

陣跡は山城とは立地が異なり、眺望のきく高所に構築されている。

註

(1) 旧道や番所跡については『えびの市史』上巻を参照されたい。

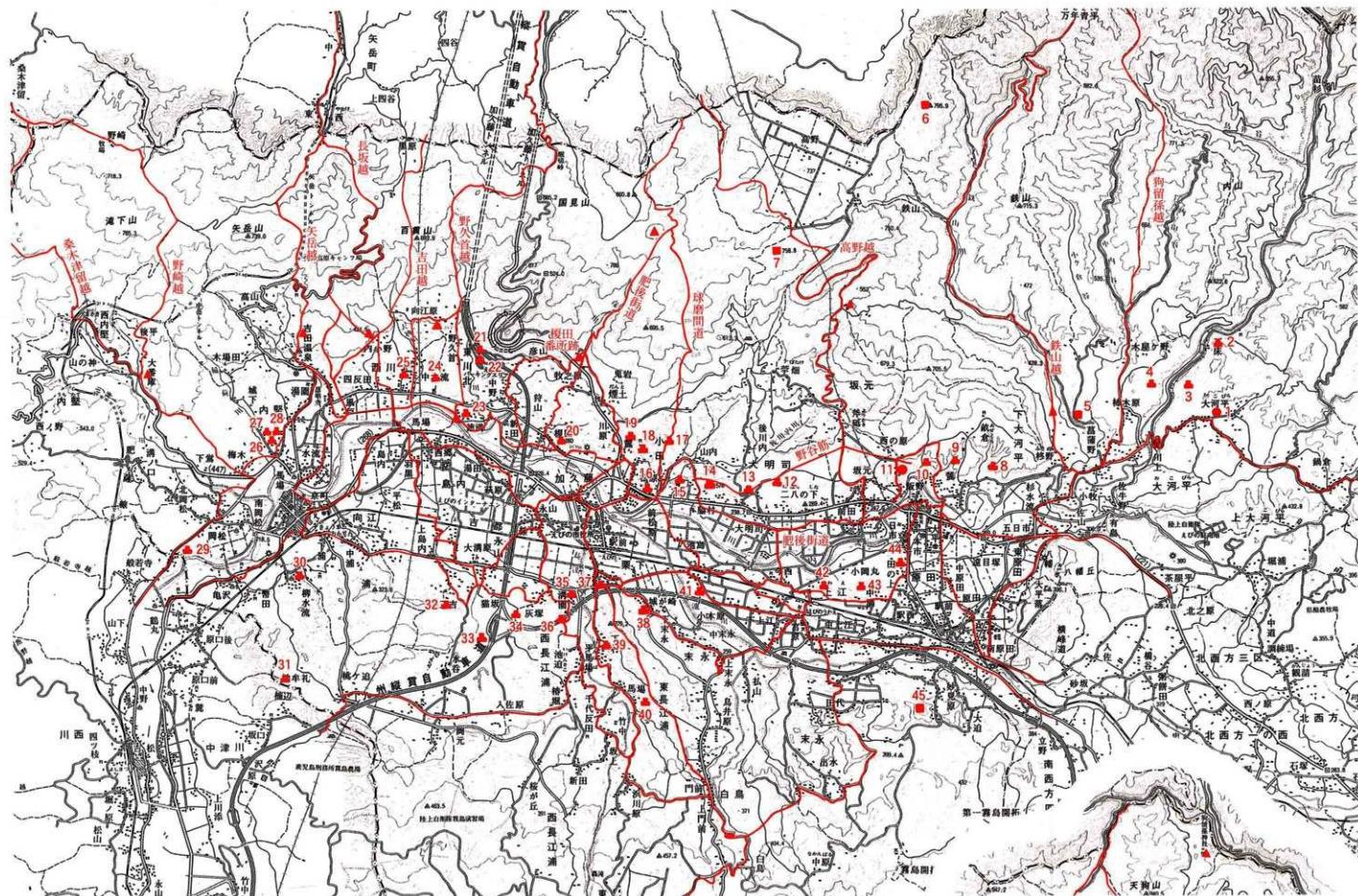
(2) 2次の調査をしているが未報告。本書でその責をはたしたい。

(3) えびの市教育委員会 「小岡丸地区遺跡群」 2003

(4) 宮崎県教育委員会 「野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡」 1994

(5) えびの市教育委員会 「東川北地Ⅳ遺跡群」 2005

(6) 未報告であり、本書でその責をはたしたい。



第2図 山城と館跡、陣跡、旧道、古道、番所跡 位置図 (1 : 50,000) ■:山城 ●:館跡 ■:陣跡 ▲:番所跡

第3章 遺跡の詳細

以下、川内川上流右岸の城館から記述するが、番号は、第1図の分布番号と一致する。

なお、古文書関係の出典は、「報告書Ⅱ」の若山浩章「中近世城郭関係資料目録（2）」を参照されたい。

1. 大河平氏館跡（第3図）

a. 位置 えびの市大字大河平字元屋敷

b. 立地 館跡のある上大河平地区は、下大河平地区より狗留孫川（川内川源流）を渡り、「七曲りの坂」を上り詰めた台地上に立地する。

c. 繩張り 標高371m、比高約100mの広大な台地の北西部に立地している。居館の跡は、現在「大河平小学校」となっているが、間口約140m・奥行き約100mの屋敷地は、周囲を土塁で囲んでいる。道路沿いには水路があり、堀跡の痕跡の可能性もある。

現在の校門は、往時の中央の門跡にあたる。

d. 歴史的背景 北原氏、さらに島津氏に臣事して大河平の地に入った菊池氏の末裔・八代隆房は、その台地の北東部の山を背負った地に居館を構え、その北方に大河平城を築城した。

天正10年（1582）頃、島津義弘の設計で庭園が造られたといわれる大河平左近將監のこの屋敷は、明治10年の「西南の役」で消失したが、大河平隆房が記憶をたどって絵師に画かせた「大河平屋敷絵図」が、えびの市の有形文化財として指定されている。

現在、校門の左右に伸びる土塁上には、当時植えられたといわれる真紅のつつじが咲き誇り、「今城合戦」で全滅した大河平軍の血潮の色に染まった「血潮つつじ」と呼ばれている。

e. 文獻 「大河平家文書」『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994

橋口善昌・高木愛壽『物語り 大河平史』 1997

2. 大河平城（第4図）

a. 位 置 えびの市大字大河平字元屋敷

b. 立 地 えびの市の北東部、小林市と境を接する地にあり、狗留孫峡谷を通って熊本県球磨郡上村へ人吉へ通じる道路を抑える要衝の地にある。

c. 繩張り 標高397m、比高120mの丘陵に立地し、城域は、東西310m・南北200mを測る。主郭は、東端の「山神祠」を祀る区画と思われ、東～北東部一帯に土塁や、切岸が残る。西側には4つの郭があるが、堅固な防御機能がないこの城で、よくも伊東氏の攻撃に耐えられたものだと思われる。

この城より100mほど西、今城へ通じる道路上に小高い丘があり、狗留孫峠谷沿いの道路を一望にできる見張台として使用したものと思われる。

d. 歴史的背景 大河平氏は、もと熊本県の菊池氏の末裔といわれ、大友氏に敗れた八代降屋は球磨郡に入り、相良氏の庇護を受けていたが、相良氏の内紛に遭遇して再び敗れ、真幸院の北原氏を頼り大河平に入った。北原氏の衰退後は、島津義弘（忠平）の家臣となり、北東境日の護りとして大河平の地を貰い、居館の北に大河平城を築き、大河平性を名乗った。

隆屋の孫・大河平隆利の頃、伊東氏がたびたび大河平城に攻め寄せたが、隆利はよくこれを防ぎ、敵を退けたので、忠平はその賞として、加久藤郷内の「鍋（永山）、灰塚、榎田」の3ヶ村を賜ったとある。

城内にある「山神祠」の棟札には、永禄11年（1568）大河平一族は、求麻にあった山神を大河平に移し建立したとあり、藤原鎌足ほかを祀る氏神も一緒に祀ってある。

e. 文獻 『大河平家文書』

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

「飯野古事記」天保11年（1840）『飯野町郷土史』 飯野町 1966

橋口善昌・高木愛壽『物語り 大河平史』 1997

ふるさとの民話えびの版編集委員会『ふるさとの民話』 1992

大河平隆芳『大河平休兵衛隆賢 聞書』 1889

3. 今城 (第5図)

a. 位置 えびの市大字大河平字牧神

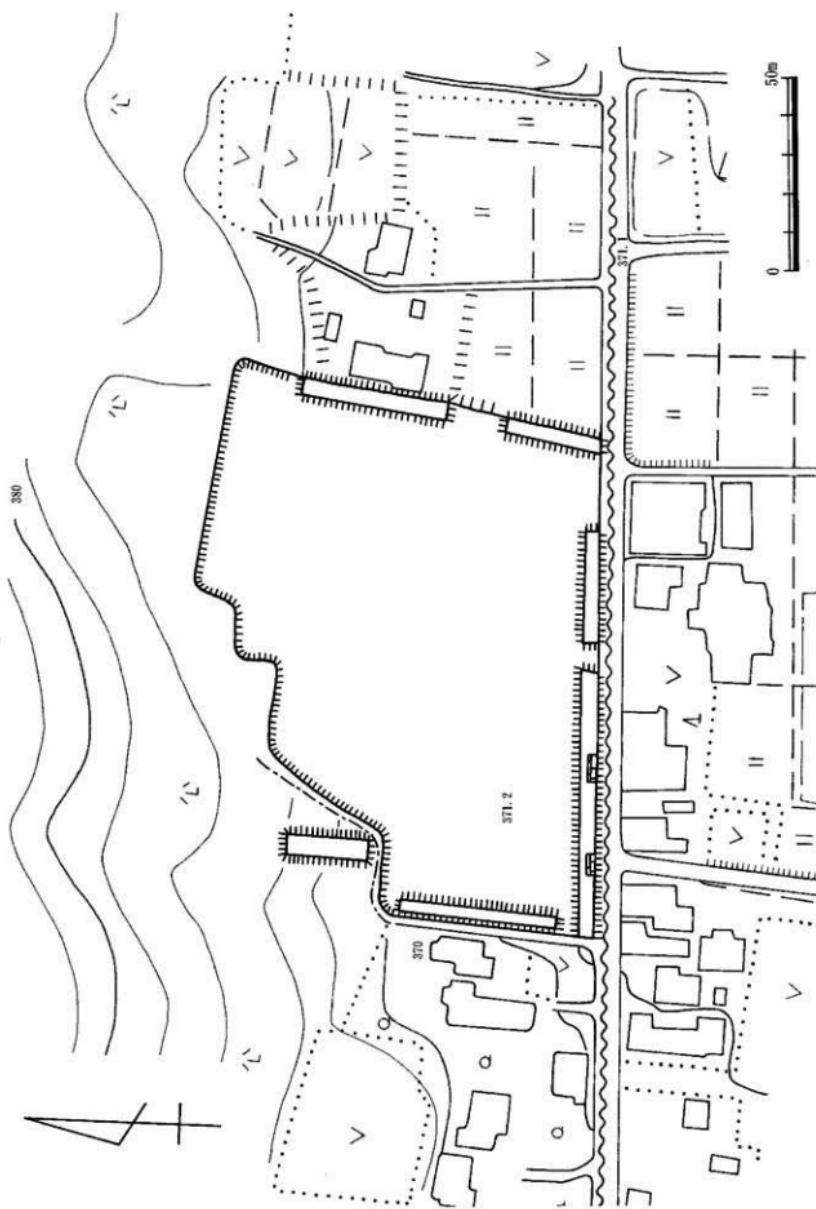
b. 立地 狗留孫川の右岸、大河平城の対岸にあり、真幸院から球磨地方に通じる道を抑える要地である。

c. 繩張り 標高377～386m、比高約100mの2つの尾根に立地し、3方は絶壁と急斜面に囲まれた天然の要害である。西側の頂部に2つの郭と、北端下部にD字型の郭を有する。東側は南北約70mの主郭のほか、その西斜面に3つの帯郭、北には水野城へ通じる縦堀を有する土橋がある。南縁の展望のきく所には物見的要素の強い郭4つが配置されている。土堀は全く認められない。

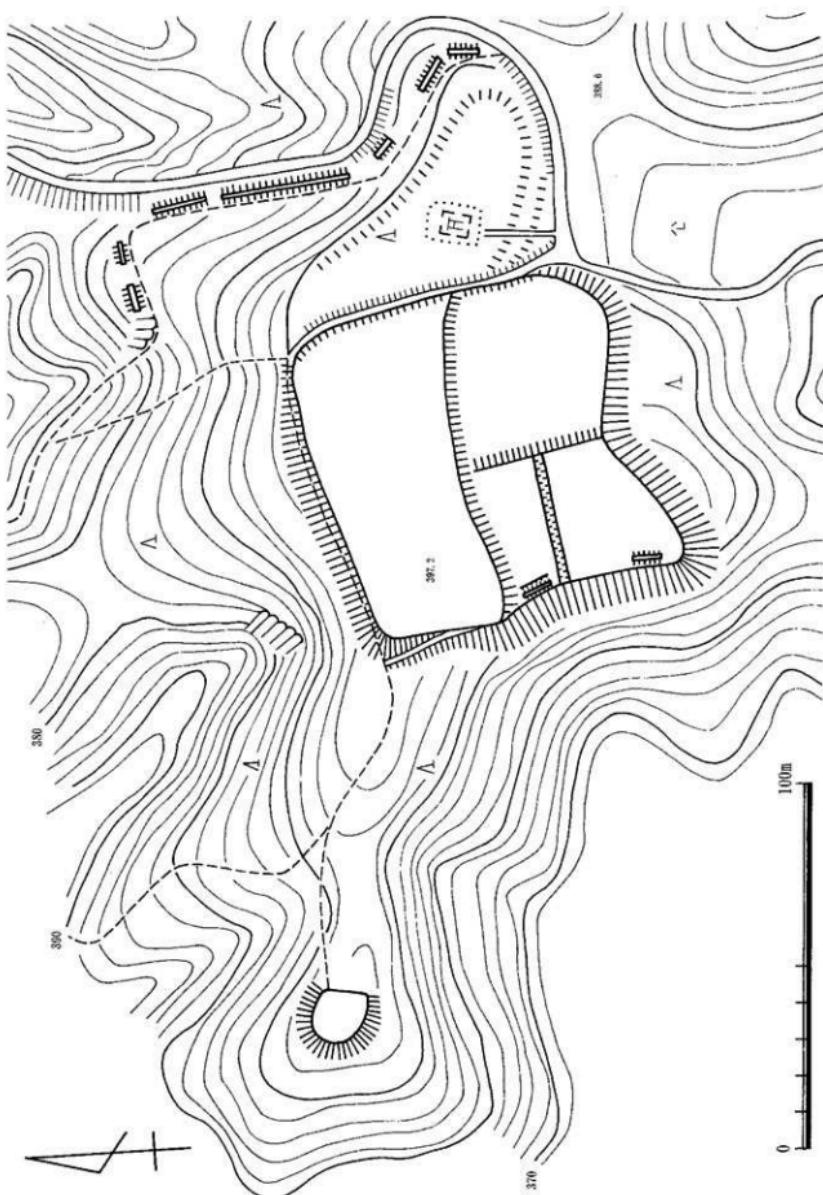
城域は、東西300m、南北350mに及ぶ。

d. 歴史的背景 大河平氏は、はじめ大河平城に拠り、伊東軍の攻撃をたびたび撃退したが、あまり堅固な場所でなかたので、島津忠平に命じられて対岸の要害の地に新しい城を築き、300人の兵で守ることになった。

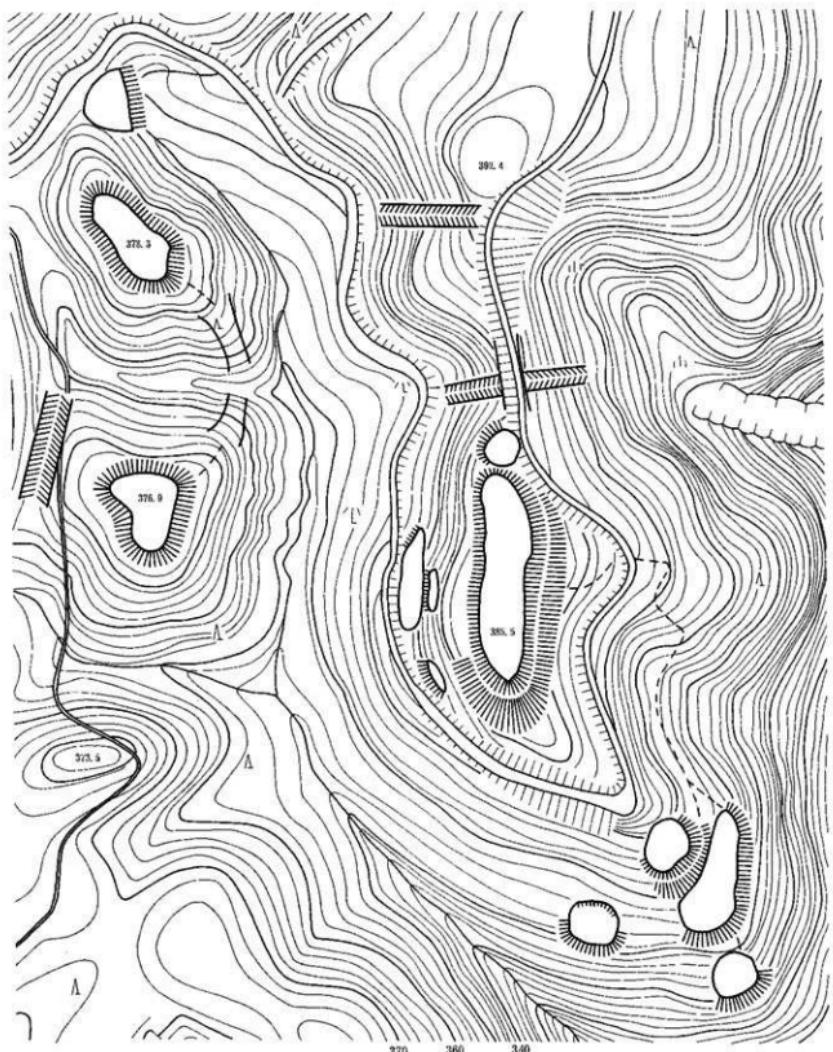
しかし、大河平氏を快く思わない北原氏が、「今城は飯野城に近く、いざという時は飯野城より援軍を出せば事足りる、両方に番兵を置くのは経費の無駄だ。」と進言



第3図 大河平氏館跡 縄張り図



第4図 大河平城跡 繩張り図



第5図 今城跡 繩張り図

したのを受けた忠平が、今城の兵を撤退させた。これを見届けた伊東の大群が、永禄7年（1564）5月29日今城を急襲、飯野城からの援軍も間に合わず、大河平の一族郎党百余人は全滅した。

城主・大河平降次は、再三の伊東の降服勧告にも島津氏一筋と屈せず、15才で戦死した。

e. 文献 『大河平家文書』

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

大河平隆芳『大河平休兵衛隆賢 聞書』 1889

『鹿児島県史料 旧記録類 後編1』 鹿児島県

4. 水野城 (第6図)

a. 位置 えびの市大字大河平字水野原

b. 立地 今城の南西約800m、柿木原の台地の西側にあり、3方を深い谷に囲まれていて堅固そうに見えるが、北方よりは平地で攻めやすい地形である。

c. 繩張り 標高335～344m、比高約70mの尾根に立地し、南北135m前後の郭がある。土塁や堀は認められないが、南方へ突き出た尾根筋に2ヶ所の堀切と1ヶ所の横堀が残るのみである。

現在、館跡と思われる部分は整地されて畠となっているが、おそらく谷によってくびれた部分に堀切と土塁を設けて、北側を防衛していたものと思われる。城域は、東西100m、南北170mである。

d. 歴史的背景 柿木原の土豪・水野氏の居城といわれ、「飯野古事記」に、「城主・永豊仲左衛門は今城合戦の時、大河平氏の加勢として家来數十人と水野城に籠城したが、多勢に無勢で如何ともし難く、伊東氏に降り、今城攻めに加担し」、「永豊氏は今城合戦後に小林へ移り住んだ」といわれている。しかし、大河平隆芳書『大河平休兵衛隆賢 聞書』には、大河平方の戦死者の中に「永豊仲左衛門殿主従十人戦死」とあり、特別に「殿」づけされている。主従十人あるのは永野城の城主等に間違いないと思われ、大河平氏方の文書であるが故に『飯野古事記』の記述が疑われる。

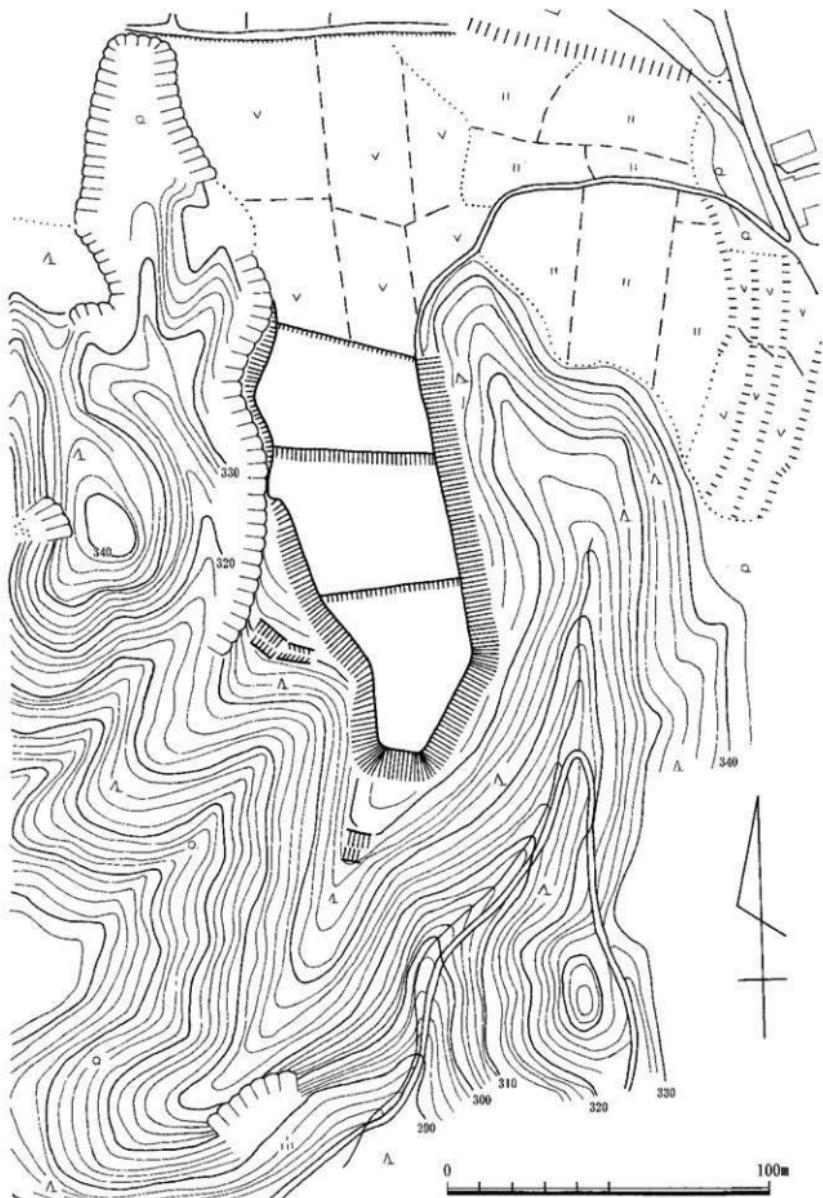
e. 文献 『飯野古事記』 1840

大河平隆芳『大河平休兵衛隆賢 聞書』 1889

5. 吉富陣 (第7図)

a. 位置 えびの市大字大河平字桜野

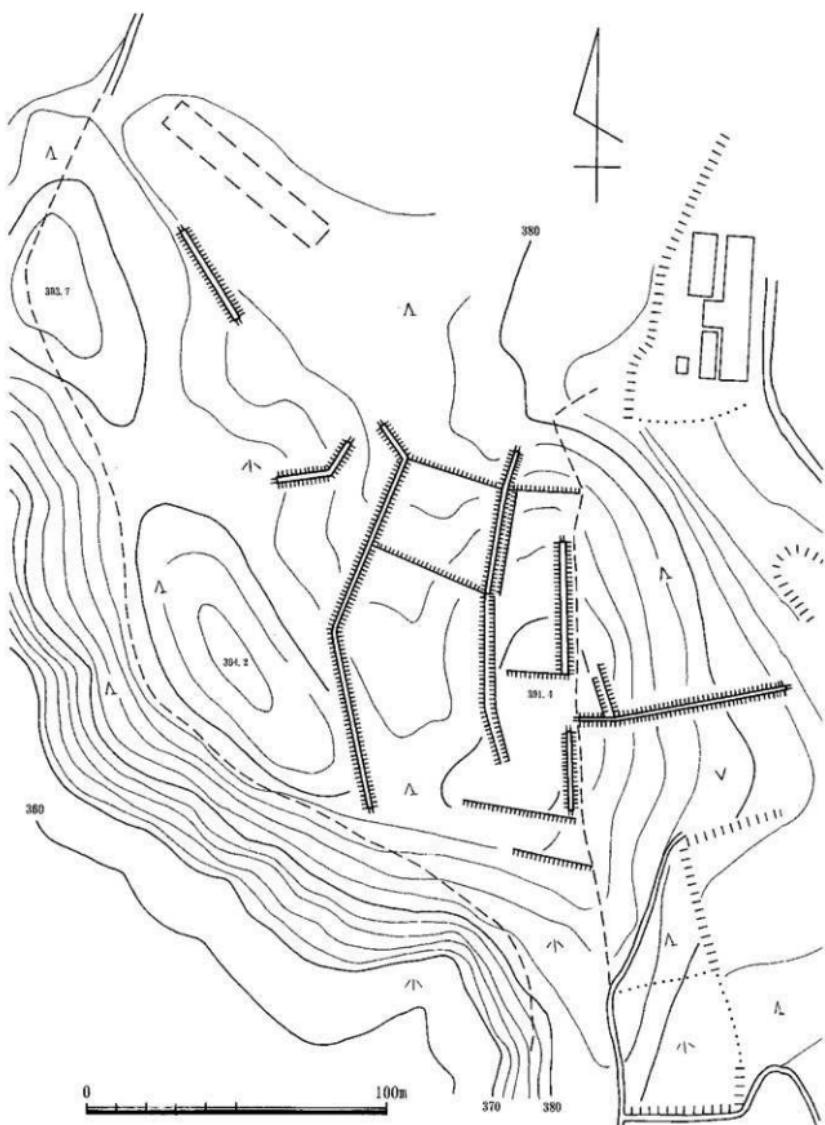
b. 立地 大河平地区より鉄山川沿いの道を通って高野へ至り、熊本県球磨地方へ通じる要路



第6図 永野城跡 繩張り図

があるが、この沿道の急崖の上に位置する。

c. 繩張り 標高382~391m、比高22~31mの尾根頂部~谷部に立地し、土塁と切岸で防御さ



第7図 吉富陣跡 繩張り図

れた郭状の区画がある。城域は、長軸約300m、短軸約130mである。

- d. 歴史的背景 飯野の郷士・吉富兵部左衛門という者の先祖が籠城したといい伝えられているが、詳細は不明である。

小林方面より大河平を通り、球磨へ抜ける街道を譲っていた陣地と思われる。

- e. 文献 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982
『飯野古事記』 1840

6. 薩摩陣(第8図)

- a. 位置 えびの市大字坂元字高野

b. 立地 飯野小学校高野分校の北北東、約1.7kmの台地上にある。

- c. 繩張り 標高760～790mの尾根筋に、約1.3kmの上堤が連なっているほかは顕著な地形改変はみられない。この上堤は高野に国営牧場を作る時に築かれたものといわれるが、昔の土塁を一部に利用して築かれた可能性もある。

- d. 歴史的背景 『三国名勝図會』には「島津義弘が飯野に在城していた時、球磨の相良氏が侵攻する噂があり、陣をかまえて守兵を置いた」とある。また、「飯野古事記」には、同様の理由から「島津義弘が出陣した所といわれる」とある。西南の役の時には、人吉より高野越で攻撃してきた官軍を防衛する西郷軍の防衛拠点であった。

- e. 文献 萩原三左衛門・春田喜左衛門「飯野他領境並内場境麓巡縄引帳」元禄11年（1698）
(以下『元禄縄引帳』と略す)

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

7. 球磨陣(求麻陣)(第9図)

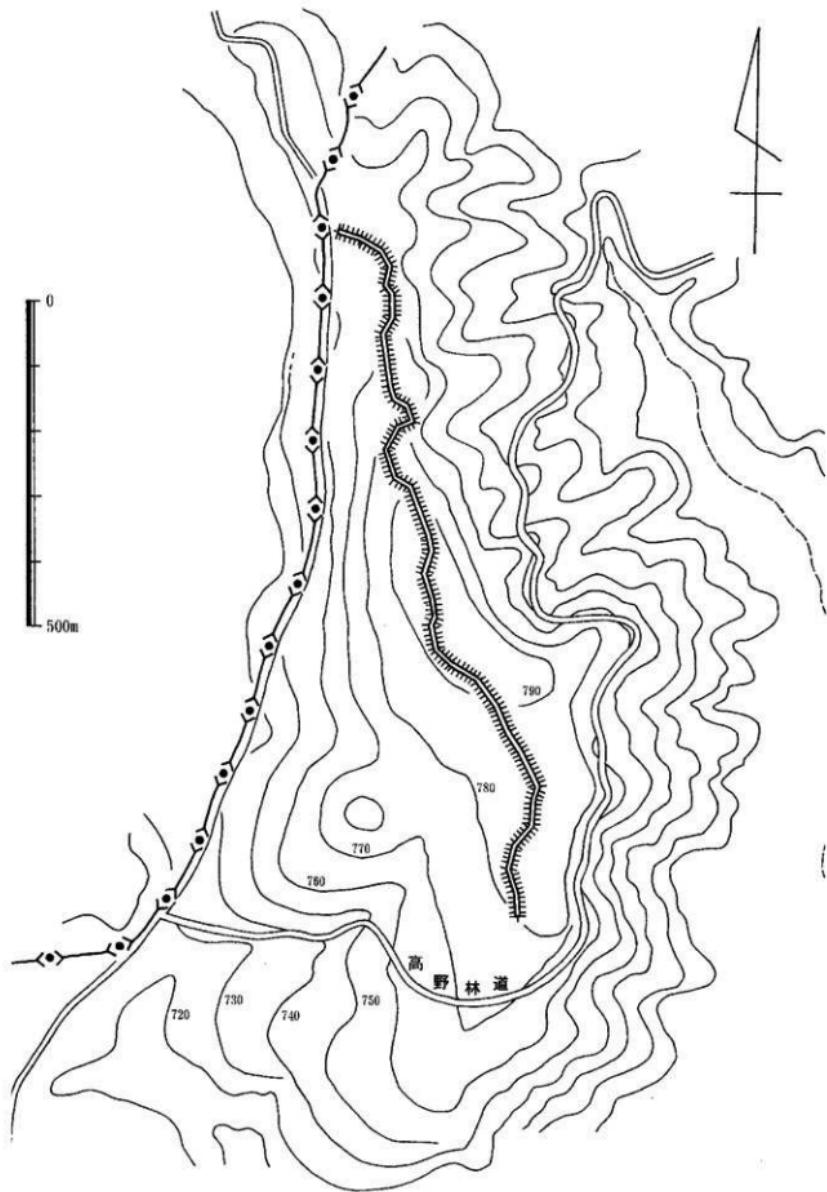
- a. 位置 えびの市大字坂元字高野

- b. 立地 高野畜産団地の南、「海上自衛隊VLF基地」へ通じる道路から約300mの地点にある。

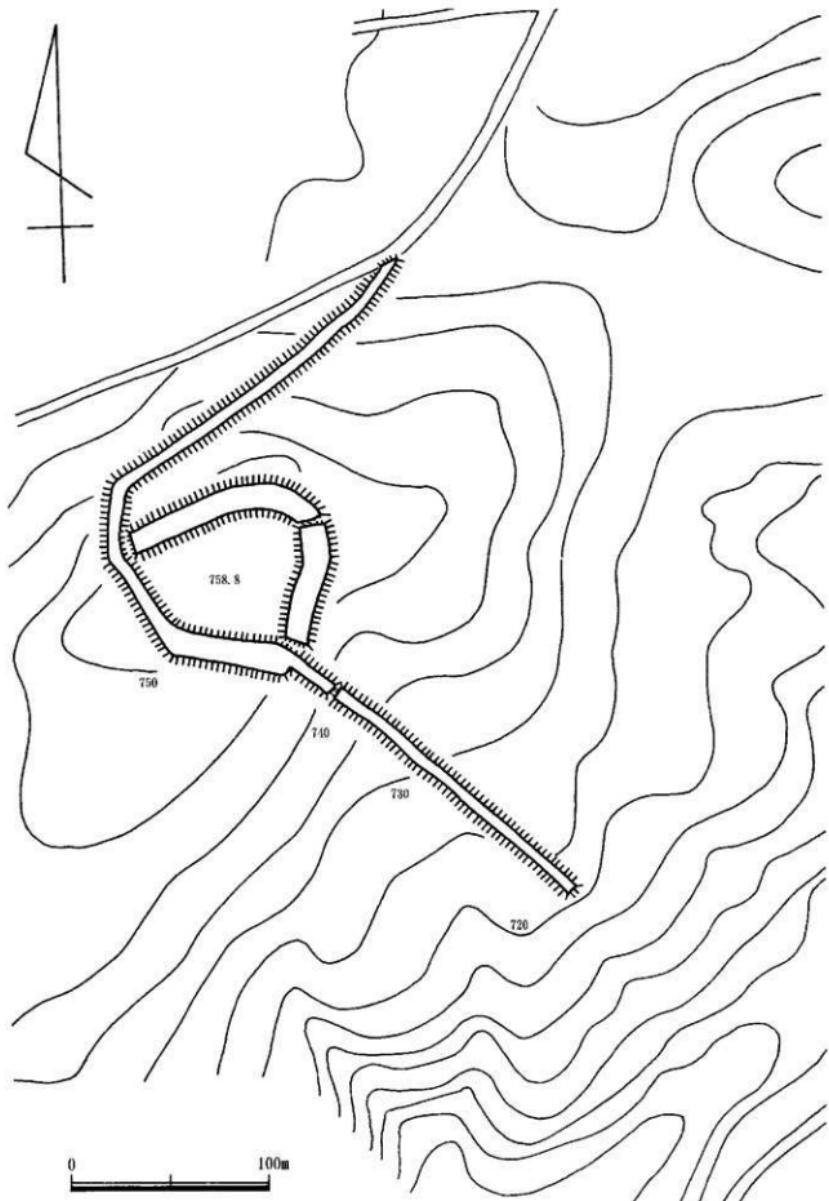
- c. 繩張り 標高759mの丘の頂部に楕円形の陣地と土塁、北東方向と南東方向へ延びる2条の土堤がある。土塁の内径は70～80mの楕円形をなし、中央の径20m程を残して周辺を掘削した土で、高さ3～4m、下幅8.5～11m、上幅2～3mの土塁を築き、北東と南東・北西の三ヶ所に出入口を設けている。

北西の出入口より北東へ約220m、さらに南東の出入口より南東へ約200mの上堤が延びている。これは、牧場の上堤として築かれたものといわれているが、戦国期まで遡る可能性もある。なお、鶴嶋後彦氏は、単郭構造を想定されている。

- d. 歴史的背景 球磨・相良氏の昔の陣地といわれ、元亀3年（1572）の木崎原合戦の時には、



第8図 薩摩陣跡 網張り図



第9図 球磨陣跡 機張り図

伊東氏との約束によって、相良義陽が、左牟田常陸守と深水播磨に兵500を率いさせて伊東軍の応援に駆け付けさせたが、飯野一帯に島津の白旗が多数翻っているのを見見て、薩摩の大群が飯野の救援に来ているものと思い、戦わずしてここから引き揚げたという。

西南の役の際は、「薩摩陣」同様、西郷軍の防衛拠点となった。

e. 文獻 宇雪庵啓堂『郷土拾塵録』自家本 1949~1950頃

『元禄縄引帳』 1698

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

鶴鳴俊彦「えびの市の球磨陣跡（前編）」「南九州の城郭」南九州城郭談話会報第16号 2001

鶴鳴俊彦「えびの市の球磨陣跡（後編）」「南九州の城郭」南九州城郭談話会報第17号 2001

8. 播磨ヶ城 (第10図)

a. 位置 えびの市大字大河平字畔倉

b. 立地 飯野城と大河平城を結ぶ道路を扼える要衝の地に立地する。

c. 繩張り 標高304m・比高44mの高位段丘西端部、「愛染院原」の東南に位置し、約60aの主郭と2本の尾根筋を切る2ヶ所の堀切と3ヶ所の切岸を構築、3方は断崖に守られ、西と南に堀となる川が巡り、郭の東部は狭くくびれて、おそらく堀切とその排水を盛り上げて造った土壘によって入口を固めていたと思われる。城域は、東西190m、南北160m程である。

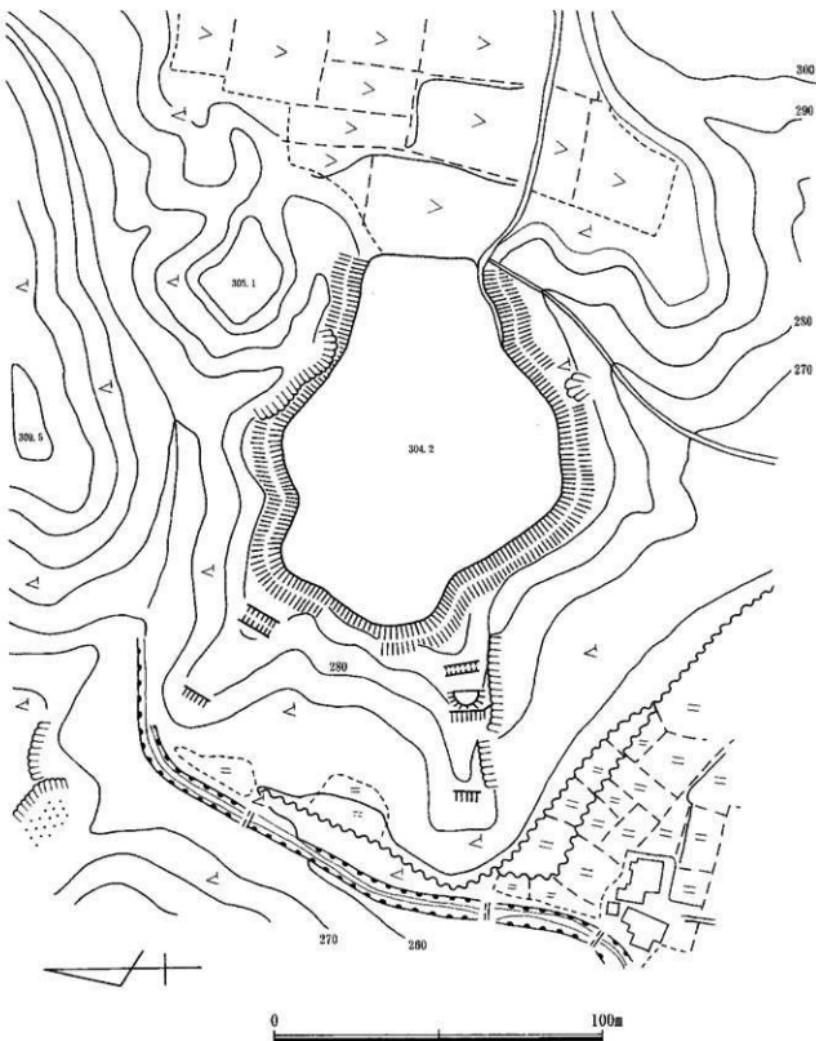
d. 歴史的背景 当山城は、元亀3年（1572）木崎原合戦の折、出陣前の後評議に遠矢下総、佐古田武藏と共に参加した島津義弘の重臣で、田原陣の戦いでも遠矢下総と出向き伊東軍に大損害を与えた黒木播磨守實利が築いた。

黒木播磨守は、その妻女が「粥持田」へ粥を運ばせ、勝闘をあげる島津義弘に献上して、その喉を潤したという逸話でも有名である。

義弘が飯野城を去り、栗野の松尾城へ移る際に、黒木播磨を飯野へ留め置き城を与えた、これを「播磨ヶ城」と唱えると『木脇家文書』にあるが、その所在は永らく不明であった。本書作成にあたり、黒木家系図を手掛かりに調査を進めたところ、その実態が判明した。

e. 文獻 「木脇家文書」『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994

9. 金丸城 (第11図)

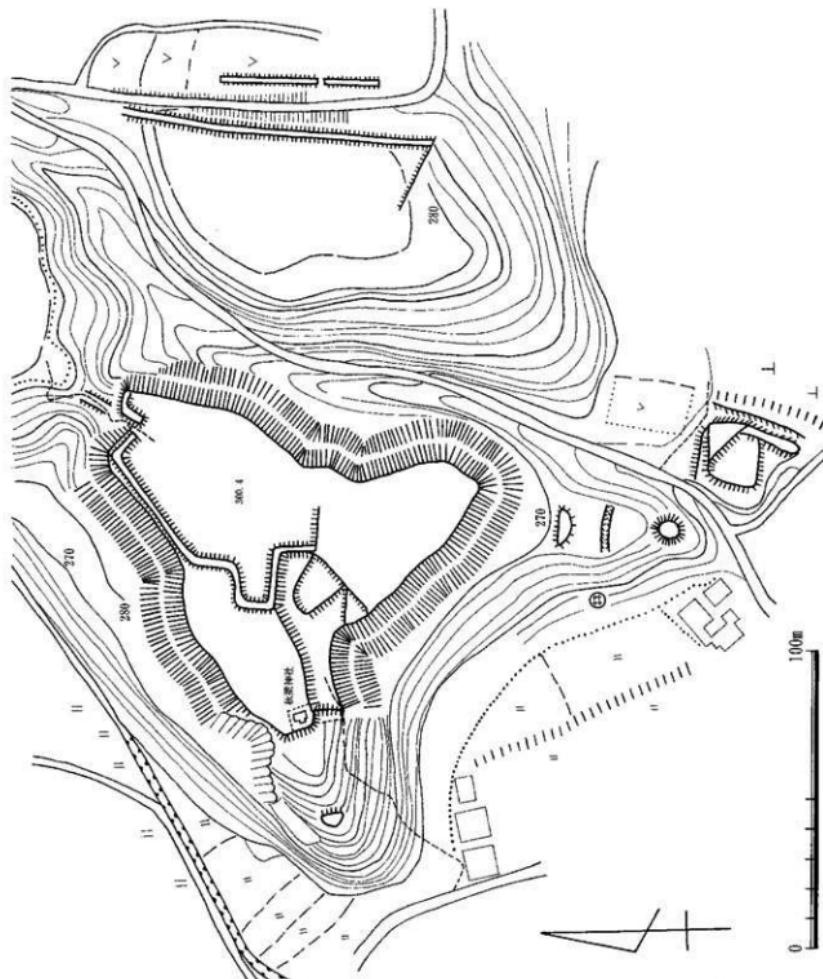


第10図 播磨ヶ城跡 縄張り図

- a. 位置 えびの市大字原田字金丸 はらだ かなまる
- b. 立地 飯野城の東方、約500mの台地「愛染院原」の南端に位置する。
- c. 縄張り 標高300m、比高40mの頂部を主郭とする。北の台地とは土橋で結ばれ、周囲はすべて急崖である。土橋を渡ると虎口を形成し、正面および右手に土塁が残っている。

東方の丘との間にある道路は後年出来たもので、丘の東側に旧道があり、その道に面した所にも土壠跡が見られるので、城の範囲はそこまで含むと思われる。城域は、東西280m、南北240mに及ぶ。

d. 歴史的背景 飯野麓地区より、愛染院、飯野城裏を通り西ノ原地区へ通じる要路を抑えていたものとみられる。以前は、飯野城の三の丸と呼ばれていたが、文書によると飯野城の三之丸は城中にあり、字名から「金丸城」であると断定した。位置的要因から、



第11図 金丸城跡 繩張り図

飯野城の出城と推定される。城中には「秋葉神社」が祀られている。

e. 文獻 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

10. 飯野城 (第12図)

a. 位置 えびの市大字原田字^{はらだ}城内^{じょうない}

b. 立地 えびの市役所飯野出張所の北300m、川内川右岸にあり^き亀城または鶴亀城ともいう。

周囲はシラスの急崖で殆ど直立し、川内川は自然の外堀となり、要害の地である。真幸院を支配した者が常に居住した城であり、真幸盆地を一望にできて、肥後の街道を抑える要衝の地である。

c. 繩張り 標高約300m、比高50mの高位段丘に立地する。南縁の川内川は外堀となり、城の西にはその支流が駿けのばり、南から東に同じく支流の愛染院川が走って内堀の機能を果している。城内には本丸・二之丸・三之丸とあり、さらに見張台・櫛形・弓場などと呼ばれる郭があり、堅堀や土塁・切岸・虎口などの遺構が随所にみられ、わずか10m程ではあるが石垣も残っている。地元古老の話では、住宅や河川の井堰の建設のために、相当量の石垣が取り壊されたり、見張台の南側10~15m程が川内川の増水時に流失したらしい。城域は東西390m、南北300mに及ぶ。本丸の西から長徳庵にかけても様々な地形改変がみられ、北縁には加久藤城へと通じる道路跡(野谷筋)も確認されている。城内本丸の北東隅には「お城荒神」が祀られていた。

d. 歴史的背景 この城は、永暦元年(1160)真幸院の収納使・日下部重貞が築城したが、のち北原氏に替わり、さらに永祿7年(1564)島津忠平(義弘)が入り、27年間居城して各地の戦いにここより出陣した。日向の伊東氏との命運を賭けた「木崎原合戦」の際も、加久藤城救援のためにこの城から出陣して、伊東氏没落へ追い込む大勝を博した。永祿3年(1560)伊東義祐は、娘婿の真幸の領主・北原兼守の内政に干渉し、兼守を小林の三山城に移したが兼守は早世、その娘も若死したので、後継者として馬闘出の馬闘田右衛門を未亡人に娶らせたが、老臣達があくまでも飯野城の民部少輔を立てようとしたので、三山の平良氏に命じて派兵せしめ、民部少輔父予は自刃した。

農臣秀吉の「朱印状」の中に「右之飯野城ニ付 真幸郡 又一郎(烏津久保)ニ可取之候事」との文言があり、飯野城は秀吉によって義弘の次男・久保に与えられたことがわかる。城下には屋敷群がおかれて、東の低位段丘には長善寺や清涼院・明吉庵等の館が密集している(第13図)。中でも長善寺は、応永5年(1396)に七堂伽羅が建立され、日本における禪書の最古の出版物『碧巌録』や漢詩を作る時の辞書『聚分韻略』の配列を替えた三重韻を考案して出版するなど、名を馳せていた。庵仏殿によつて庵寺となり、現在は住職の墓石が数基遺存するのみである。西南の役の際は、官軍

がいち早く占拠して台場を置き対岸を砲撃、川内川を挟んで南岸の西郷軍と約1ヶ月間対峙して攻防を繰り返したが、西郷軍は遂に奪還できなかった。なお、表紙の写真的門扉の年代等は、詳細不明である。

e. 発掘調査概要 平成5年、地元有志の「亀城を守る会」によるブルドーザーが本丸内への乗入口を掘削し、上面も平坦に整地した。平成9年と15年には、建物を建てるという原因により、小規模な発掘調査を実施している。

i) 第1次調査（第14図）

平成9年3月、本丸の南東部、虎口付近の阿舎屋建設に伴い、24m²を調査した。中世の黒灰色土は殆ど削平され、搅乱も多い中、柱穴群を検出した。柱穴は、直径20~30cmのものが多く、最大60cm位である。深さは1m前後のものが多い。また、調査区が狭いため、建物の復元には至らない。出土遺物としては、土師質土器のほか、青磁・白磁・青花があり、15~16世紀の遺物が主である。

ii) 第2次調査（第15・16図）

平成15年4月、本丸の北東部37m²を調査した。遺物包含層は5~10cm程度遺存しており、アカホヤ火山灰上面で遺構検出をした。特筆すべき遺構として布堀りの柱穴がある。布堀りには幅80cm前後・深さ1m前後の柱穴2基分のものと5基分のものがあり、1間間隔で並列する（最も太い線）。当遺構は北面に廟（他の面は不明）を有する大型の建物であり、2km対岸の田之上城跡05号建物（16世紀後半~末）と同類の構造と思われる。このほか、東から2列目に幅30~40cm、深さ60cm前後の布堀り建物や、直径20~60cmの柱穴が50余基、重複している。規模の異なる建物が幾度も建て替えた様子が窺える。出土遺物としては、土師質土器のほか、青磁・白磁・青花・褐釉陶器等の輸入陶磁器、金銅製鍍金金具、金銅製飾金具、炭化糞塊などがある（第17~21図）。炭化糞塊は、東南端の柱穴裏込め土内に混入していた。

田之上城は、文献には一件しか登場しないが盆地東部南側の要所に位置し、同じ構造（布堀り）の建物が存在することから、飯野城並みの重要な城であったと推定される。

f. 文獻 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

「日向国諸県郡」『薩隅日地理纂考』25之巻 鹿児島県教育委員会 1871

田代政謙著、堂屋敷竹次郎訳『新訳 求麻外史』青潮社 1972

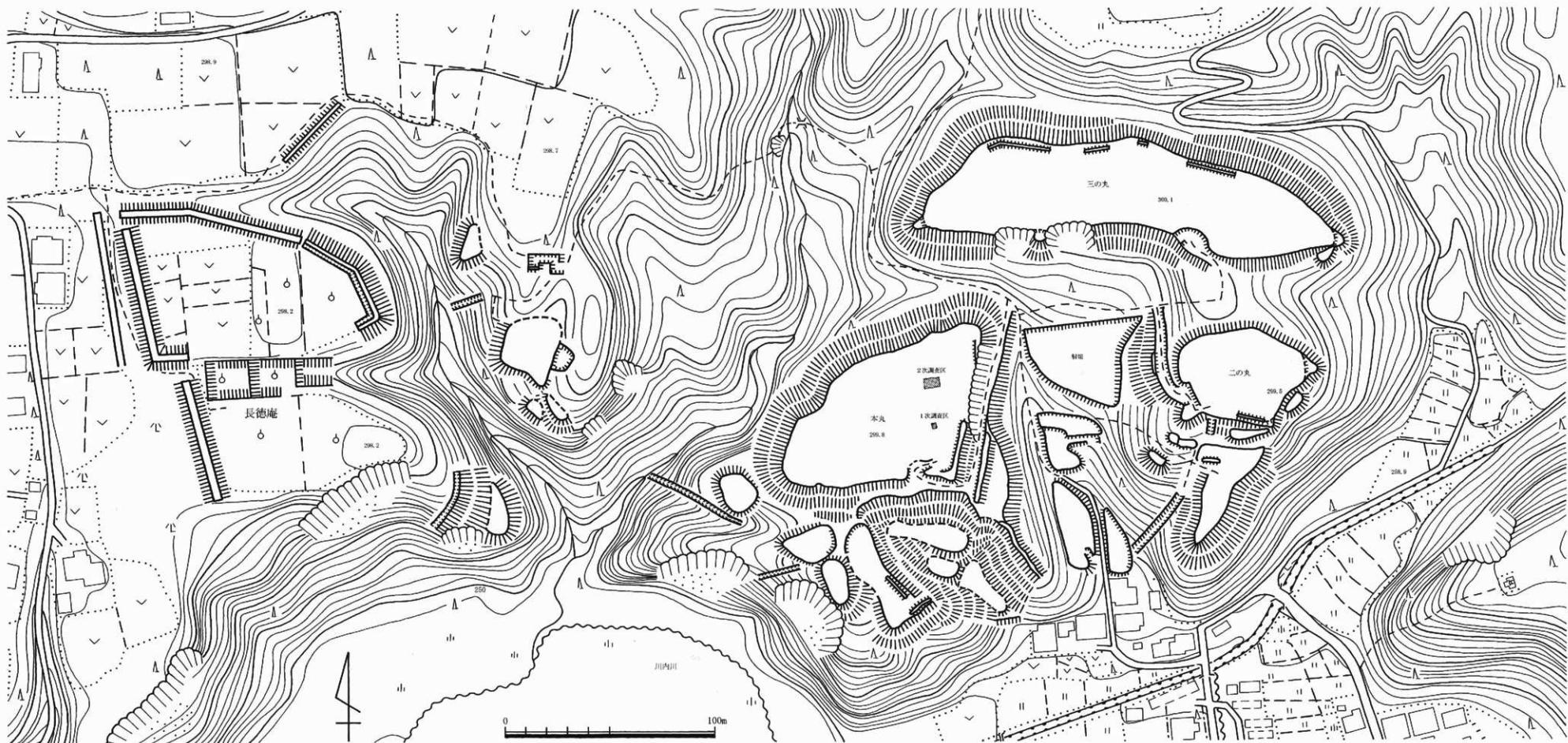
平部嶽南『日向古蹟誌』

「都城島津家文書」「宮崎県史」史料編中世2 1994

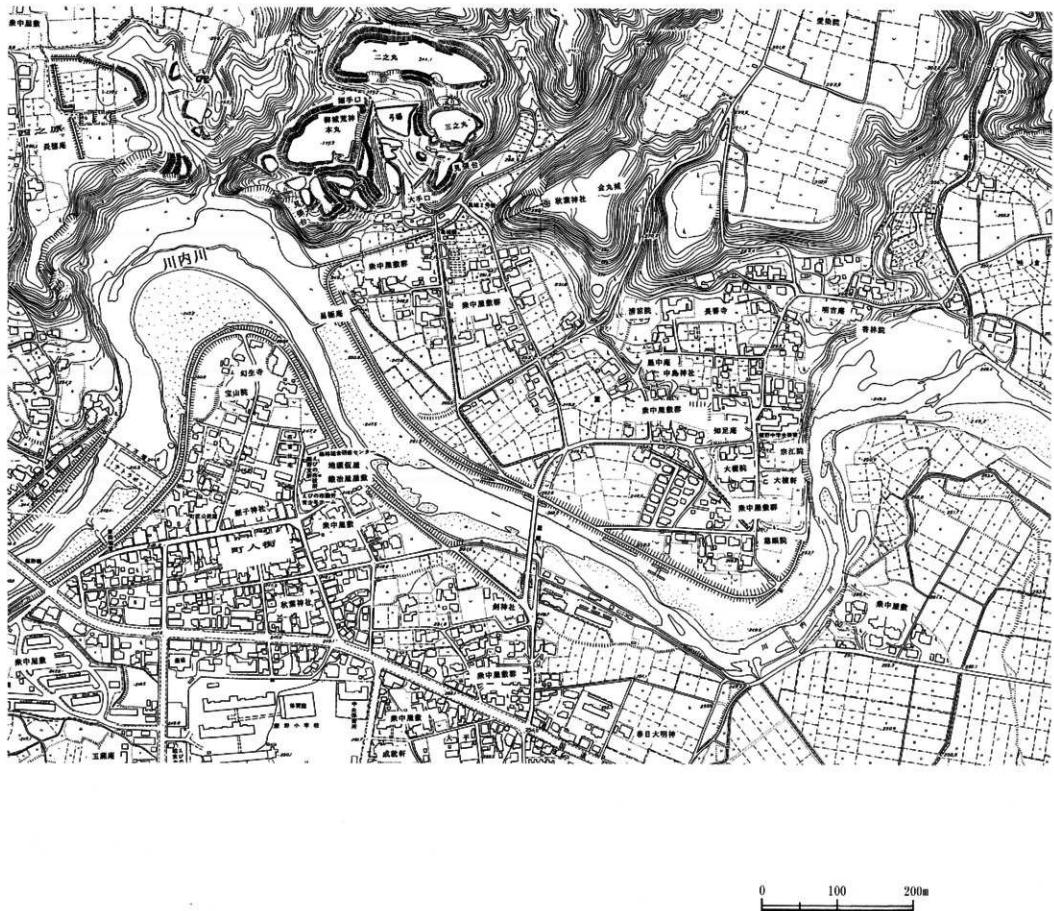
『飯野古事記』 1840

「木脇家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

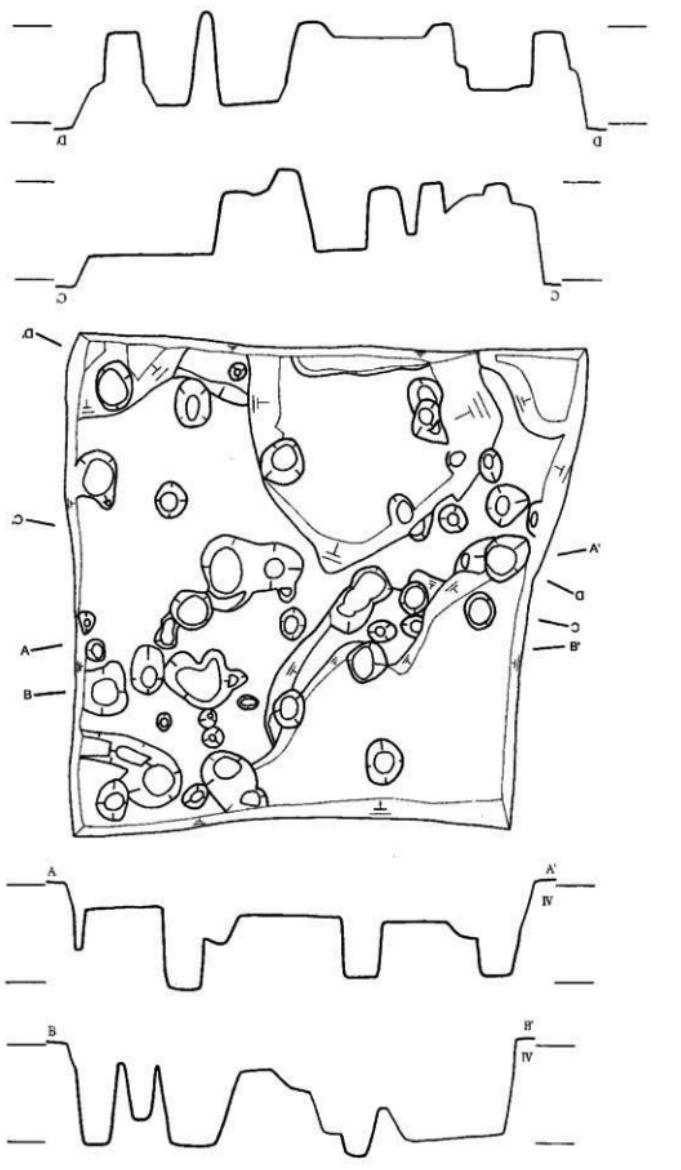
大河平隆芳『大河平休兵衛隆賢 聞書』 1889



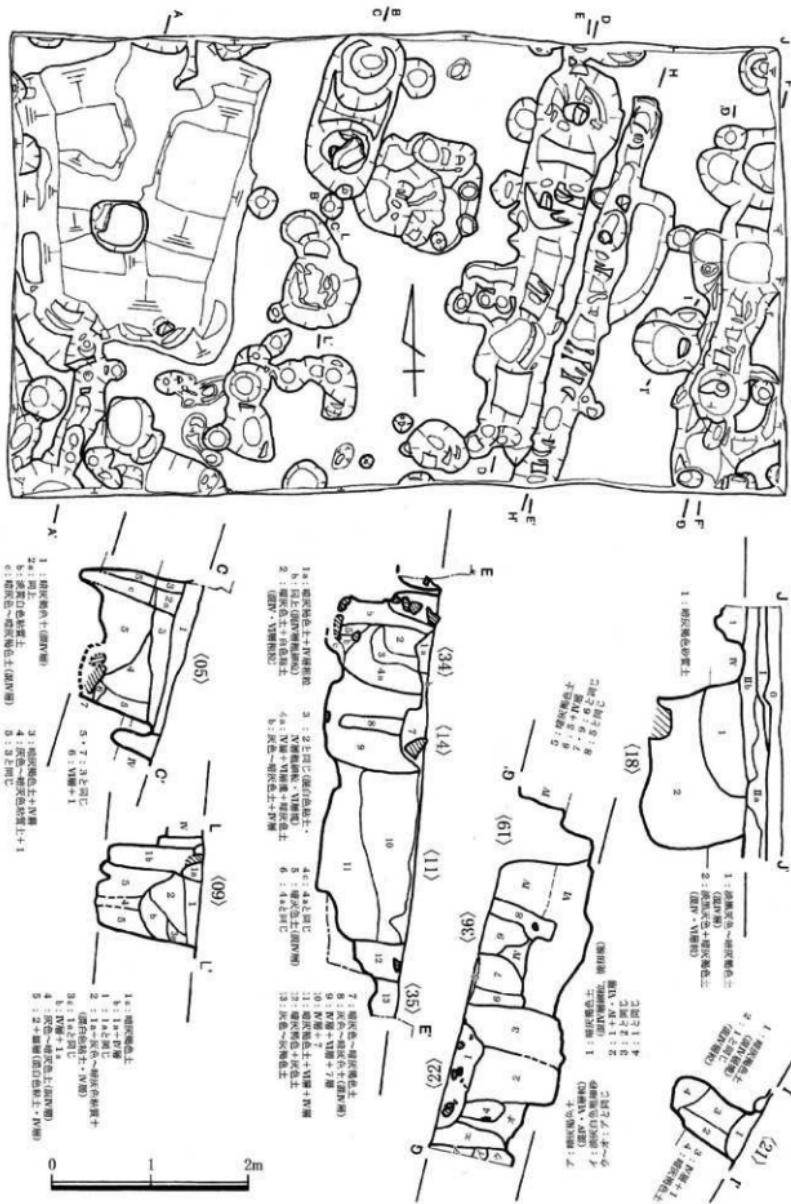
第12図 長徳庵～飯野城跡 繩張り図



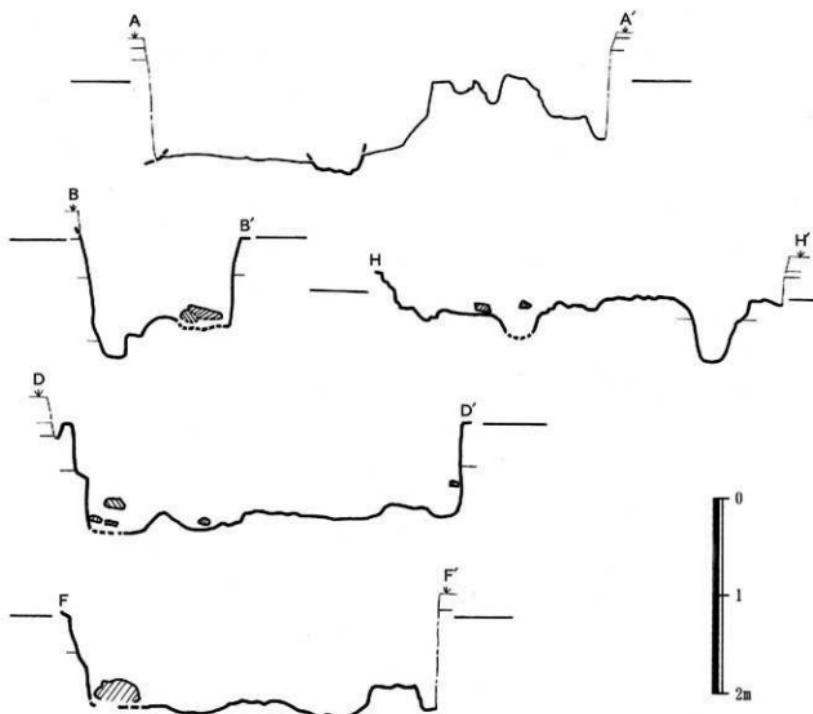
第13図 飯野城と屋敷群 分布図



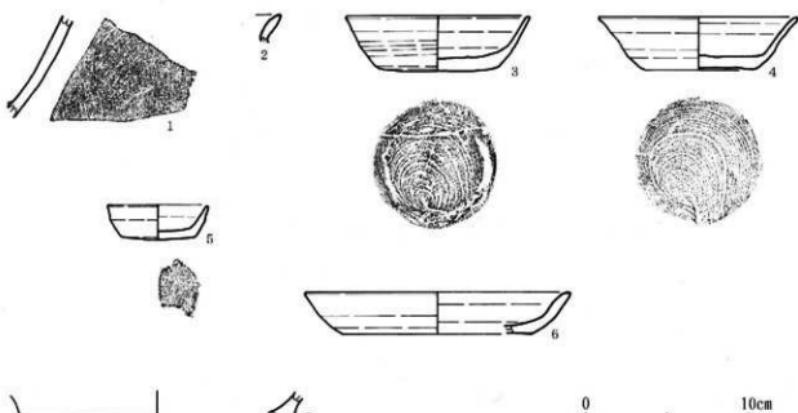
第14図 飯野城跡 第1次調査区 遺構実測図



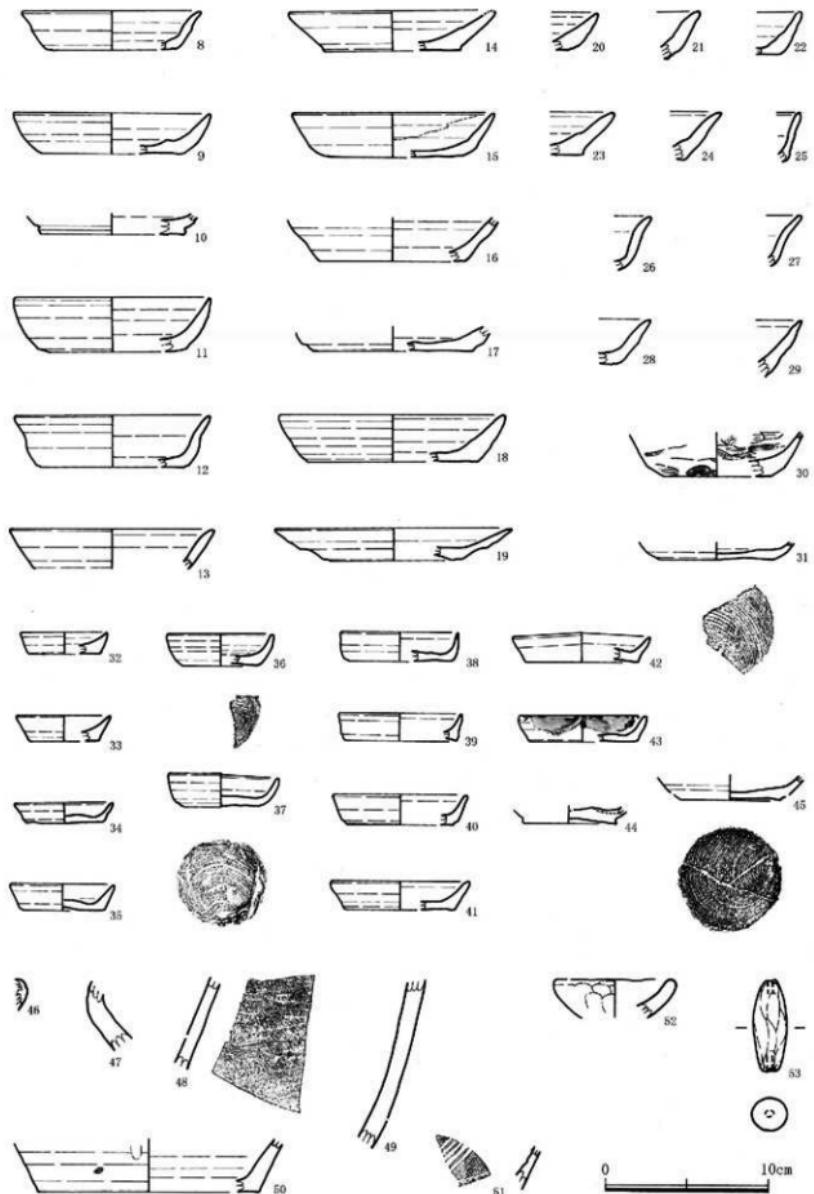
第15図 飯野城跡 第2次調査区 遺構実測図・断面層序図



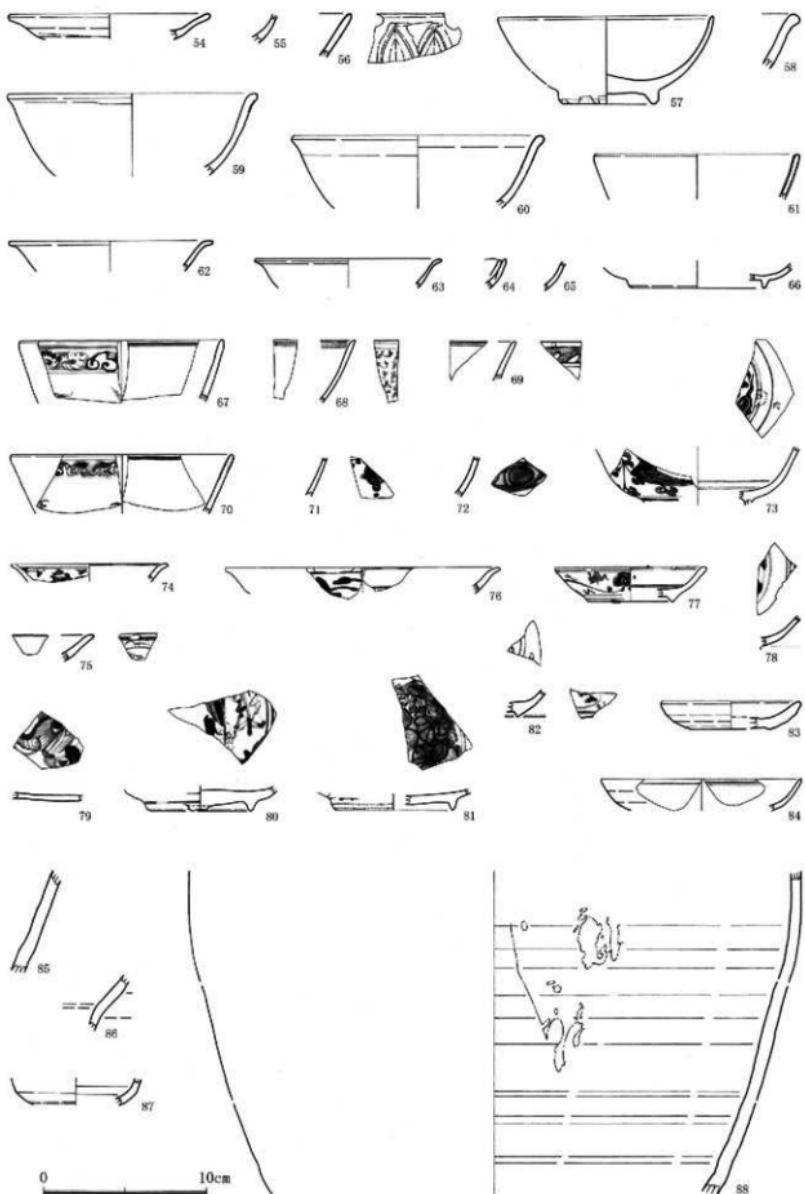
第16図 飯野城跡 第2次調査区 断面図



第17図 飯野城跡 第2次調査区 出土遺物実測図 (1)



第18図 飯野城跡 第2次調査区 出土遺物実測図(2) 土師質土器・中世国産陶器・土製品

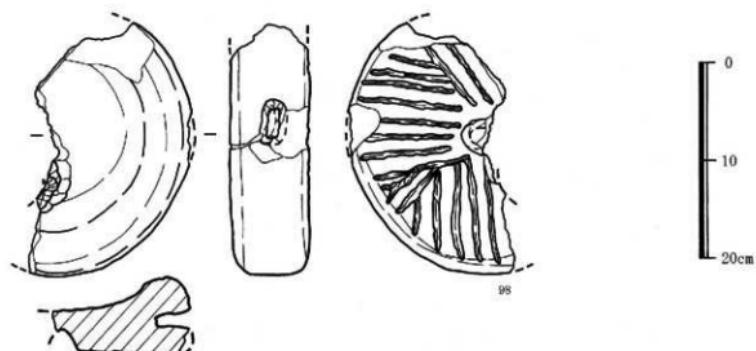
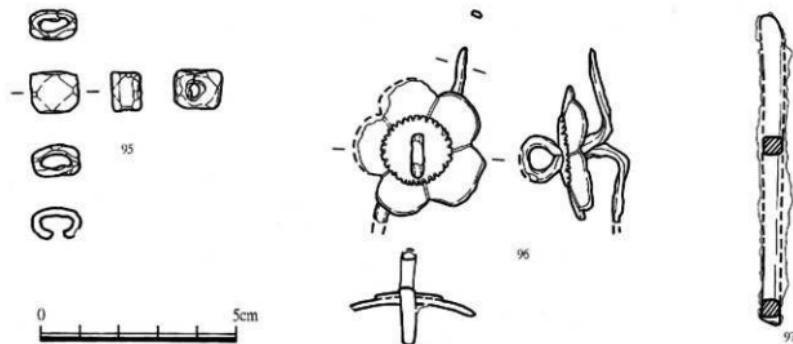


第19図 飯野城跡 第2次調査区 出土遺物実測図（3）

輸入陶磁器



第20図 飯野城跡 第2次調査区 出土遺物実測図（4） 近世国産陶磁器



第21 飯野城跡 第2次調査区 出土遺物実測図（5） 金属製品・石製品

表1 出土遺物観察表（1）上師器・土師質土器・中世国産陶器

No	出土地	種類	器種	法量 (mm)			調 整		胎 上	焼成	色 調		備考
				口径	底径	高さ	外 面	内 面			外 面	内 面	
第1群	P P -09	上師器	甕	—	—	—	ハケ	丁草ナデ	良	良	褐黄一淡系灰	灰白一淡系灰	漆繪灰
2	P P -14	土師器	甕	—	—	—	ナデ	二具ナデ	精良	良	淡黄白	淡黄白	口徑約17cm
3	P P -27	上師質土器	壺	113	72	35	ナデ、糸切り	ナデ	精良	良	淡褐一淡茶褐色	淡褐褐色	
4	P P -26	土師質土器	壺	123	68	33	ナデ、糸切り	ナデ	赤褐色少量	ややあまい	淡青灰一淡褐色	淡褐色	
5	P P -26	土師質土器	小壺	60	44	22	ナデ、糸切り	ナデ	赤褐色少量	ややあまい	淡褐白	淡褐色	
6	P P -11	上師質土器	甕	164	115	31	ナデ	工具ナデ	精良	ややあまい	淡黄白	淡黄白	
7	P P -26	土師質土器	壺	—	162	—	マツツ	マツツ	精良	ややあまい	淡青白一橙褐色	淡黄白	
8	P P -09	上師質土器	甕	110	75	25	ナデ	ナデ	茶褐色少量	良	褐	褐一淡褐	
9	P P -11	土師質土器	甕	119	85	26	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色少量	ややあまい	淡黄一淡青灰	淡青灰一淡青灰	
10	P P -11	土師質土器	甕	—	87	—	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色少量	良	淡盤	淡褐褐色	
11	P P -11	上師質土器	甕	119	91	34	ナデ、糸切り	ナデ	良	ややあまい	淡褐一淡灰褐色	淡褐一淡青灰	
12	P P -13	土師質土器	甕	120	88	32	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色少量	良	淡青白	淡青灰	口徑約17cm
13	P P -28	土師質土器	甕	124	—	—	ナデ	ナデ	良	良	淡褐褐色	淡褐褐色	
14	P P -14	上師質土器	甕	126	85	25	ハラ切り	ナデ	茶褐色少量	良	淡褐褐色	淡茶褐色一淡系灰	
15	P P -21	土師質土器	甕	124	85	28	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色微量	良	淡茶褐色一淡褐	淡褐褐色	
16	P P -07	土師質土器	甕	—	89	—	ハラ切り	ナデ	精良	ややあまい	淡黄白	淡黄白	
17	P P -11	上師質土器	甕	—	98	—	ナデ、糸切り	ナデ	良	ややあまい	淡青灰	淡黄灰	
18	P P -12	土師質土器	甕	138	106	29	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡青白	淡青灰	
19	P P -06	土師質土器	甕	147	75	20	ナデ、糸切り	ナデ	良	ややあまい	青白一橙褐色	淡褐褐色	
20	P P -26	上師質土器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色微量	良	淡褐褐色	黄褐色	
21	P P -11	土師質土器	甕	—	—	29	工具ナデ	ナデ	茶褐色少量	ややあまい	淡青白	淡黄白	
22	P P -18	土師質土器	甕	—	—	—	ナデ、糸切り	ナデ	良	ややあまい	淡褐白	淡褐白	
23	P P -11	上師質土器	甕	—	—	—	二具ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色微量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
24	P P -16	土師質土器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	良	ややあまい	淡青白	淡褐褐色	
25	櫻丸	土師質土器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色微量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
26	P P -11	上師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	ナデ	良	ややあまい	淡茶褐色	黄褐色	
27	P P -28	土師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	ナデ	茶褐色微量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
28	P P -33	土師質土器	甕	—	—	28	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐白	淡褐白	
29	P P -34	土師質土器	甕	—	—	—	ハラナデ	ハラナデ	精良	ややあまい	淡青白	淡褐褐色	
30	P P -22	土師質土器	壺	—	66	—	工具ナデ、糸切り	ナデ	赤褐色少量	ややあまい	青白一橙褐色	淡褐褐色	
31	P P -28	土師質土器	甕	—	70	—	ナデ、糸切り	ナデ	良	良	淡青白一暗灰褐色	黄褐色一黑褐色	
32	P P -11	上師質土器	小甕	53	42	14	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色少量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
33	P P -13	土師質土器	小甕	57	42	16	ナデ、糸切り	ナデ	精良	良	淡褐褐色	淡褐褐色	
34	P P -16	土師質土器	小甕	61	46	13	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
35	P P -26	土師質土器	小甕	63	53	17	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐白	淡褐褐色	
36	P P -26	土師質土器	小甕	63	46	20	ナデ、糸切り	ナデ	赤褐色少量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
37	櫻丸	土師質土器	灯明甕	67	48	20	ナデ、糸切り	ナデ	茶褐色少量	ややあまい	褐一茶灰	淡青灰一淡系灰	
38	P P -26	土師質土器	小甕	71	62	13	ナデ、糸切り	ナデ	微細砂少量	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
39	櫻丸	土師質土器	小甕	75	68	17	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	棕褐色	棕褐色	
40	P P -14	土師質土器	小甕	81	65	19	ナデ、糸切り	ナデ	良	ややあまい	淡青白	淡青白	
41	P P -16	土師質土器	小甕	86	68	18	ナデ、糸切り	ナデ	精良	良	淡褐褐色	淡褐褐色	
42	P P -26	土師質土器	小甕	84	69	18	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
43	P P -14	土師質土器	灯明甕	77	68	16	ナデ、糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
44	P P -36	土師質土器	甕	—	58	—	糸切り	ナデ	良	良	棕褐色	棕褐色	
45	P P -14	土師質土器	甕	—	61	—	ナデー糸切り	ナデ	精良	ややあまい	淡褐褐色	淡褐褐色	
46	櫻丸	土師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	—	粗緻砂や多い	堅密	褐色	褐色	
47	P P -27	土師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	二具ナデ	粗緻砂少量	堅密	茶褐色	茶褐色	
48	E層	土師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	二具ナデ	粗緻砂少量	堅密	褐灰一淡系灰	灰褐色	
49	E層	土師質土器	甕	—	—	—	工具ナデ	丁草ナデ	粗緻砂や多い	良好	灰褐色一淡灰褐色	灰褐色	
50	櫻丸	土師質土器	甕	—	136	—	ナデ	ナデ	粗緻砂少量	良好	淡灰褐色一灰	淡灰褐色一茶灰	粗緻砂
51	P P -27	偏焰燒	粗鉢	—	—	—	ナデ	ナデ	良	良好	淡灰褐色一茶灰	寫紫褐色	

表 2 出土遺物觀察表（2）輸入陶磁器・近世国产陶磁器

No	出土地	種類	器種	法量 (mm)			調整・紋様	施 塗	刷毛色	雜 貌	岸 地	年代・備考
				口径	底径	厚さ						
第10回 54	P P -34	青磁	瓶	121	-	-	-	外面下半	乳白	淡灰オーリーブ	中国	14cか
55	P P -38	青磁	瓶	-	-	-	-	-	淡灰白	淡オーリーブ灰	中国	14cか
56	II層	青磁	瓶	-	-	-	鋪蓮弁枚	-	淡灰白	淡オーリーブ	龍泉窯	13c後～14c
57	P P -22	青磁	碗	131	56	54	-	高台～外腹	淡灰	淡灰オーリーブ	中国	14c後～15c
58	P P -22	青磁	碗	-	-	-	-	-	淡灰～灰	淡灰オーリーブ	龍泉窯	14c後～15c中
59	P P -11	青磁	碗	154	-	-	-	-	淡褐灰	オリーブ	龍泉窯	14c後～15c中
60	P P -11・22	青磁	碗	155	-	-	-	-	淡灰褐	オリーブ	建窑窯	14c後～15c中
61	挖亂	青磁	碗	124	-	-	-	-	淡灰褐	淡オーリーブ	龍泉窯	14c後～15c中
62	P P -21	白磁	瓶	126	-	-	-	-	淡灰白	乳白	景德鎮	16c後
63	P P -21	白磁	瓶	115	-	-	-	-	乳白	乳白	景德鎮	16c後
64	P P -09	白磁	梅花瓶	-	-	-	-	-	淡黃白～淡黃	淡黃白	景德鎮	16c後
65	P P -11	白磁	瓶	-	-	-	-	-	淡黃白	淡綠黃	景德鎮	16c後
66	P P -21	白磁	瓶	81	-	-	鑿付	-	乳白	淡灰白	景德鎮	16c後
67	P P -22	青花	碗	123	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	15c末～16c中
68	P P -11	青花	碗	-	-	-	-	-	白	細	景德鎮	16c前～中
69	P P -16	青花	碗	-	-	-	-	-	乳白	景德鎮	16c前～中	
70	II層	青花	碗	136	-	-	-	-	乳白	細	15c末～16c中	
71	P P -22	青花	碗	-	-	-	-	-	乳白	景德鎮	16c後	
72	P P -05	青花	碗	-	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c後
73	P P -22	青花	碗	-	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c中～末
74	P P -16	青花	碗	96	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
75	挖亂	青花	碗	-	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
76	P P -27	青花	碗	169	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
77	P P -09	青花	瓶	92	52	21	鑿付～外腹	-	乳白	細	景德鎮	16c後
78	挖亂	青花	瓶	-	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c中～末
79	P P -09	青花	瓶	-	-	-	-	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
80	II層	青花	瓶	-	62	-	平取施子	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
81	P P -27	青花	瓶	-	71	-	鑿付	-	乳白	細	景德鎮	16c後
82	P P -05	青花	瓶	-	-	-	鑿付	-	乳白	細	景德鎮	16c前～中
83	挖亂	青花	瓶	84	49	17	-	内底	淡黃白	淡黃褐色	福建窯	16c後
84	P P -06	青花	瓶	122	-	-	内外器縫	-	乳白	杏	福建窯	16c後
85	P P -30	高麗陶器	宋慶壺	-	-	-	-	淡橙黃～淡褐黃	茶泡湯～點茶器	高麗	14～15c	
86	挖亂	高麗陶器	壺	-	-	-	-	-	起源灰	黑褐	高麗	14～15c
87	P P -11	白磁	小口瓶	-	-	-	-	外腹下半	淡黃白	外：桔黃色 内：淡青色	15c	
88	P P -03	高麗陶器	壺	-	-	-	-	-	暗綠色	褐色	14～15c	
第20回 89	挖亂	灰陶器	壺	94	-	-	-	外面下半	淡茶褐色～褐	暗綠色	褐色	16c末～17c初
90	挖亂	燒付	碗	-	-	-	-	-	白	褐	肥前	17c後
91	挖亂	燒付	碗	-	38	-	-	-	淡黃白	乳白、褐	肥前系	17c後
92	挖亂	塗付	油壺	-	-	-	-	-	淡灰	乳白、褐	肥前系	17c後
93	II層	白磁	瓶	-	-	-	-	-	白	白	周易窯	19cか
94	II層	白磁	瓶	-	-	-	-	-	褐色	暗茶褐色～暗綠色	半額窯	17c後か 内側タク

表 3 出土遺物觀察表（3）土製品

No	出土地	器種	法量 (mm)	調 整		新 土	燒成	色 調		備 考
				外 面	内 面			外 面	内 面	
第10回 52	P P -14	埴輪	山形: 71	指頭	ナデ	精良	良好	淡黃～淡灰黃	暗茶褐色	内面に淡褐色～暗赤褐色
53	P P -11	土罐	長さ: 56 深さ: 22	工具ナデ	—	良	良	淡黃褐色～淡褐色	—	色変化有

表 4 出土遺物觀察表（4）金屬製品・石製品

No	出土地	器種	法 量 (mm)			材 質	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第21回 95	P P -30	小刀	12	10	8	金剛	鎌金
96	P P -22	鉄金具	径: 35+18	—	—	—	—

『鳥津家文書』

橋口善昌・高木愛壽『物語り 大河平史』 1997

『元禄繩引帳』 1698

『鹿児島県史料 旧記録 後編 1』

『鹿児島県史料 旧記録 後編 2』

えびの市教育委員会『稻荷下遺跡』 1997

11. 長徳庵 (第12図)

a. 位置 えびの市大字坂元字稻荷下さかもと いなりした

b. 立地 飯野城の西、谷ひとつ隔てた西之原地区にあり、飯野城より加久藤城へ通じる道路上の要衝にある。

c. 繩張り 標高298m、比高50mの台地の西南端部に立地し、区画の3方は、長さ200mあまりの土塁で囲まれ、東方には、60m程の堀、さらに南方には入り込んだ谷筋に3ヶ所の切岸を設けて外敵の侵入を防いでいるが、西方の土塁は更に南の断崖まで約60mも延びている。

d. 歴史的背景 付近には「衆中屋敷（武家屋敷）」も配置されて、有事の場合には飯野城の西方を防衛する拠点でもあったと思われる。

長徳庵は、「飯野城本丸の下境より西方278間（約500m）の所にあったが、元禄（1688～1704）の頃すでに空屋敷になっていた」とある。

e. 文献 『元禄繩引帳』 1698

12. 宮之城 (第22図)

a. 位置 えびの市大字大明司字越シだいめいじ こし

b. 立地 飯野城より加久藤城へ通じる裏道筋、2城のはば中間点（飯野城から2km）に位置し、台地の南突出部にある。

c. 繩張り 標高285m、比高5mの高位段丘で、西方と南方・東方は急崖に守られ、延長230m程の土塁や切岸・堀切等の遺構が残っている。城域は、東西230m、南北240m程である。

d. 歴史的背景 『飯野古事記』には、「畑地」とある。詳細は不明であるが、飯野城と加久藤城との連絡路上の中継地と思われる。

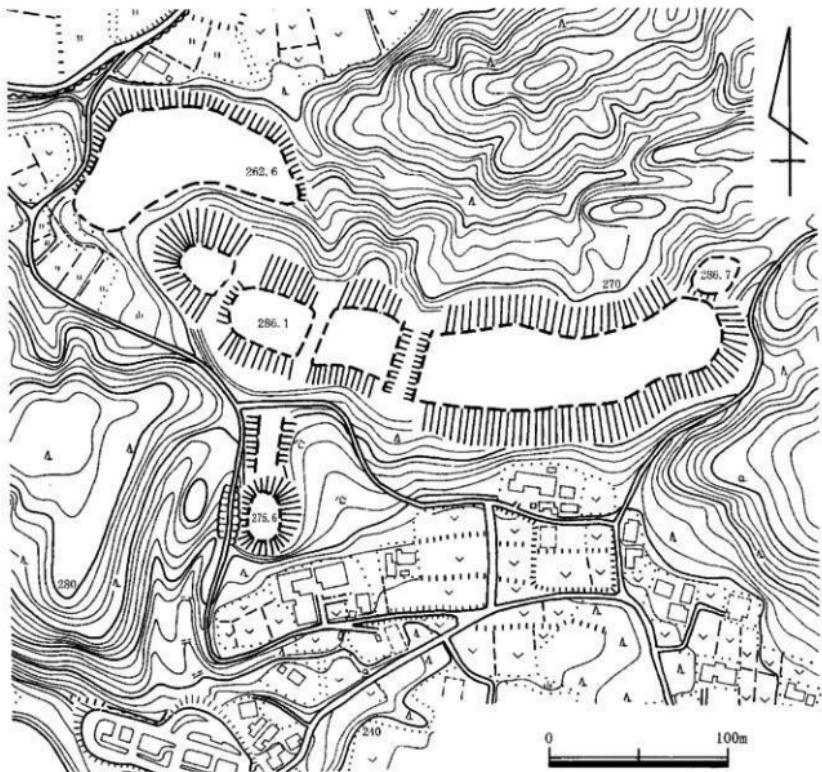
e. 文献 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982
『飯野古事記』 1840

13. 掃部城 (第23図)



第22図 宮之城跡 繩張り図

- a. 位置 えびの市大字大明司字鳥越
- b. 立地 宮之城の西にあり、飯野城より加久藤城へ通じる裏道筋に位置し、台地の突出部、肥後街道を見下ろす位置にある。
- c. 繩張り 標高284~287m、比高約40mの、東西420m、南北130~280mの城域をもち、中央部の堀切で大きく2つに分かれ、さらに2~3の郭に区画されていたようであるが、現況は、芝栽培のために上部を削平されており、遺構等は消滅している可能性が高い。また、南側には物見郭もあったと推定される。
- d. 歴史的背景 「飯野古事記」には「野城」とある。また、「木崎原合戦の際、烏津義弘は加久藤城救援に向かったが、「二八の坂」の上まで至り、伊東軍が木崎原方面へ退い



第23図 掃部城跡 縄張り部 郭は推定

たことを聞き…」とあるが、掃部城の下の「上別府坂」を「二八の坂」ともいうので、おそらくこの掃部城まで来て敵状を調べさせ、ここより鳥越城の伊東軍へ目がけて一直線に駆け下ったものと思われる。詳細は不明であるが、飯野城と加久藤城との連絡路上の中継地と思われる。

c. 文獻 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

『飯野古事記』1840

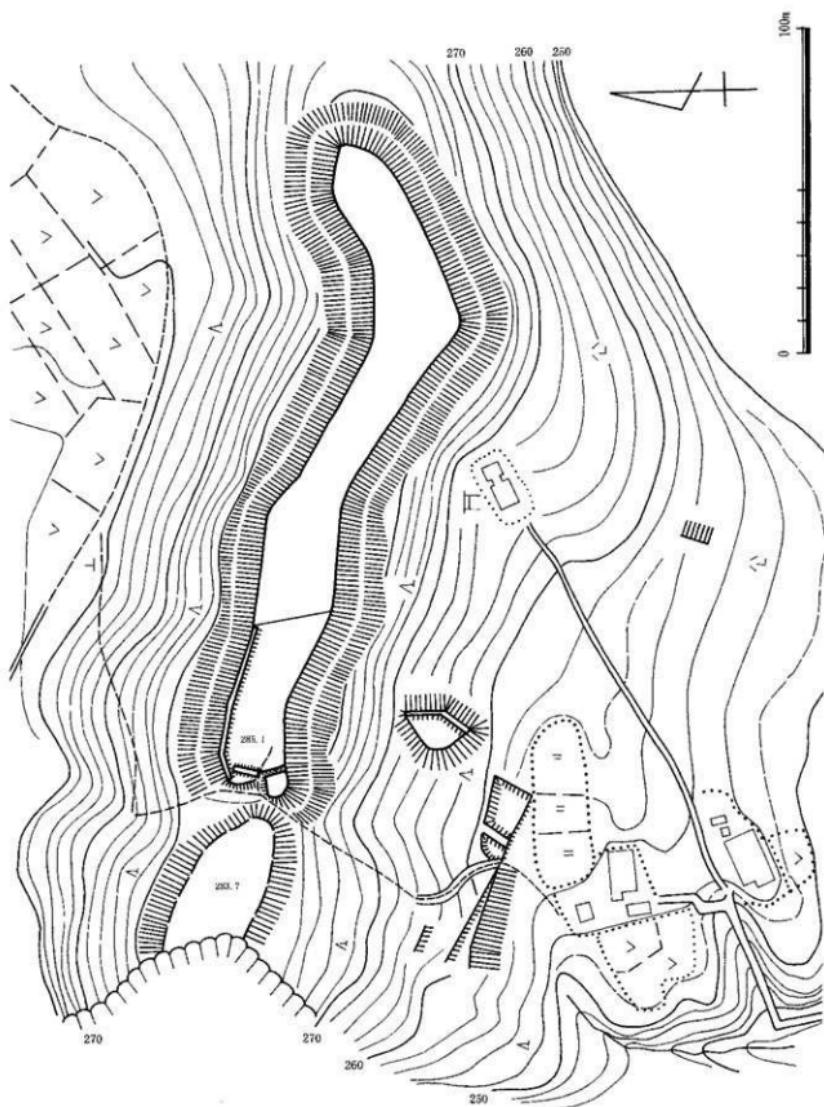
14. 小城 (大明神之城) (第24図)

a. 位置 えびの市大字大明司宇宮本

b. 立地 宮之城、掃部城と同じく飯野城より加久藤城へ通じる裏道筋に位置し、台地の西端

に突出する東西に細長いシラスの丘陵で、肥後街道を見下ろす要衝にある。

c. 繩張り 標高285m、比高54mの痩せ尾根頂部に占地し、東西200mの細長い主郭は急崖に



第24図 小城跡 繩張り図

守られている。遺構は西端部に集中していて虎口や土堀・切岸等が明瞭に残っている。西側の丘は、シラス採取のために半壊している。

d. 歴史的背景 『飯野古事記』には「山城」とある。また、数例の古文書に「大明神之城」「大明司堀」として登場するのがこの城と思われ、相良、伊東、北原（後に島津）の間で激しい争奪が繰り返された。

城内には、島津義弘の三男、家久の産土神「大戸諏訪大明神」が祀られている。

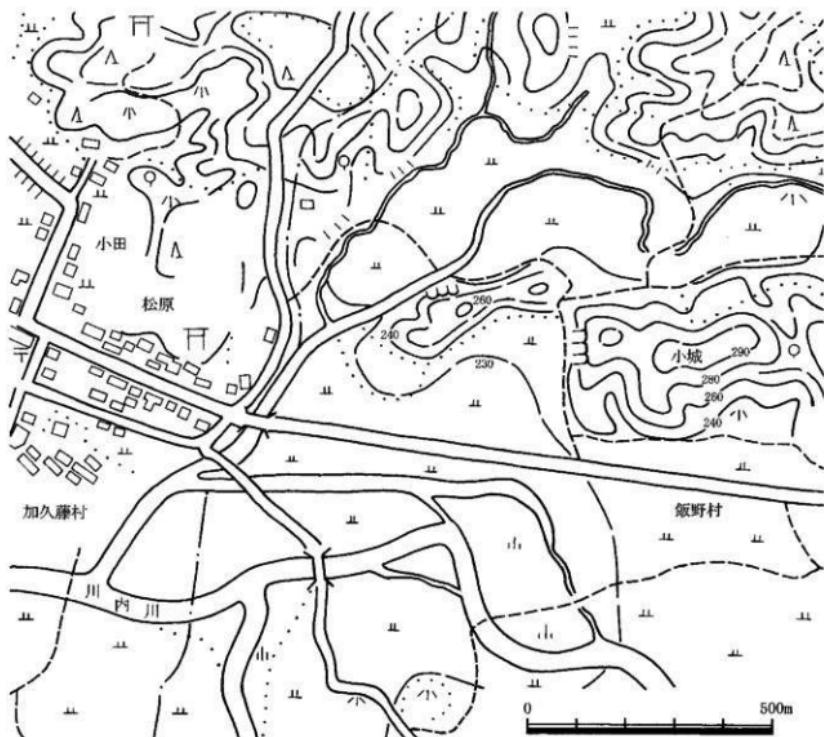
e. 文獻 「木脇家文書」『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994

『飯野古事記』 1840

15. 平城 (第25図)

a. 位置 えびの市大字大明司字平城

b. 立地 小城の西にあった丘陵で、現在はえびの市の「文化の杜」の敷地である。丘陵は削



第25図 平城跡（中央部）と周辺地形図 大正10年発行（1/50,000）地形図を拡大・再トレース

平されて消滅している。

- c. 繩張り 大正10年（1921）作図の地形図（1/50,000）でみると、東西370m、南北70~140m程で、標高260m強、比高20m強の小丘がある。3面程の郭と堀切の存在が推定されるが、詳細は不明である。

- d. 歴史的背景 永祿年間（1558~1570）島津忠平（義弘）の時代に、義弘は井尻神力坊をしてこの城を守らせたという。

西に球磨間道、北に飯野城~加久藤城の裏道が、さらに南は肥後街道が通る要衝の地である。以前は、もっとこの台地が北側まで拡がり、小城からの裏道がここを通って山内地区の球磨間道に連なり新城へと通じていたようだが、北側を流れる後川内川によって崩落をつづけ、現状のようになったという。

現在のえびの市J A・平城基地の場所に、島津義弘が開基させた大戸諏訪神社の別当寺新城山延寿院があったといわれるが、城域内にあったものかどうか詳細は不明である。

- e. 文獻 『元禄縄引帳』1698

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

16. 小城 (第26図)

- a. 位置 えびの市大字小田字廿里

- b. 立地 半城の西に川内川を隔ててあり、同じく肥後街道、球磨間道に挟まれた小丘に立地する。

- c. 繩張り 標高267~269m、比高37~40mの小丘周辺に小郭と切岸が展開する。小丘頂部は明瞭な地形改変がみられない。

- d. 歴史的背景 加久藤城の大手口を守る出城と思われる。川内川に架かる廿里橋より、大手口に通じる小道が現在も城内を横切って残っている。遺構としては、土壘・切岸等がわずかに残っているのみである。

伊東領・小林の内にある岡原諏訪神社の御神体の鎌がこの地へ飛んできて、神木の桜の枝に懸かったといわれる飛諏訪神社が城内南部に祀られ、西麓には義弘公の長男鶴寿丸の墓地のある不動寺跡がある。

松原公民館裏の砂防工事が先年行われた際、飛諏訪神社の東側に、堀切と思われる遺構の跡がみられた。

17. 新城 (第27図)

- a. 位置 えびの市小田字城内



第26図 小城跡 機張り図

b. 立地 加久藤城の東に中城を挟んで位置し、飯野城と加久藤城を結ぶ裏道上の要衝で、深い谷が入り込んで複雑な地形をなしている。

c. 繩張り 標高282~286m、比高50~56mの丘陵頂部に立地し、断続的に土塁を有する。加久藤城の大手口に関わる外城として、広範囲にわたり防御のための造構が随所に見られる。城域は、東西300m、南北350mに及ぶ。

d. 歴史的背景 『三国名勝図會』には、「……松齋公（義弘）加久藤城を築かれし時、取添えの場所なり、加久藤城の南に当たり、一潤（川）を隔てたる城山にて、要害の地なり、この山より飯野城へ通せる山野の小經ありて、およそ一里（4km）なるべし……」とある。

また『木脇家文書』の「真幸院記」には「忠平公（義弘）の奥方は、大明司村の内の新城という所にあって、義弘の三男・家久はこの新城で誕生したので……この新城は領地の中を取添えられた時に加久藤城へ取添えられたので、今は加久藤の内である……」などとある。

加久藤城は、当初本城の「久藤城」のみで、のちに「中城」とこの「新城」を取り込んで「加久藤城」と呼ばれたといわれている。

e. 文献 「木脇家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

『元禄縄引帳』 1698

平部崎南『日向古蹟誌』

加久藤郷『名勝志御再撰方札方帳』 1824

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

『飯野古事記』 1840

18. 加久藤城 (第27図)

a. 位置 えびの市大字小田字笠^{かさ}

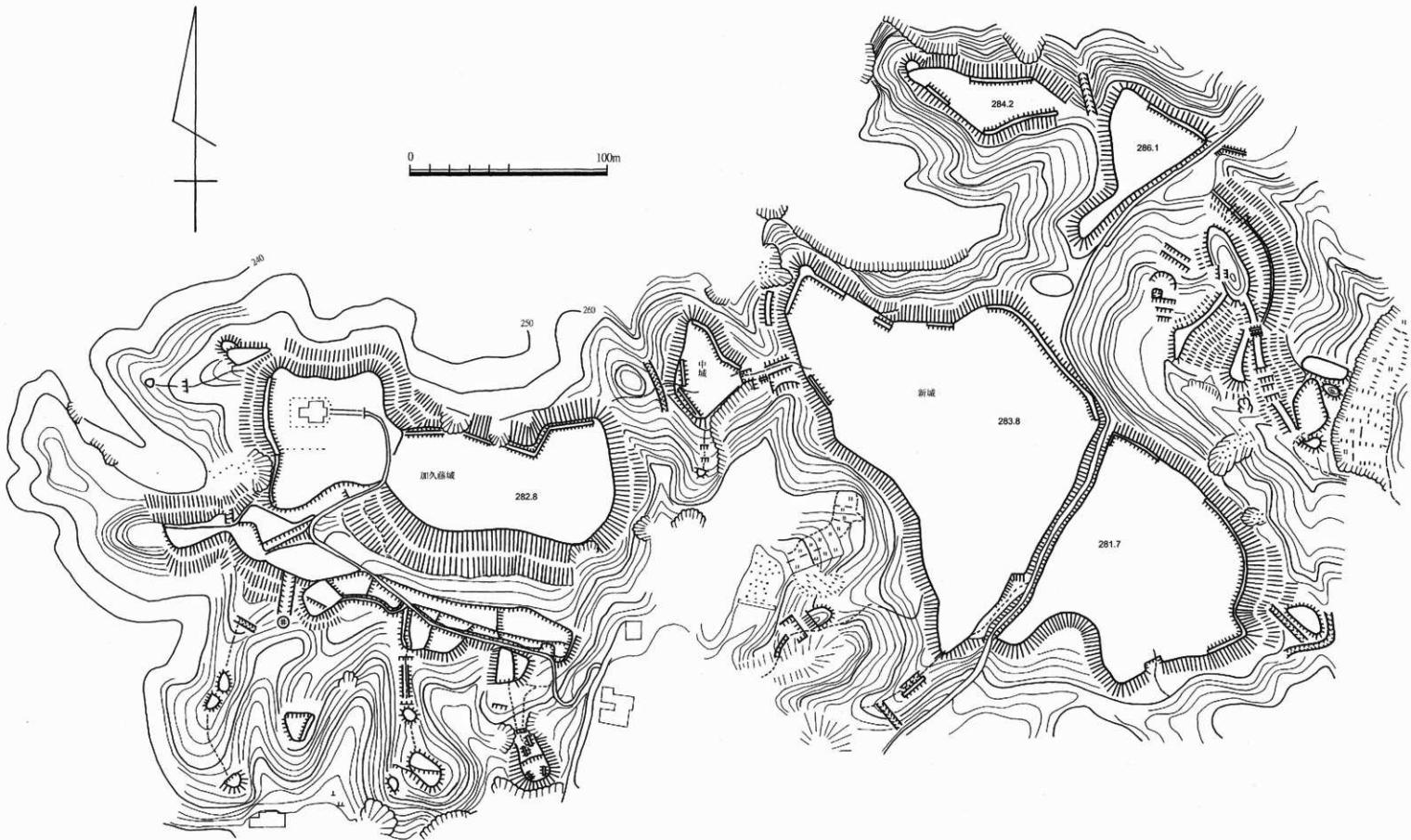
b. 立地 四方は全て断崖のシラスの山岡で、天然の要害である。

c. 繩張り 標高283m、比高53mの独立丘陵の頂部に立地し、島津忠平の夫人を住まわせた「本城」にふさわしく、土塁や縦堀・土橋・樹形・虎口等の造構が見られる。城域は、東西320m、南北270mを測る。

氾濫原には屋敷群が立ち並び、淨慶城・小城も一体となって強固な防衛体制を敷いていた (第28図)。

d. 歴史的背景 初め北原氏の居城「徳満城」の支城であったが、島津忠平（義弘）が北原氏に取って代わった時、「久藤城」と呼ばれていたこの城を修復、「中城」、「新城」を加えて「加久藤城」と名付け、広瀬夫人を住まわせ、川上三河主忠智を城将として守らせ、自らは飯野城へ移った。

元亀3年（1572）の伊東軍との戦い「木崎原合戦」の緒戦は、この城の「鎗掛け口」において戦われた。



第27図 加久藤城・新城跡 繩張り図



第28図 加賀城と周辺の地形・屋敷群 (1 : 5,000)

同じ年、城中に妙見・荒神・水天を祀る「三社大明神」を祀っている。

本丸は「御屋地」といわれ、忠平公（義弘）が住まれたといわれるが、広瀬夫人は確かに居住されていて、この城は忠平公が設計されたといわれる。

忠恒公（家久）の産まれた所といわれる大杉があったが台風で倒れ、その後植えついだというが、現在はない。

長男・鶴寿丸は天正4年（1576）7才で死去、城内に埋葬されたが、7年後に城下の「不動寺」に移された。

- e. 文献 「木脇家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

加久藤郷『名勝志御再撰方札方帳』 1824

『日向国諸郡郡』『薩隅日地理纂考』 鹿児島県教育委員会

『飯野古事記』1840

『鹿児島県史料 旧記録 雜誌 後編1』

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

平部崎南『日向古蹟誌』

19. 浄慶城（第29図）

- a. 位置 えびの市大字小田字内鶴

- b. 立地 加久藤城の鍛掛口の西約100mにある岡で、徳泉寺の寺地を浄慶屋敷といっていたが、この浄慶屋敷の上方に位置する。郭が存在したと思われる地点は、国道221号線によって削失し、一部は道路敷となっている。

- c. 繩張り 標高240~250m付近に土塁と切岸がある他、郭等は不明瞭である。

- d. 歴史的背景 加久藤城の搦手口を守る出城と思われ、木崎原合戦の折、この南約6・7町（600~700m）の小田渡瀬を渡って攻め寄せた伊東軍は、山伏・常陸坊浄慶の屋敷の石垣を、加久藤城の外郭と見過ちこれを攻撃したといわれ、浄慶親子3人は多くの人数がいるように大声で「統けや者共」と叫びながら戦ったが、多勢に無勢、遂に3人とも討死したという。

- e. 文献 加久藤郷『名勝志御再撰方札方帳』 1824

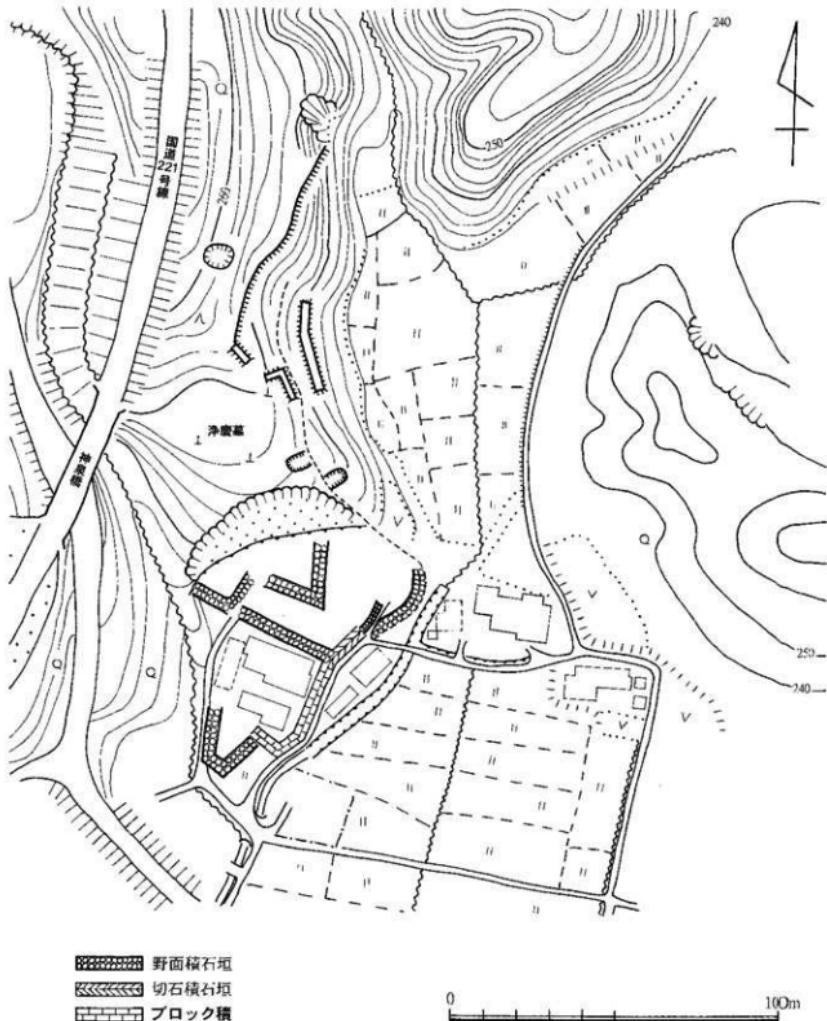
平部崎南『日向古蹟誌』

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

20. 園田城（第31図）

- a. 位置 えびの市大字榎田字園田

- b. 立地 加久藤城と徳満城の中間に位置するシラスの独立丘陵で、加久藤地区全域を眺望できる要所である。



第29図 浄度城跡 繩張り図

現在、えびの高原国際高等学校および国際交流センターの敷地となっており、開発に際して行われた発掘調査によって、記録保存した後、消滅した。

c. 繩張り 城郭は2つの郭に分かれ、郭Ⅰの西端部から郭Ⅱにかけての斜面には、傾斜のゆるやかな谷があり、西と北からの進入路が想定できるが、このほかは急峻なシラス崖

で天然の要害である。

開発に伴う緊急調査によって、山城の存在が判明した。遺憾ながら、縄張り図の作成や地形測量ができなかった。発掘調査結果からすると、大きく3つの郭（I～III）があり、IとIIの境は堀切があり、郭Iは2～3に小溝で区切られていたようである。土塁や他の遺構は確認されていない。また、郭IIIも未調査である。城城は、東西160m、南北240mを測る。

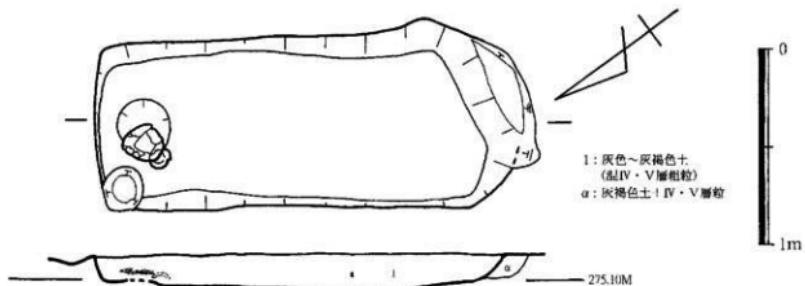
d. 歴史的背景 文献には出てこないため、撲滅的山城ではなかつたと想定される。

e. 発掘調査概要 諸般の事情から、頂部と一部の斜面しか調査できなかつた。しかも古墳時代と古代から中世末まで継続した集落が重複しているために、柱穴が約1,500基も検出され、建物の復元は容易でない（第32図）。際立つきさの柱穴も無く、実体は判然としない。現時点では、掘立柱建物跡15棟が復元できる程度である。

南西部から侵入する道路の覆土から14世紀後半の備前焼鉢等が出土しており、山上集落が、この頃に堀切や区画溝、進入路等を整備・地形改変して砦を築いたようである。

郭Iは、長さ130m、幅20～40m、標高275～276mを測る。西南部で通路が、北西部や西部で階段状の削り出し地形改変がみられた。郭IIは長さ23m、幅10～15mの小さな平坦面で、標高は273mである。立地的に物見郭が想定されるが、搅乱が多く、建物の復元が困難である。

堀切は、幅1.2～1.7m、深さ1.3mの薬研掘りで、南壁には大走りが付随している。出土遺物は細片が多いが、土師質土器のほか、白磁模倣土師器、白磁・青磁・青花などの輸入陶器、石鍋、石鍋片再加工小皿など、多様な遺物が出土している（第37～41図）。山城以前は、古代（9世紀後半以降）の集落や土師器の皿と黒色土器が副葬された上墳墓（第30図）、古墳時代の竪穴住居3棟、縄文時代中期末～後期と推定される平地式住居（SA-04～09、推定）などがある。



第30図 SK-01 遺構実測図 9世紀後半～10世紀前半の土墳墓



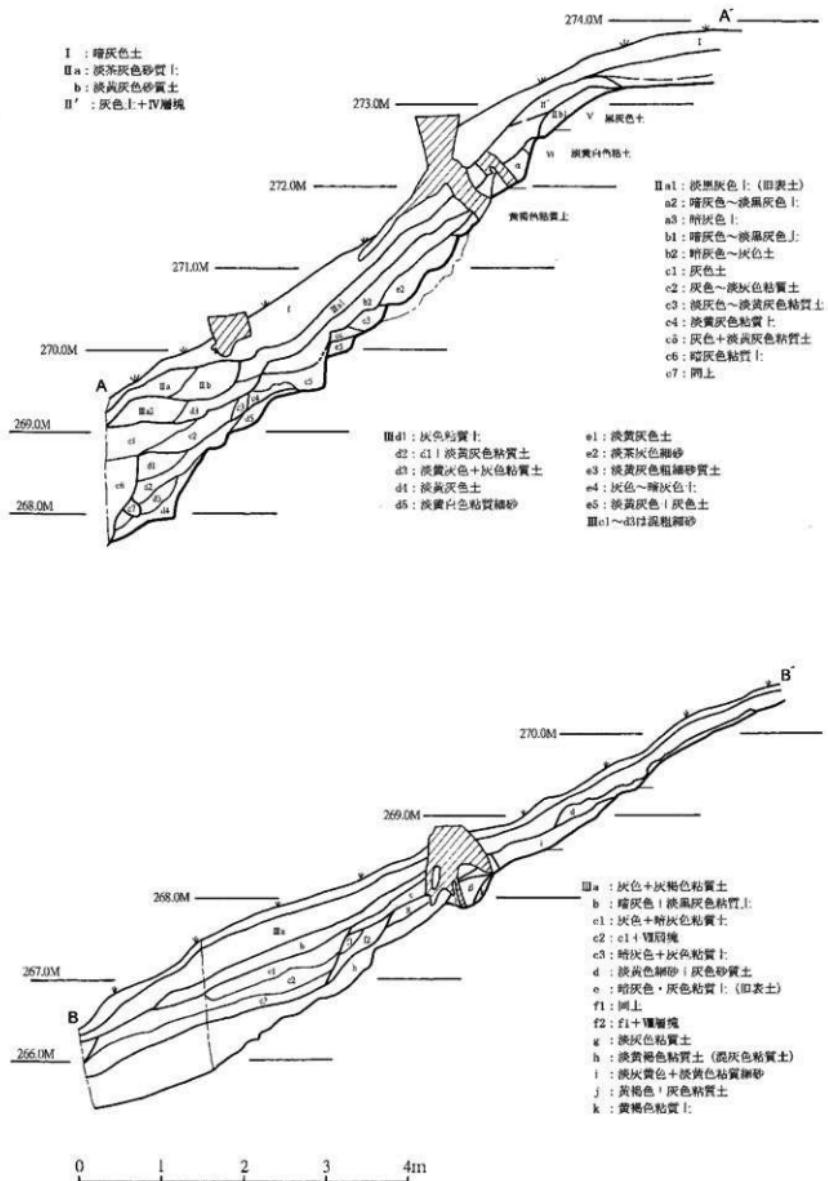
第31図 園田城跡 繩張り図 堀切と区画溝は発掘調査で検出



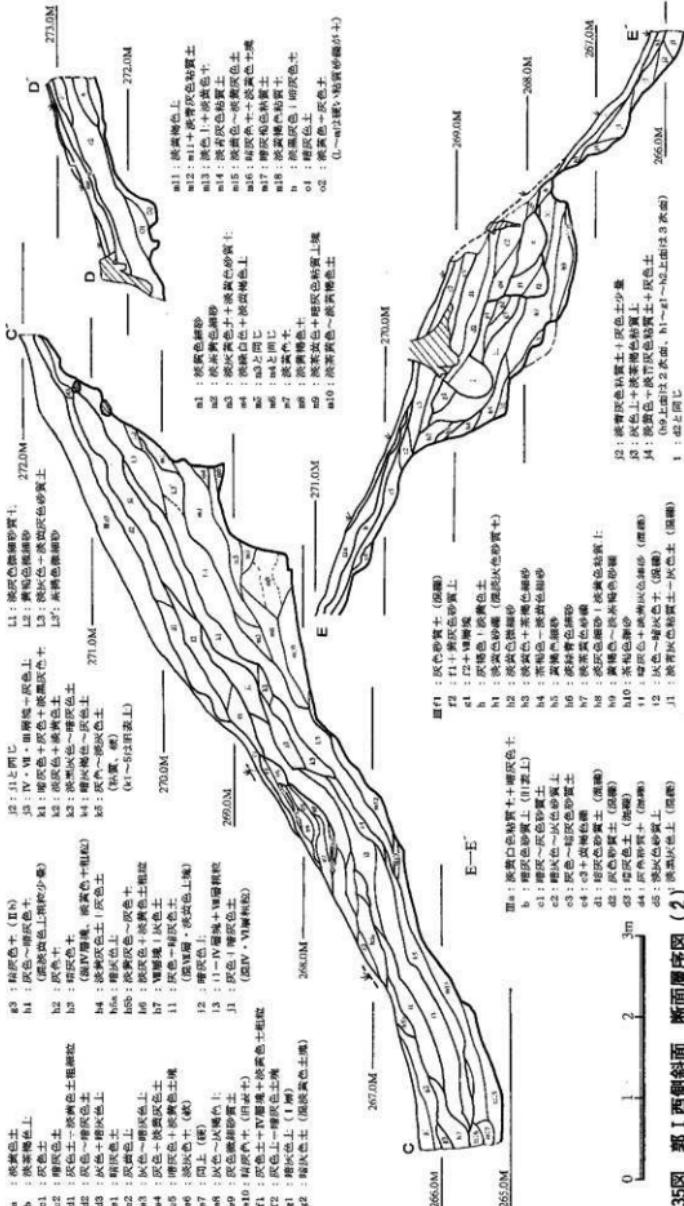
第32図 園田遺跡 遺構分布図



第33図 郭Ⅱ東端～堀切～郭Ⅰ西南部 遺構実測図

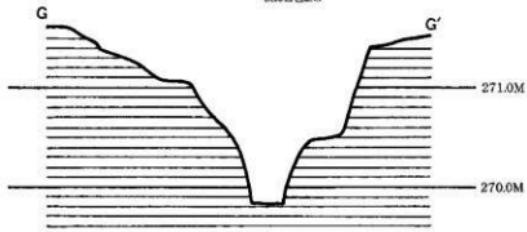
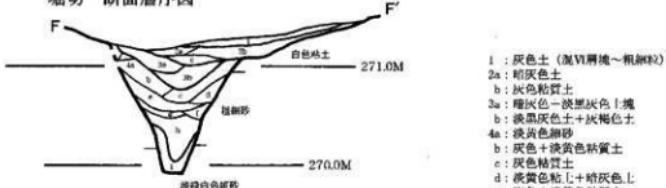


第34図 郡I西侧斜面 断面層序図 (1)

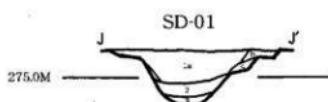
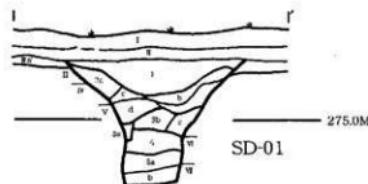
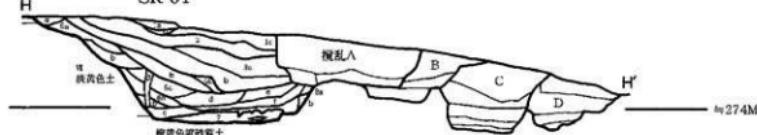


第35圖 鄭I 西側斜面斷面

堀切 断面層序図

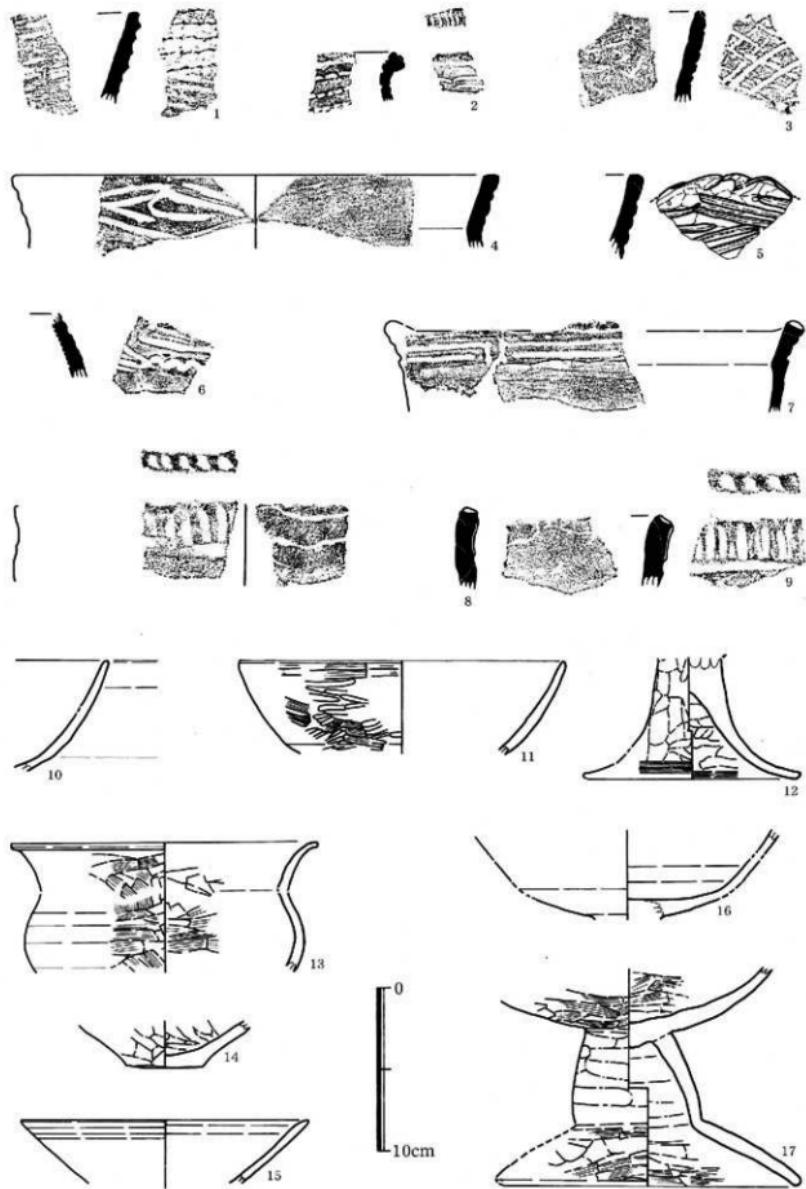


SR-01



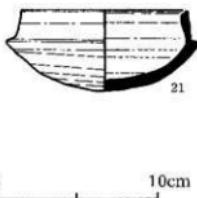
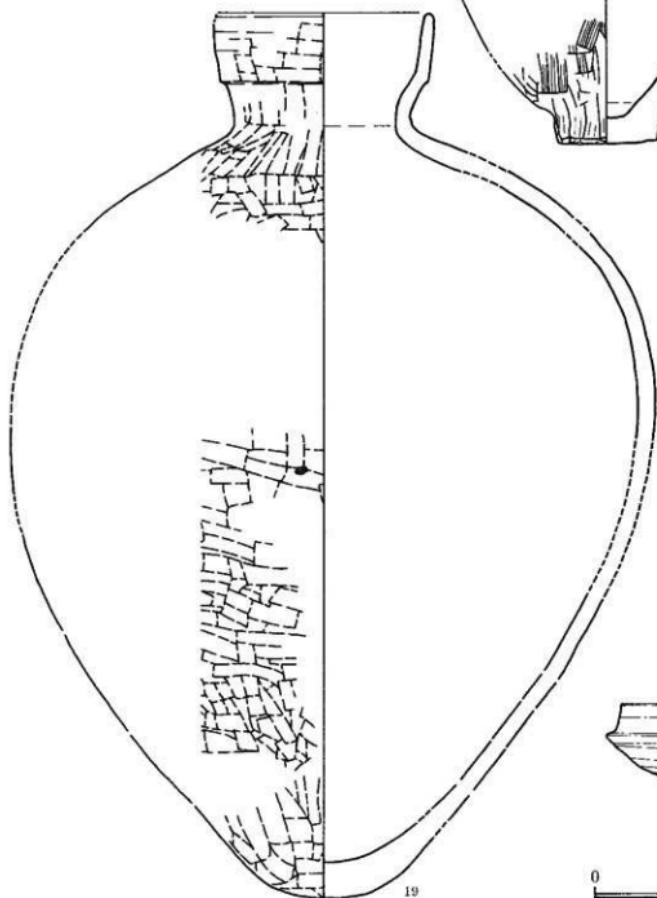
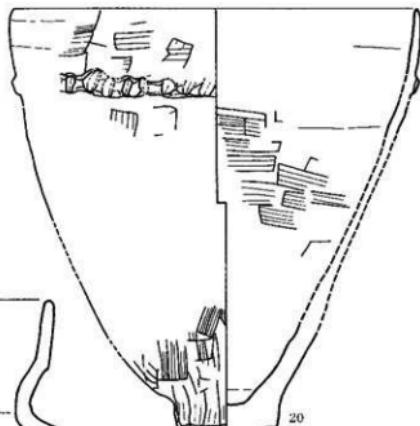
0 1 2m

第36図 堀切・道路跡・溝状遺構 断面層序図



第37図 園田城跡 出土遺物実測図（1）

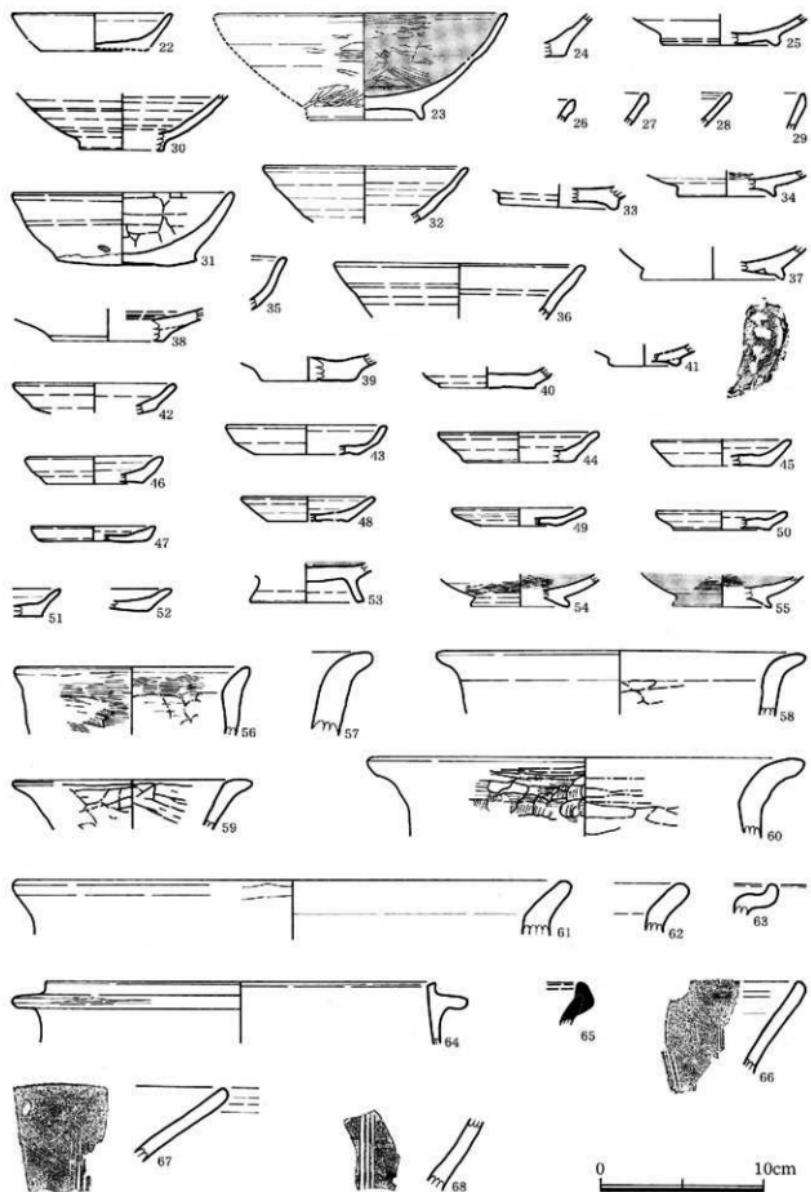
縄文土器・土師器（10~12: SA-01, 13~17: SA-02）



0 10cm

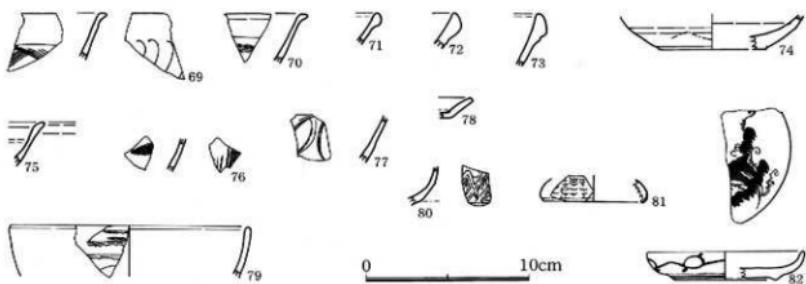
第38図 園田城跡 出土遺物実測図（2）

土師器・須恵器（18・19：SA-02, 20・21：SA-03）

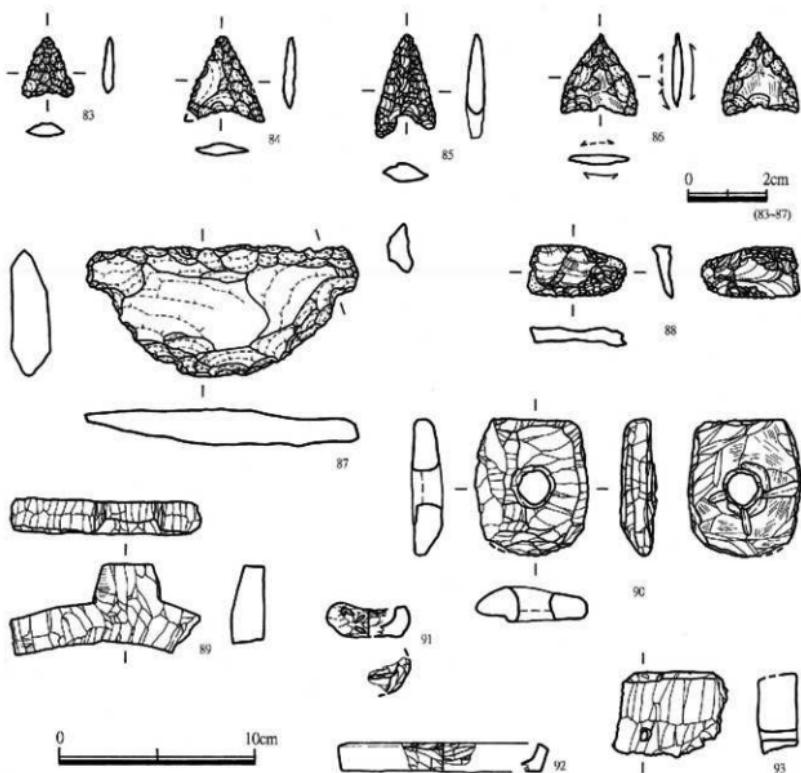


第39図 園田城跡 出土遺物実測図（3）

土師器・土師質土器・東播系須恵器・中世国产陶器



第40図 園田城跡 出土遺物実測図（4） 輸入陶磁器・近世国産陶磁器



第41図 園田城跡 出土遺物実測図（5） 石器・石製品

表5 出土遺物観察表（1）縄文土器・土師器・土師質土器・須恵器・黒色土器

No	出土地	種類	器種	寸法 (mm)		調査		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	高さ	外面			外面	内面		
第37回 1	那 I Ⅲ層	縄文土器	深鉢	—	—	—	直線	直線	粗面砂少量	良	灰褐色～暗茶褐色	系橙～暗茶褐色	スス少量
2	那 I Ⅲ層	縄文土器	深鉢	—	—	—	沈線	沈線	微少少量	良	淡茶～暗茶褐色	暗茶～暗茶褐色	
3	那 I Ⅳa層	縄文土器	深鉢	—	—	—	粘子目	工具ナゲ	微細砂や多い	良	橙褐色～淡褐色	黃褐色～淡褐色	
4	那 I Ⅳa層	縄文土器	深鉢	—	—	—	凹線	工具ナゲ	微細砂や多い	良	暗褐色～明茶褐色	黃褐色～明茶褐色	
5	那 T 西斜面	縄文土器	深鉢	—	—	—	凹線	工具ナゲ	微細砂や多い	良	灰褐色～茶褐色	茶褐色	口徑約60cm
6	那 I Ⅳa層	縄文土器	深鉢	—	—	—	門線	工具ナゲ	微細砂少量	良	灰褐色～灰	茶褐色～灰褐色	スス少量
7	那 II Ⅳa層	縄文土器	深鉢	—	—	—	直い工具ナゲ	ナゲ	微細砂少量	良好	淡茶褐色～暗茶褐色	淡黃褐色～淡茶褐色	
8	第 II Ⅱ層	縄文土器	深鉢	—	—	—	凹線	ナゲ	微細砂や多い	良	淡茶褐色	淡黃褐色～淡茶褐色	
9	第 II Ⅱ層	縄文土器	深鉢	—	—	—	凹線	工具ナゲ	微細砂少量	良	淡茶褐色～灰褐色	淡黃褐色～淡茶褐色	スス少量
10	那 I SA-01	土師器	高杯	—	—	—	ハケーナギキ	丁寧ナゲ	直	ややあまい	淡褐色	淡褐色～黄褐色	
11	那 I SA-01	土師器	高杯	200	—	—	ハケーナギキ	マツメ	直	ややあまい	淡褐色	淡褐色～淡黃褐色	
12	那 I SA-01	土師器	高杯	—	—	—	ハケーナギキ	ナゲ	直	良	淡褐色	淡褐色	
13	那 I SA-02	土師器	甌	180	—	—	粗工具ナゲ	工具ナゲ	粗面砂や多い	良	淡褐色～淡黃褐色	淡褐色	
14	那 I SA-02	土師器	甌	—	47	—	粗工具ナゲ	工具ナゲ	粗面砂や多い	良	淡褐色～灰褐色	淡褐色	
15	那 I SA-02	土師器	高杯	175	—	—	ハケーナギキ	半身ナギキ	直	ややあまい	淡褐色～黃褐色	黃褐色	
16	那 I SA-02	土師器	高杯	—	—	—	ナゲ	丁寧ナゲ	直	ややあまい	粗面～淡褐色	茶褐色～灰褐色	灰褐色
17	那 I SA-02	土師器	高杯	—	180	—	工具ナゲ	丁寧工具ナゲ	微細砂少量	良	淡褐色～淡黃褐色	淡褐色	
第38回	那 I SA-02	土師器	甌	—	97	—	工具ナゲ	工具ナゲ	直	良	淡褐色～淡黃褐色	褐色	
18	那 I SA-02	土師器	甌	—	97	—	工具ナゲ	工具ナゲ	直	良	淡褐色～淡黃褐色	淡茶褐色	最大径385mm
19	那 I SA-02	土師器	甌	131	—	542	工具ナゲ	工具ナゲ	直	良	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色	茶褐色
20	那 II SA-03	須恵器	甌	247	60	281	ハケーナギキ	二重ナゲ	粗面砂少量	ややあまい	淡褐色～灰褐色	淡褐色	
21	那 II SA-03	須恵器	甌	101	—	50	ナゲナギキ	ナゲ	粗面砂少量	良好	淡褐色	淡褐色	
第39回	那 T SK-01	土師器	直	97	65	23	ナゲ	ナゲ	直	ややあまい	淡褐色～淡褐色	褐色	陶器品
22	那 T SK-01	黒色土器A種	碗	178	69	67	ミガキナゲ	ミガキ	直	ややあまい	淡褐色～淡褐色	褐色	茶褐色
23	那 T SD-01	土師器	杯	—	—	—	ナゲ	ナゲ	直	ややあまい	淡褐色～淡褐色	褐色	陶器品
24	那 T SD-01	土師器	碗	—	—	—	ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
25	那 I Ⅲ層	土師器	碗	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	直	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
26	那 I Ⅲ層	土師器	碗	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	直	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
27	那 I Ⅲ層	土師器	碗	—	—	—	ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色	褐色	
28	那 I Ⅲ層	土師器	碗	—	—	—	ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色	褐色	白點模倣
29	那 I PP-698	土師器	甌	—	—	—	ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色	褐色	白點模倣
30	那 I SD-01	土師器	甌	—	50	—	ナゲ	ナゲ	直褐色少量	ややあまい	淡褐色～淡褐色	褐色	
31	那 I PP-625	土師器	甌	134	85	45	ナゲナギキ	ナゲナギキ	直	良	淡褐色～淡褐色	褐色	粗面模倣
32	那 I PP-1258	土師器	甌	124	—	—	ナゲ	ナゲ	直褐色少量	ややあまい	淡褐色～淡褐色	褐色	内面、底裏 凹凸着物
33	那 I Ⅲ層	土師器	甌	—	68	—	工具ナゲ	ミガキ	精良	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
34	那 I Ⅲ層	土師器	甌	—	59	—	模様ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
35	那 I PP-596	土師器	甌	—	—	—	ナゲ	ナゲ	直	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
36	那 I Ⅲ層	土師器	甌	152	—	—	ナゲ	ナゲ	直	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
37	那 I Ⅲ層	土師器	甌	—	85	—	ミガキ	ミガキ	精良	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
38	那 I PP-806	土師器	直	—	66	—	ナゲ	ハケ	精良	良	淡褐色	褐色	淡褐色～淡茶褐色
39	那 I Ⅲ層	土師器	直	—	56	—	ナゲ	ナゲ	精良	良	淡褐色	褐色	
40	那 II PP-1789	土師器	杯?	—	58	—	ハラ切り	ナゲ	直	良	淡褐色	褐色	淡褐色
41	那 I Ⅲ層	土師器	甌	—	39	—	半身ミガキ	ナゲナギキ	直	良	青褐色～淡茶褐色	褐色	
42	那 I 北西斜面	土師器	直	98	—	—	ナゲ	ナゲ	精良	良	淡褐色	褐色	
43	那 I Ⅲ層	土師質土器	直	97	62	18	ナゲ、赤切	ナゲ	赤褐色少量	良	淡褐色	淡褐色	
44	那 I PP-1410	土師質土器	直	97	69	18	ナゲ、赤切	ナゲ	赤褐色少量	ややあまい	淡褐色	淡褐色	
45	那 I PP-1392	土師質土器	小皿	86	60	16	ナゲ	ナゲ	赤褐色少量	ややあまい	淡褐色	淡褐色	
46	那 I Ⅲ層	土師質土器	小皿	83	59	17	ナゲ、赤切	ナゲ	精良	良	淡褐色	淡褐色	
47	那 II Ⅲ層	土師質土器	小皿	75	67	9	ナゲ	ナゲ	精良	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
48	那 I PP-1170	土師質土器	小皿	82	49	16	ナゲミガキ	ナゲ	赤褐色少量	良	淡褐色～淡褐色	褐色	
49	那 I PP-1194	土師質土器	小皿	80	51	11	ナゲ、赤切	ナゲ	精良	ややあまい	茶褐色	淡褐色	スス微量
50	那 I PP-1089	土師質土器	小皿	81	60	12	ナゲ、赤切	ナゲ	直	ややあまい	淡褐色	褐色	
51	那 I Ⅲ層	土師質土器	小皿	—	—	—	ナゲ、赤切	ナゲ	精良	良	青褐色～暗茶褐色	褐色	
52	那 I Ⅲ層	土師質土器	小皿	—	—	—	ナゲ	ナゲ	直	良	青褐色～暗茶褐色	褐色	

表6 出土遺物觀察表（2）土師器・土師質土器・黑色土器・東播系須恵器・中世国產陶器

No	出土地	種類	器種	法量 (mm)			調査		胎土	焼成	色調		備考
				口徑	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
							良	やや良			良	やや良	
53	郭I SD-01	黑色土器A類	瓶	—	70	—	ナデ	マメツ	良	やや良	淡黃褐色～淡綠黃	褐褐色～黑褐色	
54	郭I II層	黑色土器B類	瓶	—	59	—	ミガキナナデ	ミガキ	稍良	良	淡灰褐色～淡黃	黑褐色	
55	郭I PP-280	黑色土器B類	瓶	—	59	—	ミガキナナデ	ミガキ	稍良	良	黑褐色～灰褐色	黑褐色	青磁模様
56	郭II II層	土師器	甕	139	—	—	ハケ	ハケーナナデ	微細砂少量	良好	黑褐色	暗灰褐色～茶灰	スス少量
57	郭I II層	土師器	甕	—	—	—	ナデ	粗工具小穴	粗ハケ	微細砂少量	良好	暗褐色～褐灰色	スス少量
58	郭I II層	土師器	甕	227	—	—	ナデ	ナデ～ケヅ	微細砂や多い	良	淡黃褐色～淡灰褐色	淡黃褐色～淡灰褐色	
59	郭I II層	土師器	甕	146	—	—	ナデ	ケヅリ	微細砂少量	良	淡黃褐色～茶褐色	淡黃褐色～淡黃褐色	
60	郭II II層	土師器	甕	268	—	—	ナデ～工具ナナデ	ナデ～	微細砂少量	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色～茶褐色
61	郭I (M10)	土師器	甕	337	—	—	ナデ	粗工具ナナデ	粗微砂少量	良	茶褐色～茶褐色	灰褐色～淡灰褐色	
62	郭I II層	土師器	甕	—	—	—	ナデ～工具ナナデ	ナデ～	粗微砂少量	良好	暗茶褐色～黑褐色	暗茶褐色～黑褐色	
63	郭I PP-1294	土師器	甕	—	—	—	ナデ	粗工具ナナデ	粗微砂少量	良	淡灰褐色～淡灰褐色	淡灰褐色～淡灰褐色	口径約50cm
64	郭I II層	土師質土器	羽釜	237	—	—	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	褐褐色～深褐色	暗灰褐色～茶灰褐色	スス少量
65	郭I SD-01	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	暗茶褐色～淡灰褐色	淡灰褐色	重ね燒き痕
66	郭I 西斜面	土師質土器	擂钵	—	—	—	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	淡灰褐色～淡灰褐色	淡灰褐色	
67	郭I SR-01	土師質土器	擂钵	—	—	—	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	淡灰褐色～淡灰褐色	淡灰褐色	
68	郭I SR-01	備前燒	擂钵	—	—	—	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	淡茶褐色	暗茶褐色	内面少し擦耗

表7 出土遺物觀察表（3）輸入陶磁器・近世國產陶磁器

No	出土地	種類	器種	法量 (mm)			調査	胎土色	釉調	產地	年代・備考	
				口径	底径	器高					外觀	内面
69	郭I SD-01	白磁	瓶	—	—	—	萬葉文	—	淡灰白色	淡灰白色	中國	12～13c
70	郭I II層	白磁	瓶	—	—	—	萬葉文	—	乳白色	乳白色	中國	12～13c
71	郭I PP-277	白磁	瓶	—	—	—	—	—	乳白色	乳白色	中國	12～13c
72	郭I PP-955	白磁	瓶	—	—	—	—	—	淡灰白色	淡灰白色	中國	12～13c
73	郭II II層	白磁	瓶	—	—	—	—	—	乳白色	乳白色	中國	12～13c
74	郭I SD-01	白磁	瓶	—	65	—	外觀下半一 外底	外觀白～淡黃褐色	乳白色～淡綠灰	乳白色～淡綠灰	中國	12～13c
75	郭I PP-1076	青磁	碗	—	—	—	—	—	淡灰褐色～淡橙褐色	オリーブ灰	中國	12～13c
76	郭I II層	青磁	碗	—	—	—	萬葉文	—	淡灰褐色	淡オリーブ灰	同安窑	12～13c
77	郭I II層	青磁	碗	—	—	—	萬葉文	—	淡灰褐色	淡オリーブ灰	中國	12～13c
78	郭I II層	青磁	盤	—	—	—	—	—	淡灰白色	オリーブ灰	同安窑	12～13c
79	郭I 西斜面	青白磁	碗	145	—	—	雲文萬葉	—	乳白色	オリーブ灰	龍泉窑	14c末～15c中
80	郭II II層	青白磁	合子	—	—	—	—	—	乳白色	淡青綠	中國	12～13c
81	郭I (M2)	青白磁	合子	60	—	—	—	—	乳白色	淡青綠	中國	12～13c
82	郭I SD-02	坐付	瓶	95	64	17.5	朝頃	外觀	白	外：暗；内：白	肥前系	18c後

表8 出土遺物觀察表（4）石器・石製品

No	出土地	形種	法量 (mm)			材質	備考	No	出土地	形種	法量 (mm)			材質	備考
			長さ	幅	厚さ						長さ	幅	厚さ		
第41回	郭I 西斜面	石鏡	16	13.5	3	安山岩		89	郭II II層	石鏡片 再加工品	98	42	17	透石	把手部
83	郭I SD-02	石鏡	(22)	(20)	3	ハリ貝 安山岩		90	郭I II層	石鏡	71	58	19	透石	
84	郭II II層	石鏡	27	16	5	チャート		91	郭I II層	小鏡	口徑77、底径60、厚さ15			透石	
85	郭I II層	石鏡	21	20	3	安山岩		92	郭I PP-841	盤	口徑97、底径100、高さ25			透石	
86	郭I II層	石鏡	70	33	10	安山岩		93	郭I II層	石鏡片 再加工品	54	44	21	透石	口縁部
87	郭I 西斜面	石鏡未製品	—	—	—										
88	郭I II層	スクリーン	51	27	8	黒曜石									

21. 妙見遺跡 (第42・43図)

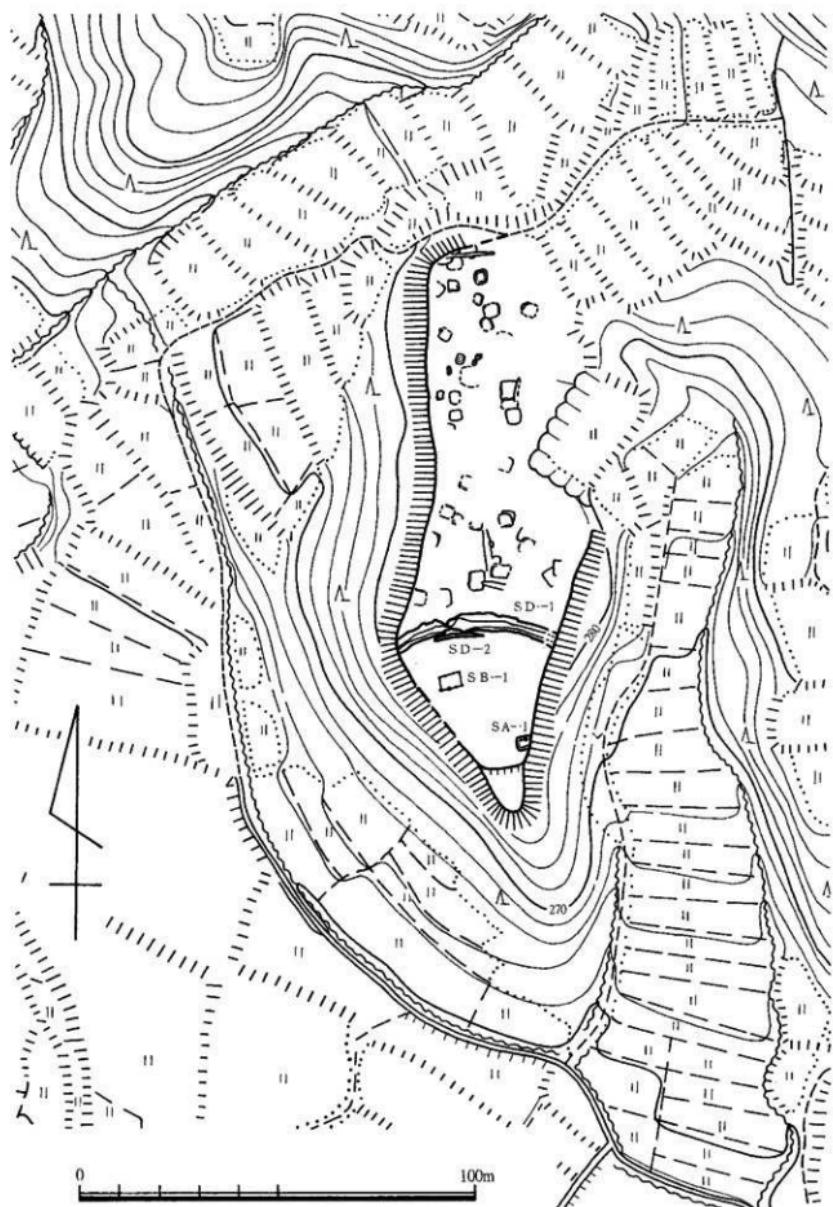
- a. 位置 えびの市大字東川北字妙見
- b. 立地 徳満城の北約700m、手仕山城の北300mに位置する小丘陵であったが、発掘調査後、九州縦貫自動車道えびのP・Aとなっている。
- c. 繩張り 標高282m、比高25mの丘陵頂部の南寄りにおいて、西寄り1ヶ所に出入口を設けた幅2.5~4m、深さ50~80cm、東側は業研掘りで深さ1.6mを測る弧状の堀切と、出入口に接するように、幅1m・深さ20cmの浅い溝状遺構のほか、梁行1間、桁行3間の掘立柱建物跡1棟が検出されている。
- d. 歴史的背景 文献や文書等には表われず、出土遺物も殆ど無いが、14~15世紀頃の砦であり、手仕山城・徳満城の出城の機能が想定される。

e. 文獻 宮崎県教育委員会『野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡』 1994

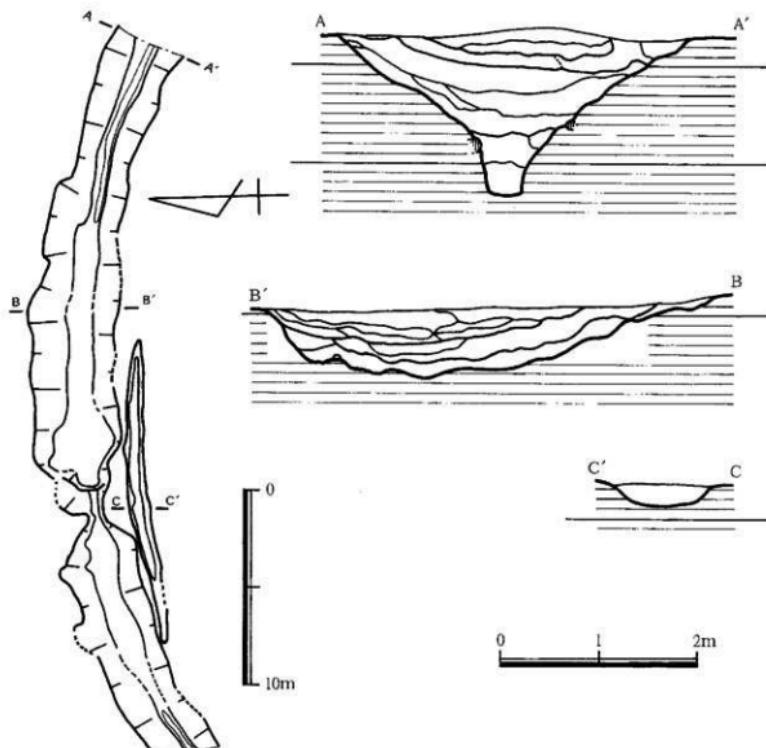
22. 手仕山城 (第44図)

- a. 位置 えびの市大字東川北字天神後
- b. 立地 北原時代、加久藤郷の中心的な城であった徳満城と城跡の痕跡のある妙見遺跡との間に位置し、周間に天神元・天神後という字名があり、手仕山は「天神山」のナマリの可能性が高い。
- c. 繩張り 標高269m、比高約20mで、東西約170m位の独立丘陵であるが、東側虎口の方には、2段の切岸がある。
北側の緩斜面には、2段に土塁・堀切の防御遺構が見られる。
- d. 歴史的背景 文献や文書には表われないが、南方は宇古屋敷で、弥生時代から中世までの遺構が発掘され、掘立柱建物跡約150棟が見出された。
中世までは東川北地区の集落が、この辺りに集中し、この地区的護りのための重要な城であったことが窺える。戦後の一時期、瓦窯を築き、生産・出荷していたと聞く。
- e. 発掘調査概要 当遺跡は、事前の試掘調査の結果、縄文時代早期の集落遺跡であることが判明し、本調査の際も頂部を主とする調査に主眼を置いたことから、堀切が検出されるまでは山城として意識することがなかった。このため、確たる縄張り図も作成できていない。

頂部は戦後の開墾と瓦生産に伴う土取りなどで古代以降の土壤が遺存していなかつたが、堀切が1条検出された。また、主郭（中央）の北縁東部で柱穴が数基検出されたが、性格は不明である。山城の時期を示す出土遺物は皆無に等しく、年代も不明である。北面には濠があったようであるが（地形図で推定）、調査対象外であったため、



第42図 妙見遺跡 遺構分布・地形図



第43図 妙見遺跡 SD-01-02 遺構・断面実測図

詳細は不明である。南面は弥生時代～中世の集落の調査をしたが、山城関係の遺構は皆無であった。

f. 文獻 えびの市教育委員会『東川北地区遺跡群』 2005

23. 德満城 (第45図)

a. 位置 えびの市大字東川北字本丸

b. 立地 加久藤郷と馬闘田郷境の東川北地区にあり、川内川の北岸にせまる丘尾にあたり、南を川内川、東を関川が流れている。

c. 繩張り 百貫山から派生した丘陵の先端部230mを掘り切り（現吉松えびの線）、北面を形成している。

最高所の標高は254mで、比高は28mを測る。城郭は、高城と中之城・小城の三大



第44図 手仕山城跡 繩張り図

堀切は発掘調査で検出、郭は未計測・推定

区画に分かれ、それぞれ深い堀切によって仕切られている。高城と中之城を分かつ堀切が主たる通路となって南北に抜け、途中から高城と中之城へ通じる通路があって虎口が形成されている。東～南縁には、外堀を有していた可能性がある。

高城には、汲み置き用の浅い井戸、中之城には、深掘の井戸跡がある。中之城には、本丸や馬乗り馬場といわれた場所もあり、小城には顯著な土累がのこっている。

なお、中之城と小城の間の緩斜面には四ヶ所に切岸が造られて、外敵の侵入を防護している。この城には、石垣が築かれていたが、後年取り崩して川内川を堰き止め、馬闘田と吉田・吉松郷300haに導水した堂本井堰の堰石に使用したといわれる。

d. 歴史的背景 この城は、北原氏が築城したもので、当時の加久藤郷の中心的な存在であったが、(北原宗家は飯野城に居城) 島津義弘が永祿年間(1558～1570)久藤城を修復して加久藤城とし、広瀬夫人を居住せしめてより加久藤城の支城となった。

応永2年(1395)北原範兼が、城中で相良祐頼と酒宴中に意見の相違から争いとなり、相刺死し、永享2年(1430)には島津總州家と奥州家の争いで、總州家の島津久林が奥州家の忠国に攻められて切腹して果てたといわれ、城より西方約4～500mに

久林の墓がある。そこには石塔が1基残り、供の衆6人の石塔もあったというが、現在は残骸が散在するのみである。

e. 文獻 「真幸院記」『木脇家文書』

原口虎雄監修「三国名勝図會」第4卷 青潮社 1982

平部崎南『日向古蹟誌』

『飯野古事記』 1840

「都城島津家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

加久藤郷「名勝志御再撰方札方帳」 1824

「日向国諸県郡」「薩隅日地理纂考」 施見島県教育委員会 1871

24. 新城 (第46図)

a. 位置 えびの市大字西川北字新城

b. 立地 徳満城の西北にあり、北の台地と深い谷を隔てた山岡で、周囲は険阻な要害の地である。

c. 繩張り 標高280~281m、比高50mの2又の小丘頂部に郭3面、南端部に小さい郭を有する。城郭は3区画で、郭Ⅰと郭Ⅱ間は深い掘切で仕切られている。

北の台地よりは土橋によって連絡され、城郭に取り付く所は虎Ⅰが形成されて護られ、郭Ⅱは土塁で防御されている。西・南の緩斜面の部分には、それぞれ数カ所の切岸が造成されている。城域は、東西340m、南北240mに及ぶ。

d. 歴史的背景 詳細は不明であるが、「三国名勝図會」には、「北原氏が築いた城であるとい伝える」とあり、馬闘田（西川北）の「東福城（馬闘田城）」に居城した馬闘田右衛門の城といわれる。東福城は古城ともいって、古城に対する新城かとも思われる。「木脇家文書」には、「徳満城より山匪の方なり、城主知らず、今に所名寄帳、竿次帳にも新城ヶ平とある由」とある。

e. 文獻 「木脇家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

原口虎雄監修「三国名勝図會」第4卷 青潮社 1982

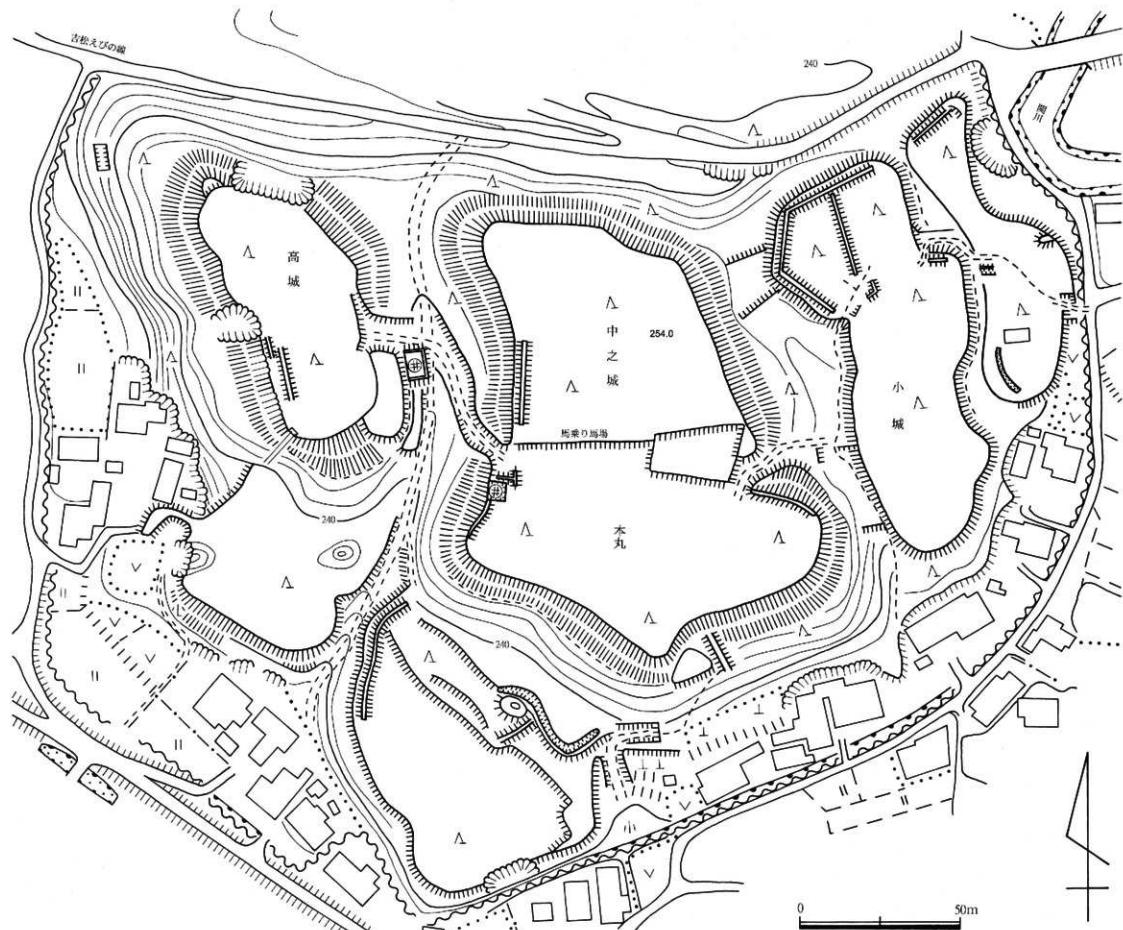
平部崎南『日向古蹟誌』

25. 東福城 (馬闘田城) (第47図)

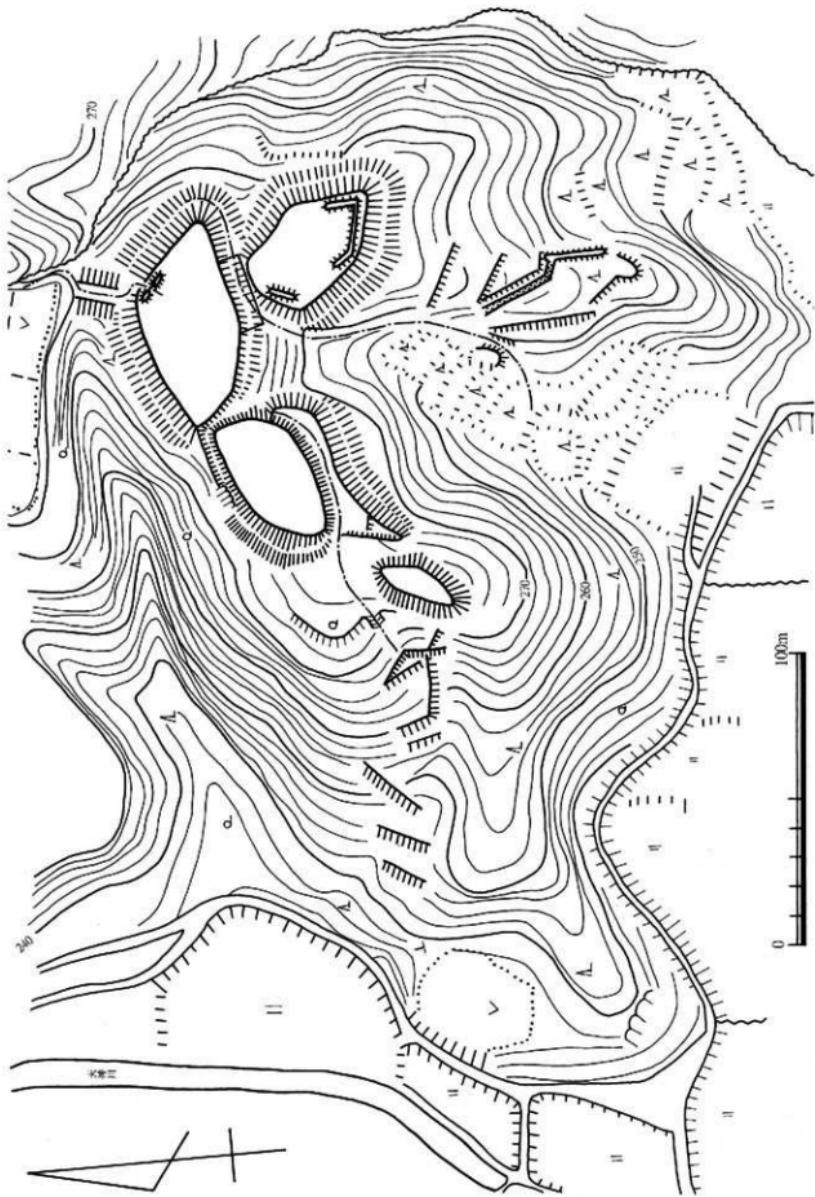
a. 位置 えびの市大字西川北字宮ノ馬場

b. 立地 天神川を挟んで新城の対岸に位置したシラスの山岡である。

c. 繩張り シラス採取によって殆ど消滅しており、昭和60年の地形図を見ると、標高250m、高約20mの頂部に長さ50m・幅20~30mの郭、その南西に幅20~30m長さ80m程の郭が想定される。北東部はすでに消失しているが、文献どおりであればこの位置にもう



第45図 徳満城跡 繩張り図



第46図 新城跡 繩張り図



第47図 東福城跡 拡張り図 破線の等高線は消失前の地形

一つ郭が存在したと思われる。城域は、長軸300m・短軸150m程であったと思われる。

d. 歴史的背景 真幸院の領主・北原氏の支族、馬閥田右衛門の居城であったといわれ、北原兼守亡きあと、舅の伊東義祐は、未亡人の娘をこの城の城主・馬閥田右衛門に再婚させて、北原宗家を繼がせようとしたので、北原家は大いに乱れ、馬閥田城は島津貴久、相良頼房によって推された北原兼親によって攻め落とされた。

破壊が著しく詳細は不明であるが、『三国名勝図會』には、「亀之城、鶴之城、多福城」の3区画があり、「その間濠溝を通す」とある。

e. 文獻 「木脇家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

「都城島津家文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

『飯野古事記』1840

「祢(ね)寝(じめ)文書」「宮崎県史」史料編中世2 宮崎県 1994

原口虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

26. 松尾城 (第48図)

a. 位置 えびの市大字内豎字城西

b. 立地 吉田郷・東内壁にある杉尾城と丸之尾城の南に隣接するシラスの山岡で、四面は断崖を成し、堅固な城郭である。

c. 繩張り 標高242~252m、比高16~26mの小丘である。

城郭は4区画に分かれ、南部は崩壊して砂防工事により取り除かれて一部しか残っていない。中央に広場があり、ここより各郭への登り口があり虎口を形成している。

城の周囲は断崖に囲まれ、東側郭に土塁が残っている。なお、北側郭上にあった山神祠堂は、温泉開発により城郭の一部が削り取られた際、下に降ろされた。

東南の大手口には、幅3.5m、長さ54mばかりの堀があり、城中には橋で入ったが、現在の大手口跡には庚申塔三基が立っている。

西方は城門があり掘手口であったが、現在でも門の礎石ではないかと思われる石がのこっている。城域は、東西100m、南北190mを測る。

d. 歴史的背景 『三国名勝図會』に「北に丸之尾城、西北に杉尾城あり、併に接連す」とある。西側に稻荷神社があるので、稻荷城ともいわれた。

中世、北原氏の所領で、「其の徒、当城を守る」とあり、『相良家文書』に北原兼命の時、「吉田村年貢濫妨事件」があったことが記され、その中に稻荷城が出てくるが、島津義弘が入ってからは鎌田尾張守・同刑部左衛門父子が相次いで地頭となって守り、平田六郎左衛門までは城中に居住したとある。

城山の南、大手口より約100mの地点（現況・水田）が往時の弓場の跡であるが、永祿10年（1567）義弘が父・貴久、兄・義久と菱刈の馬越城を攻めた時、この地に真

幸院の兵を集めて発進したといわれる。

- e. 文献 「木脇家文書」『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994
- 「都城島津家文書」『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994
- 半部崎南『日向古蹟誌』
- 『相良家文書』『宮崎県史』史料編中世2 宮崎県 1994
- 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982
- 『飯野古事記』 1840

27. まるの おじょう 丸之尾城 (第48図)

- a. 位置 えびの市大字内堅字寺西
- b. 立地 松尾城の北、矢岳山から派生した狭長なシラスの山岡である。
- c. 繩張り 標高250~265m郭、比高20~35mの瘦せ尾根上に、郭は明瞭でないが、東西50~110m、南北390mの城域を有する。
郭の北東部は開発されて養鶏場となり調査できないが、南西部の尾根にいくつかの堀切や切岸の遺構が残っていて、松尾城の出城と思われる。
- d. 歴史的背景 「相良家文書」によると、興国4年(1343)日向國の守護代となった畠山直顕が、興国6年に土持宣栄を大将として、真幸院の収納使・北原兼美等をして吉田村に乱入せしめ「向城」を取り、坂一族の居所「稻荷城」を攻め落としたとあるが、向城とは、この丸之尾城か杉尾城いずれかと思われる。
- e. 文献 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

28. すぎ おじょう 杉尾城 (第48図)

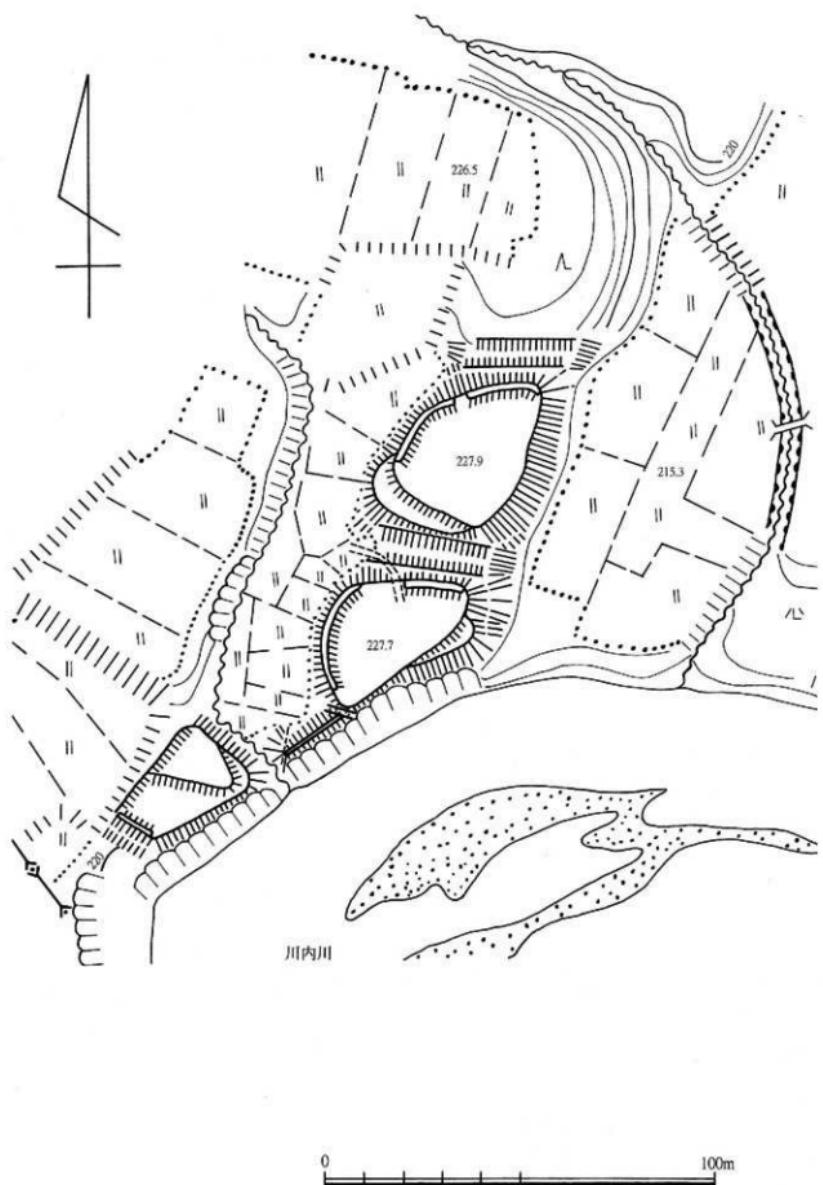
- a. 位置 えびの市大字内堅字城西
- b. 立地 松尾城の西北に位置し、丸之尾城と150~200m離れて並ぶ南北に長い山岡である。
- c. 繩張り 東西50~150m、南北500mの城域であるが、複雑に谷が入り込む地形である。
立地的に松尾城防衛のための出城と推定され、土塁や切岸・堀切等の遺構は北部・中央部・南部に集中して見られる。
- d. 歴史的背景 興国6年(1345)の「吉田村年貢濫妨事件」の際の「向城」の可能性があるが、詳細は不明である。
- e. 文献 原口虎雄監修『三国名勝図會』第4巻 青潮社 1982

29. あかばな おじょう 赤花城 (第49図)

- a. 位置 えびの市大字岡松字赤花
- b. 立地 川内川の右岸、鹿児島県吉松町境にあり、南は川内川に落ち込む絶壁である。



第48図 松尾城跡・丸之尾城跡・杉尾城跡 繩張り図



第49図 赤花城跡 拡張図

c. 繩張り 東西20~70m、南北160mの城域をもち、川内川からの比高は約15mと低い丘であるが、3つの郭があり、郭Ⅰと郭Ⅱの間には深い堀切があり、また郭の西側には空堀が掘られて独立した山城になっている。地元郷土史家の話では、「障子堀り」を呈していたようである。

郭Ⅲは比高がやや小さいが、南端に長さ10mほどの土塁がある。堀切や土塁が完全な形で遺存していて、小さなながら保存状態の良い山城跡の1つであったが、近年無届けのままで開発削平されて、消滅した。

d. 歴史的背景 『吉松亀鶴城並宗廟遺書』によると、足利尊氏が吉松に入った時、日当山を本陣として烽火合図の地として八ヶ所を決めたが、北東の地点として赤花城を定めたことが見える。

また、『求麻外史』に相良義陽の時、大口城の城主・赤池長任が真幸の筈尾城を討ったとあり、筈尾城とはこの赤花城を指すのではないかと思われるが、確証はない。

e. 文獻 『吉松亀鶴城並宗廟遺書』

30. 古城 (第50図)

a. 位置 えびの市大字柳水流字古城

b. 立地 えびの市の南西部、吉松町と境を接する柳水流地区にあり、堂本用水路と柳水流の「上ウト」から流れ出る小川に囲まれ水田に突出した台地で、両小川に面した崖は峻険である。

c. 繩張り 東西50~120m、南北200mの城域であるが、南側は堀切が埋没している可能性がある。

北および東側、さらに西側は急崖で守りやすく、西からの通路を登り虎口を形成している。城域は殆ど宅地または畑で、土塁や切岸等の遺構が見られるのは北側突川部だけである。

d. 歴史的背景 追を隔てた東向かいには、聖観音堂跡や高牟礼神社等があり、台地上の南方には羽山神社（コジャ観音—古城観音か？）等がある。

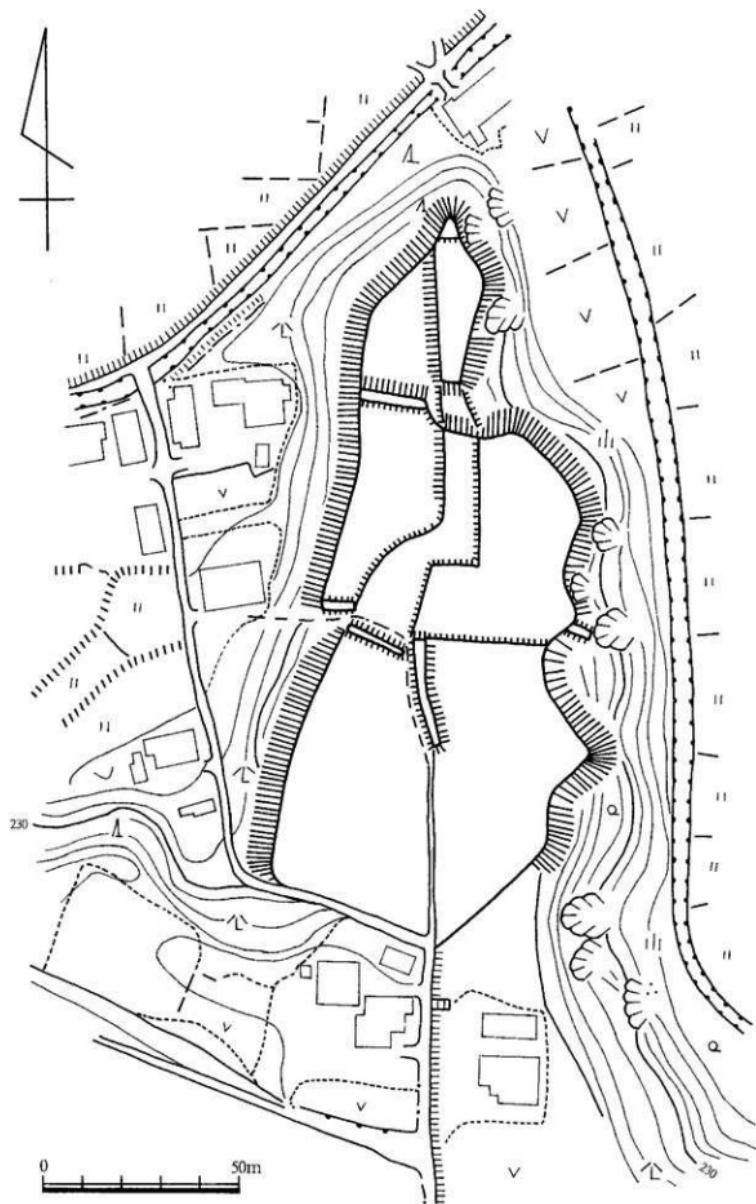
31. 猿ヶ城 (第51図)

a. 位置 えびの市大字浦字屋敷ノ内

b. 立地 柳水流・岡元・吉松町原口へ通じる交差点にあたる要衝の地である。

c. 繩張り 標高284~298m、比高44~58mのL字に曲る瘦せ尾根に立地し、東西300m・南北140~250mの城域を持つ。主郭は屈折部の最高所にあり、東端までは平坦面が殆ど無くその先に物見と推定される小部がある。

主郭の周囲には切岸や堀切があり、100m北の平坦面が郭かどうかは不確定である。



第50図 古城跡 繩張り図

d. 歴史的背景 原田葉風（利盛）『池牟礼史蹟誌』によると、文明3年（1471）筑前の国（福岡県）太宰府から、有馬豊前兵衛純秀が、当時の馬闘田郷・浦村の池牟礼に移住してきて、この城を築き城主になり、崇敬していた太宰府の菅原神社を勧請して祀ったとある。

当地域は太宰府天満宮の安樂寺領であったことから、史実としての可能性もある。

池牟礼地区には、字屋敷ノ内に菅原神社があったと言われ、その東に宇宮東があつて、有馬氏の屋敷と菅原神社が存在したことがうかがえる。また、のちに西川北の菅原神社に合祀されたと言われている。

e. 文献 原田葉風（利盛）『池牟礼史蹟誌』 1982

32. 見吉城（三吉城）（第52図）

a. 位置 えびの市大字島内字三吉

b. 立地 上島内地区公民館の南方、約700mの独立丘陵にある。

c. 繩張り 標高281m、比高27mの、東西280m、南北130mを測る独立丘陵と、南西部の丘から成る。

郭は東西190m、南北40~60m、周囲を急崖に囲まれた要害の地で、西端の3方に土塁で堅め、北側中央が虎口と見られ土塁が築かれている。

d. 歴史的背景 『三国名勝図會』に、「島中村に見古城あり」と書いてある。当地は、「栗下（真幸院の二之宮あり）～灰塚～三吉～下浦（真幸院の三之宮あり）～吉松」という重要な旧道と、「西川北（馬闘田の中心地）～烏内～三吉～岡元～池牟礼～吉松」という旧道の交差点にあたり、ここを抑える要衝の地である。

e. 文献 原川虎雄監修『三国名勝図會』第4卷 青潮社 1982

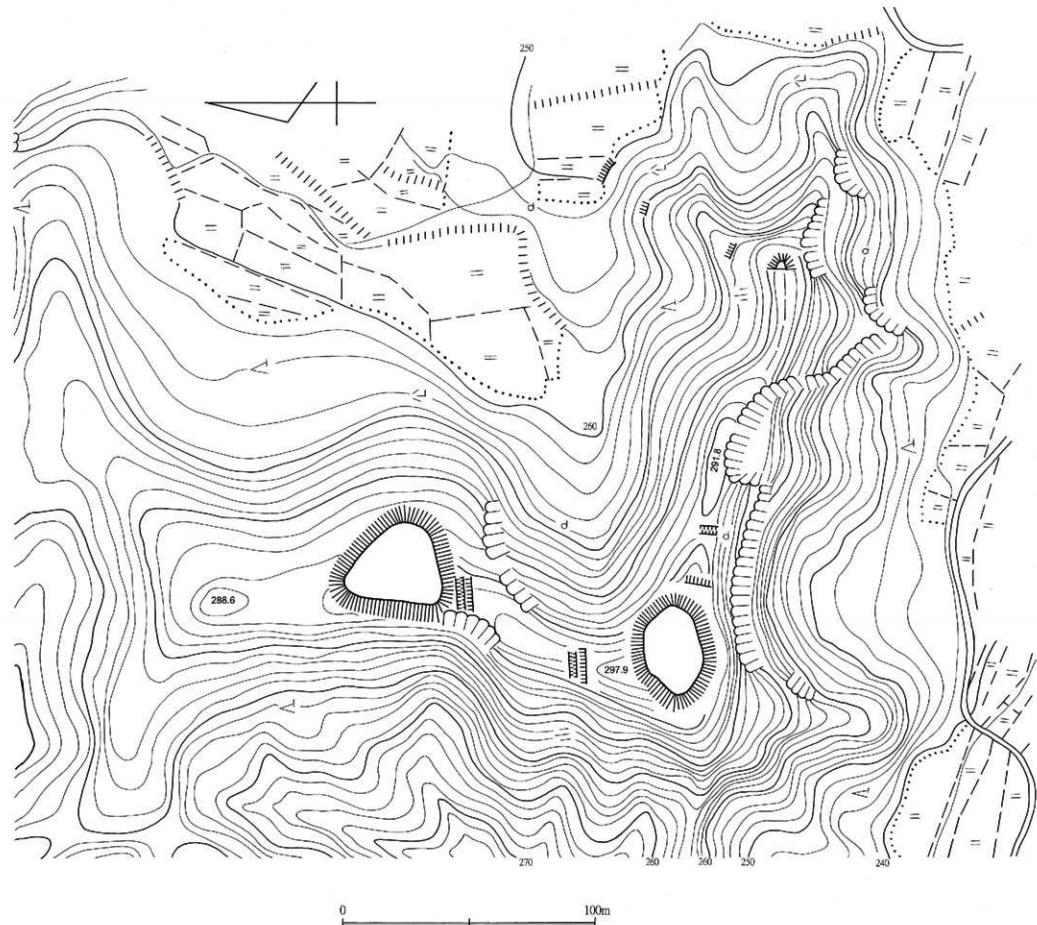
33. 池山城（第53図）

a. 位置 えびの市大字西長江浦字牛ヶ迫

b. 立地 九州縦貫自動車道えびのジャンクション西側の中位段丘面に立地する。南東部の一部分は高速道建設の際、未確認のまま削り取られている。

c. 繩張り 標高278m、比高28mの中位段丘の西端部を占める。頂部は東西約50~110m、南北約200mの平坦地となり、水田に囲まれた小高い丘で、數カ所の郭の部分は現在畑地である。周囲は断崖で守りやすく、ただ田間に面した北側の緩斜面に縦堀や土塁・切岸・堀切等の遺構が集中して見られ、水田際より上の郭への通路として使用されたであろう深くて長い堀も遺存している。

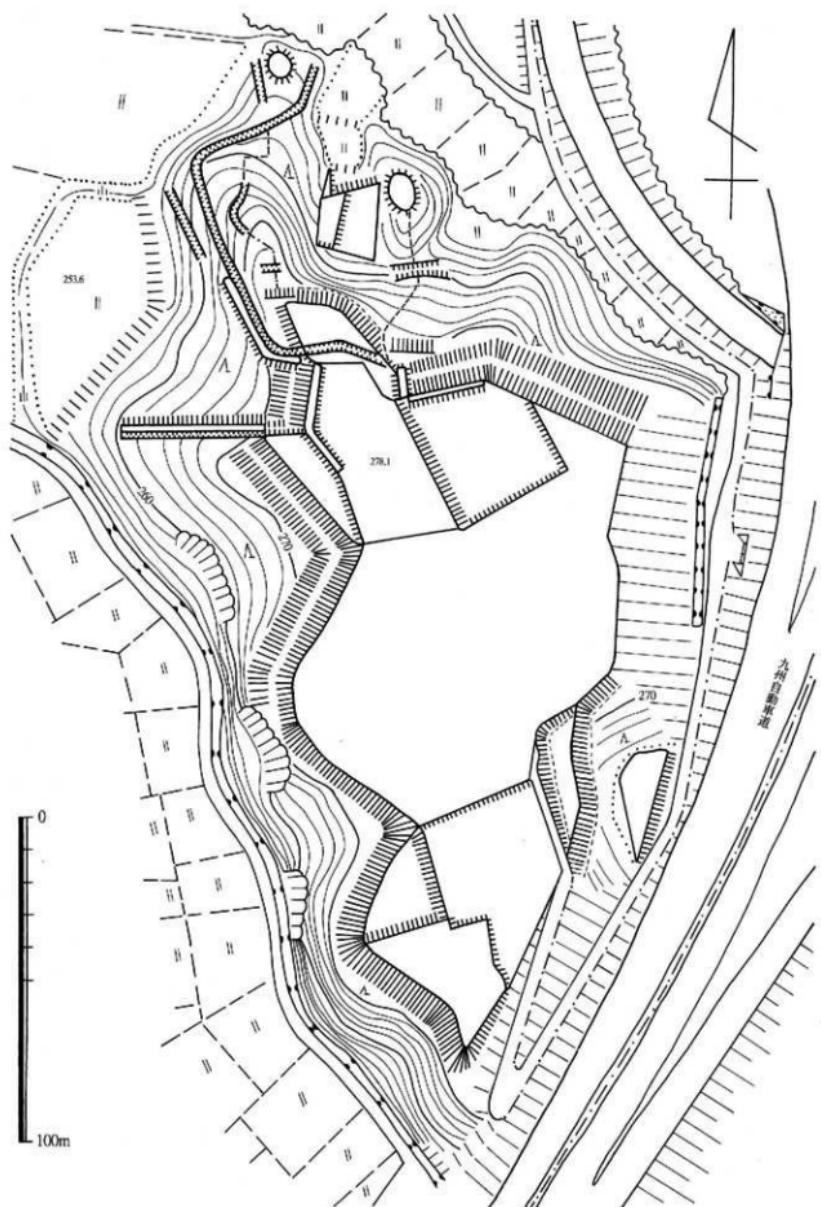
d. 歴史的背景 応永年間（1394~1428）、真幸院の領主・北原民部の次弟・佐伯能登守の居城と伝えられている。なお、栗下の大門氏の先祖は、この城の門を護っていたともい



第51図 狼ヶ城跡 網張り図



第52図 見吉城跡 繩張り図



第53図 池山城跡 縄張り図

われているが、詳細は不明である。

e. 文献 平部崎南『日向古蹟誌』

34. 西矢倉城 (第54図)

a. 位置 えびの市大字西長江浦字西城

b. 立地 加久藤地区灰塚の中位段丘南西部、九州縦貫自動車道えびのジャンクションの北東側にある。

c. 繩張り 標高279~283m、比高20~40mの段丘に、東西100~200m、南北360mの城域を有する。中央南寄りは九州縦貫自動車道が貫き、遺構が不明である。東は西矢倉迫の断崖である。付近一帯で最も高所でありながら、頂上に近い場所に年中水の絶えることのない湧水池がある。

当城は、伝説のみでなく、水源池や土壘・堀・切岸等も良好に遺存しており、特に主郭と思われる郭の主要な場所や虎口と思われる部分の両側には土壘が築かれており、実在した山城である。

d. 歴史的背景 昔、元旦の早朝、城の女中頭が池の辺で洗い物をしていて、遠くから多数の馬の蹄の音が聞こえてきたので、「敵の襲撃では！」と城内に通報したが、「元旦早々攻めてくる敵がいるものか」と気にも留めなかつたので、事実、敵の襲撃であっけなく落城した、という伝説が残っている。

e. 文獻 追田秀敏「元日に落城した西矢倉城」『えびの市老人物語集』 老述史編集委員会 1993

35. 矢倉城 (第55図)

a. 位置 えびの市大字西長江浦字矢倉

b. 立地 溝園城の南西丘陵に位置し、「矢倉山」・「欠倉ウト」の地名がある。

c. 繩張り 標高266~277m、比高30mの、複雑に谷が入り込む小丘群に立地し、東西100~150m、南北250mの城域がある。郭や土壘・切岸などの遺構が見られ、東部には虎口も見られた。東部より本部にかけては水路が巡り、堀の役目をしたと思われる。

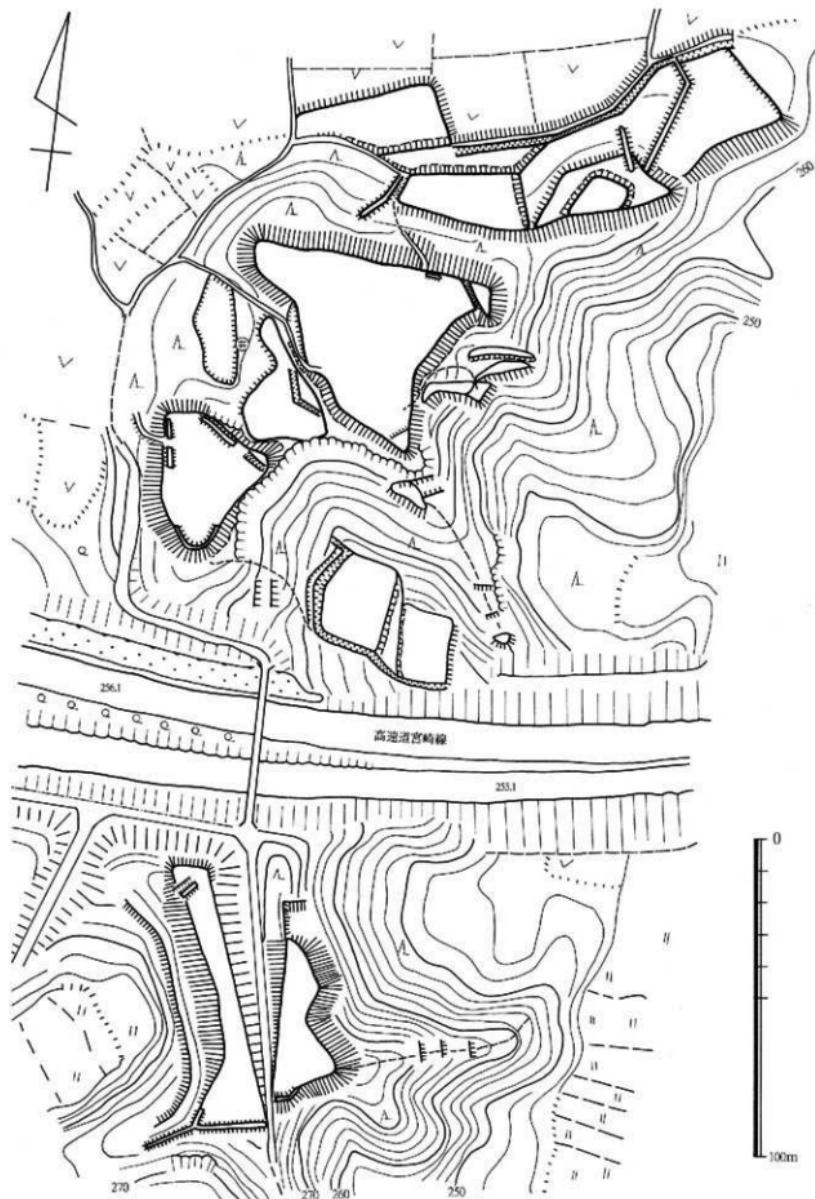
中央部は高速道路が横断しており、地形的に見て、この部分に堀切があった可能性が強い。

d. 歴史的背景 文獻等には現れない。

36. 溝園城 (第56図)

a. 位置 えびの市大字西長江浦字溝園

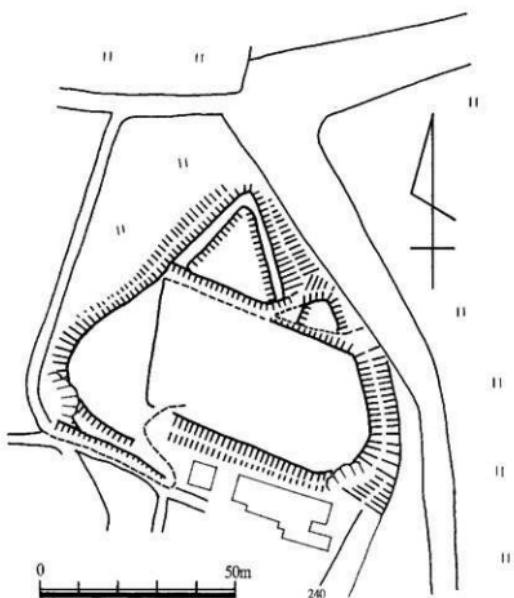
b. 立地 西長江浦地区の東北端、溝園の尾野江屋敷の北の低い丘にあり、真幸院の南山麓を



第54図 西矢倉城跡 繩張り図



第55図 矢倉城跡 構張り図



第56図 満園城跡 繩張り図

通り薩摩へ抜ける旧道を抑える地点にある。

- c. 繩張り　標高246~247m、比高約10mの、長江川左岸突端部に位置し、東西100m、南北80m程の城域である。

『日向古蹟誌』によると、「比高20m、東西約23m、南北約30mの平坦地で、西側と南側の両面は濠を巡らせて宅地にのぞむ…」とあるが、整地されて現在「堀」は見当らない。『日向地誌』にも、「東西12~13間、南北16~17間」とあり、最北端の郭が認識されている。

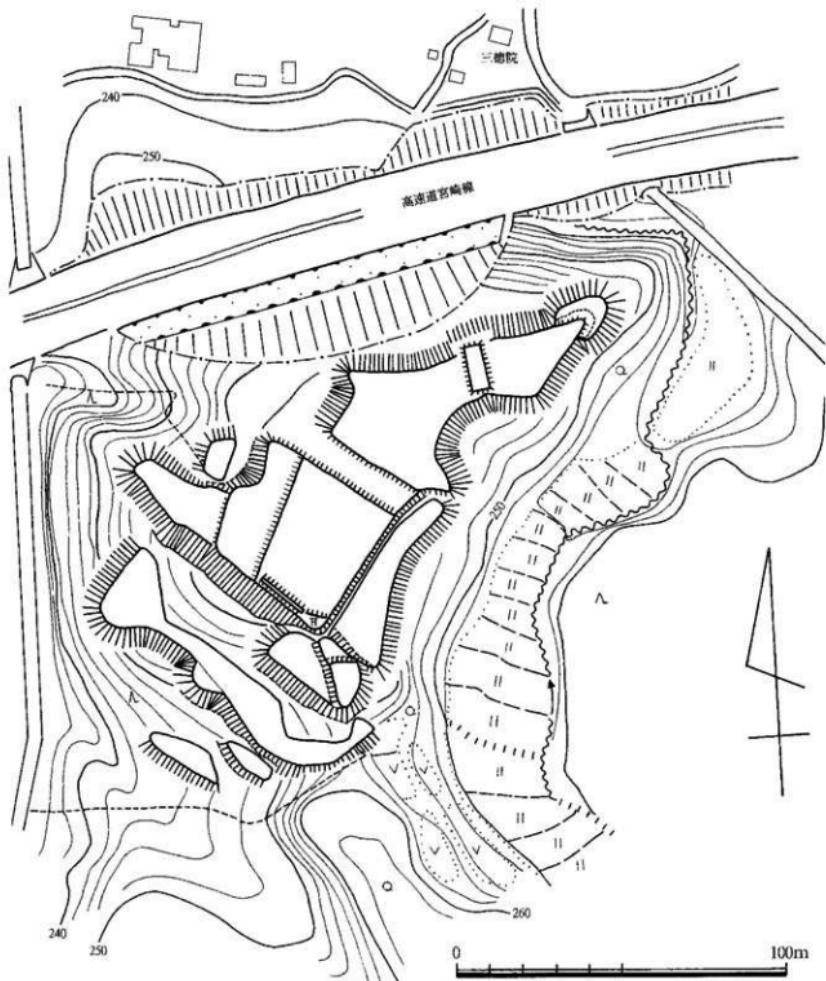
北端の最も高い郭に土塁が残るのみで、顕著な遺構は少ない。

- d. 歴史的背景　応永年間（1394~1428）、北原氏の守将が置かれた所だと伝えられるが、明治10年（1877）の西南の役の時にも、ここが官軍の台場となり、長江川を挟んで東岸の西郷軍と対峙した。

- e. 文献　平部崎南『日向古蹟誌』
『日向地誌』

37. いなりじょう 37. 稲荷城（第57図）

- a. 位置　えびの市大字東長江浦字蝙蝠迫



第57図 稲荷城跡 縄張り図

- b. 立地 栗下地区の南の小高い岡で、俗に「稻荷ヶ丘」といい、東長江浦の稻荷社の旧社地がある。北側の日向～薩摩の重要な旧道と、加久藤～白鳥の旧道との交差点にあり、両道を迎える加久藤郷で「本町」と呼ばれた栗下の町を見下ろす高台に立地する。西は長江川を隔てて「溝圍城」に対し、東は谷川を隔てて「柿木城」に対する要害の地である。
- c. 縄張り 標高262m、比高27mの、丘陵突端部を占める。城域は、東西120～200m、南北220m

あり、北縁は九州縦貫自動車道建設によって削失している。

遺構としては、土壘と堀らしきものが一部残る。

- d. 歴史的背景 『相良家文書』によれば興国4年（1333）馬關田予所・平河又三郎師里、真幸院収納使・北原助六兼命の軍勢が稻荷城を攻め、吉田郷の地頭・坂 兵部房覺英の一族・坂 円党坊が討ち死にしたとある。また、吉田郷の松尾城も島津忠平公が飯野城に入城する以前は稻荷城とよばれていたので、『相良家文書』の中の稻荷城がいざれの稻荷城を指すのか断定できない。

西南の役の際には、西郷軍の拠点の一つとなっている。

- e. 文献 「相良家文書」『宮崎県史』史料編中世2 1994
『飯野古事記』 1840

38. 小屋敷城（第58図）

- a. 位置 えびの市大字東長江浦字鶴田越
b. 立地 本市の中央部南側、長江川の右岸、段丘北端から1km南に位置する。
c. 繩張り 標高250～266m、比高12～28mの低位～中位段丘に立地し、東西250m、南北70～130mの城域をもつ。

主郭の北および西・南の3方は峻険で、北東部に長さ約70mの土壘があり、東南隅に虎口が形成されている。東の岡との間には堀切があり、東方にも堀切や切岸等の遺構が続いている。

- d. 歴史的背景 宅地拡張工事の際、南西の一部分が削り取られたほかは良好に遺存する。頂上主郭には無銘の墓石と石疊が残っており、「宝蔵寺」の遺構と思われる。

当地は、西南の役時の西郷軍の拠点の一つであった。

39. 畑田城（第59図）

- a. 位置 えびの市大字東長江浦字城ノ下
b. 立地 長江川の右岸、小屋敷城の南南東1.1kmに位置する。
c. 繩張り 標高284m、比高約40mの高位段丘に立地し、東西310m、南北70～150mの城域をもつ。3方は水田に囲まれ、東部の段丘との間に堀切る。

東西約140m、南北約70mの頂部に5つの郭があり、それぞれの郭が急崖の上にあるためか土壘は殆ど見られず、緩斜面の部分を切岸によって護る工法が取られている。

東方と岡との境にある小郭には約15mほどのL字型の土壘が見られ、その先に堀切がある。

- d. 歴史的背景 応永年間（1394～1428）真幸院の領主・北原民部少輔兼珍の三男・某の居城と伝えられている。



第58図 小屋敷城跡 拡張図



第59図 烟田城跡 縄張り図

東方には、栗下～金松法然～白鳥神社と通じる旧道に出る小道があり、「トノンマチ」と呼ばれている場所もある。「殿の街」と思われ、島津義弘公が加久藤城からこの旧道を通って白鳥神社に参拝していたことから、この地区的者たちが、殿を出迎えるために「待」っていた場所であろう。

この城跡も西南の役の際の内郷軍の拠点の1つであった。

e. 文献 『元禄縄引帳』 1698

加久藤郷『名勝志御再撰方札方帳』 1824

平部崎南『日向古蹟誌』

畠田国雄「畠出城と西南の役」『えびの市老人物語集』老連編集委員会 1993

40. 柿ノ木城 (第60図)

a. 位置 えびの市大字栗下字城ヶ崎

b. 立地 市の中央南側、池島川の左岸、柿荷城の南東700mに位置する。この地点より白鳥神社方面へ抜ける旧道は、城中の一部を通過していく、要衝の地である。

c. 繩張り 標高279m、比高39mの中位段丘に立地し、城城は、東西260m、南北320mの広さがある。

頂部は約80aの畠地で、郭の周縁には土塁が見られ、虎口は北西隅にある。

各尾根筋には掘切や切岸が見られ、堅固な城を築いている。

d. 歴史的背景 『日向地誌』・『日向古蹟誌』によると、昔の古城あとであるが、その詳細は不明である。『飯野町郷土史』によると、「永祿11年（1568）日向の伊東義祐は真幸表の三ツ山（小林）に兵を集め、同年8月9日に飯野桶平に出城を築いて飯野城を窺い、相良と謀り、相良軍は大明司塁を抑え、伊東方は柿ノ木の古塁に移って、島津軍を挟み撃ちにする作戦を立てた…」とある。

西南の役の際は、ここでも激戦が繰り広げられたらしく、弾丸多数が出土したといわれている。

e. 文献 平部崎南『日向地誌』1883

『元禄縄引帳』 1698

平部崎南『日向古蹟誌』

『飯野古事記』1840

飯野町『飯野町郷土史』1966

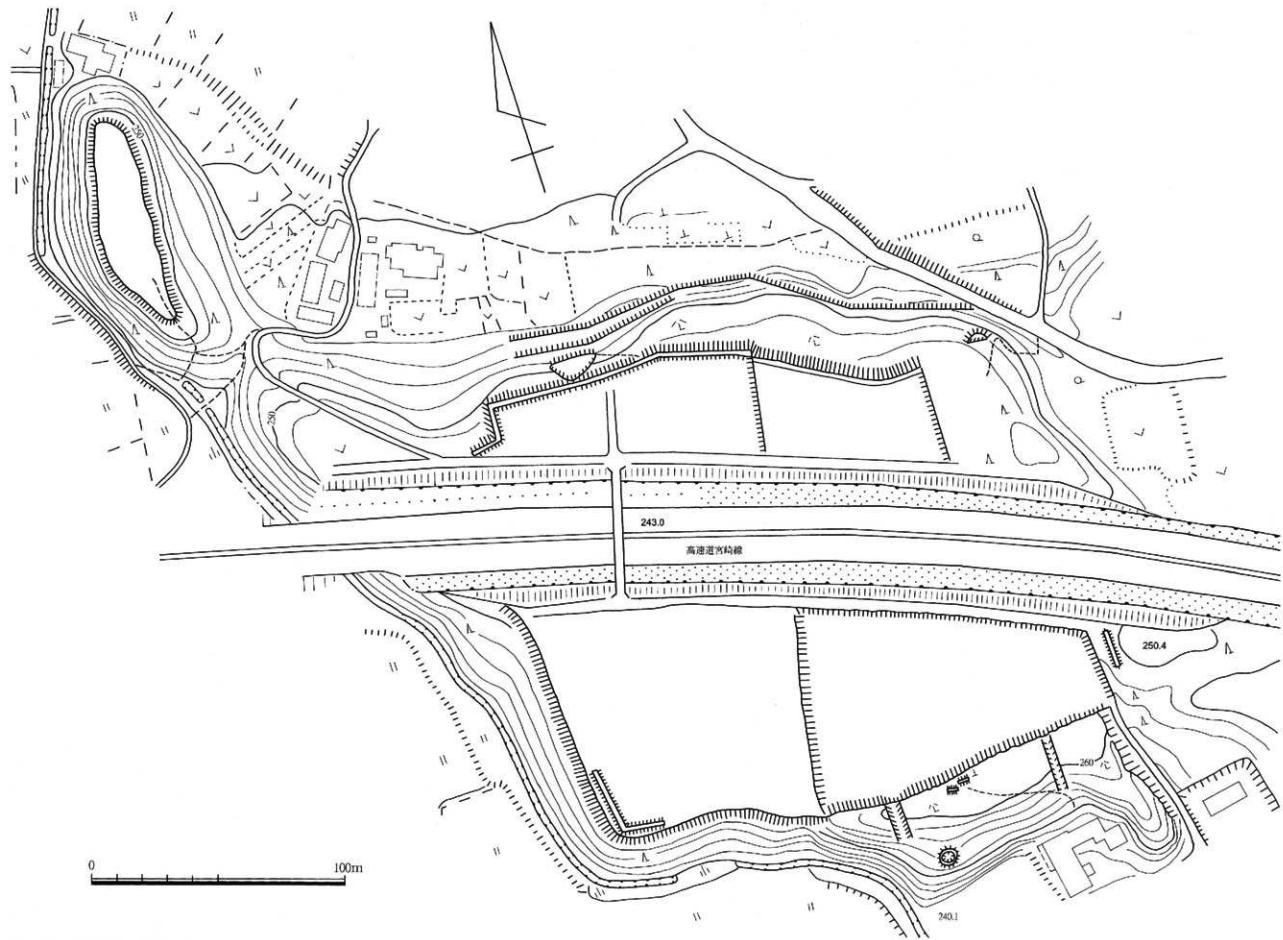
吉村義男「柿木城の塚と祈祷師」『えびの市老人物語集』老連史編集委員会 1993

41. 鳥越城 (第61図)

a. 位置 えびの市大字池鳥字鳥越



第60図 柿ノ木城跡 繩張り図



第61図 鳥越城跡 繩張り図

- b. 立地 伊東、島津両氏の合戦の地である木崎原古戦場跡の南方約500m、低位段丘の西端に位置し、木崎原合戦の折、伊東軍が布陣した場所である。
- c. 繩張り 標高252m、比高12mの低位段丘西端部に東西60~300m、南北230~390mの域域をもつ。
- 域域の中央部は九州縦貫自動車道が貫き、2分割されている。北縁部分には、土塁や切岸が長く設置されている。
- 南側には、一部に土塁と縦堀が見られる。西北の小丘にも当然陣が布かれたと思われるが、顕著な遺構は見当らない。この小丘は、9世紀代の官道建設の際に堀切られた可能性がある。
- d. 歴史的背景 元亀3年（1572年）三ツ山の城（小林城）に集結した伊東軍3000は、2手に分かれて布陣したが、伊東新次郎、同又次郎に率いられた一軍2000が戦陣を張ったのが当城である。
- 伊東軍は、この合戦で壊滅的な打撃を受け、以後、伊東氏は凋落の一途をたどり、島津氏は九州制覇へ向かって進むことになる。
- e. 文献 飯野町「飯野町郷土史」 1966

42. 上江城（第62図）

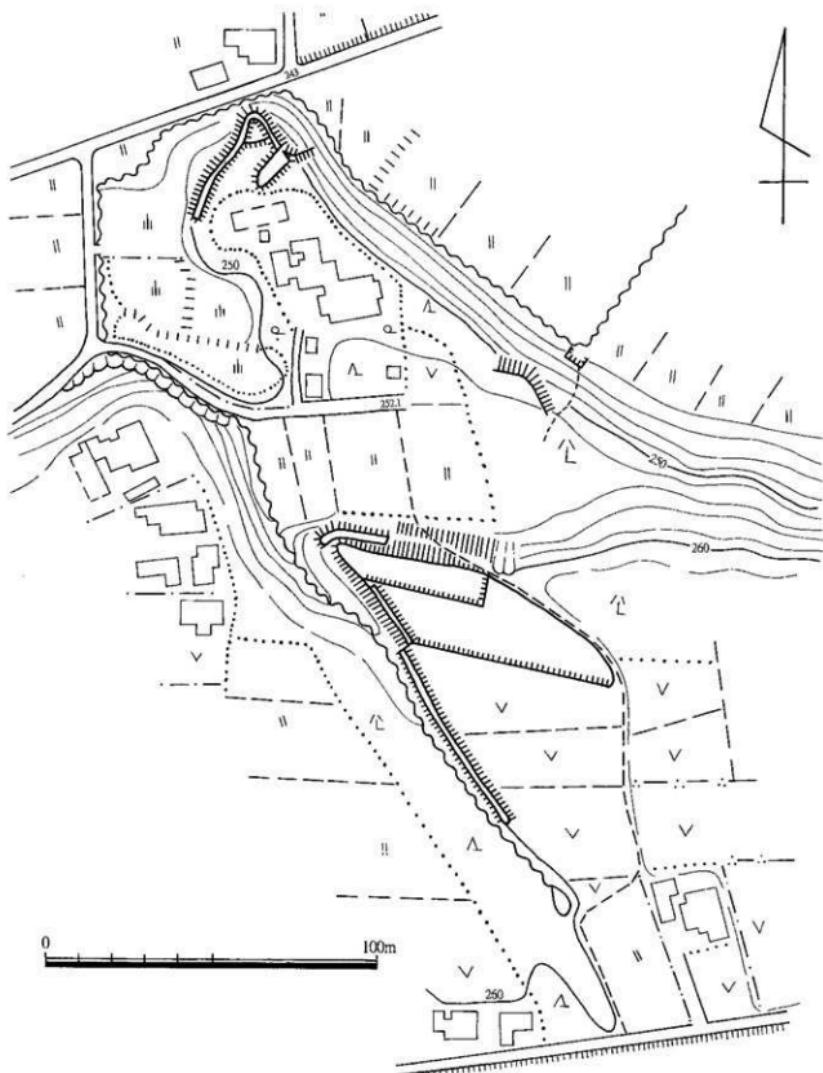
- a. 位置 えびの市大字今西字口ノ坪
- b. 立地 吉都線・上江駅の北方約150m、低位段丘北縁～最低位段丘突出部に立地している。西側は南から北、東へと小川が流れている。
- c. 繩張り 標高250~262m、比高7~19mの段丘面に、東西50~110m、南北210mの域域をもつ。南側の郭は小川に沿って土塁が南北に延び、突端に土塁や切岸が見られる。地元ではこの部分が城跡と聞いたが、北の突端部にも土塁や切岸があり、西方には小川を取り入れた池が造られ、濠跡の可能性がある。
- d. 歴史的背景 「三国名勝図會」に「宮原村（上江）に上江城跡あり、その由緒詳ならず。」とある。北方からの攻撃に備え築かれた城と思われる。
- e. 文献 原口虎雄監修「三国名勝図會」第4巻 青潮社 1982

43. 古城（第63図）

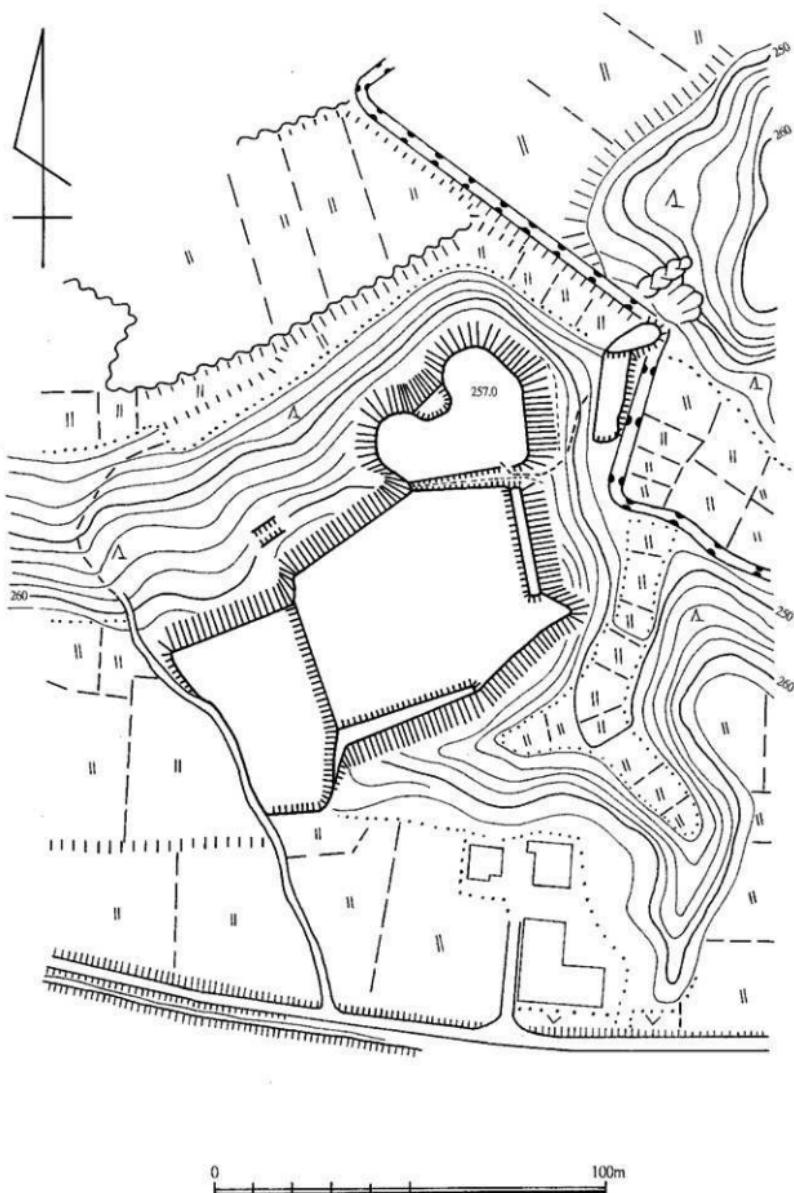
- a. 位置 えびの市大字上江字古城
- b. 立地 吉都線・上江駅の東約500m、上江城の東500m、田之上城の西750mに位置し、低位段丘の北縁に立地する。
- c. 繩張り 標高257~262m、比高17~22mの低位段丘の突出部で、東西130m、南北110mの域域を有する。北縁氾濫原に空堀が埋没している可能性もある。東側は深い「う」と

が入り込んでいて急崖である。北側も急峻で守りやすいが、南と西は台地続きで手薄である。

城郭は3区画になっているが、中央の郭の東側「うと」に面する部分に土塁が、さ



第62図 上江城跡 繩張り図



第63図 古城跡 構造図

らに北の郭との間に切岸が見られ、この部分が虎口かと思われる。

d. 歴史的背景 『飯野古事記』に「古来より古城と申し伝え候えども、何某の居城跡とか詳
細は不明である。」とある。西と南が台地続きであることを勘案すると、北方からの
攻撃に備えた城と思われる。

e. 文獻 平部崎南『日向古蹟誌』
『飯野古事記』 1840

44. 田之上城 (第64図)

a. 位置 えびの市大字前田字樺木、大字上江宇田上・宮廻



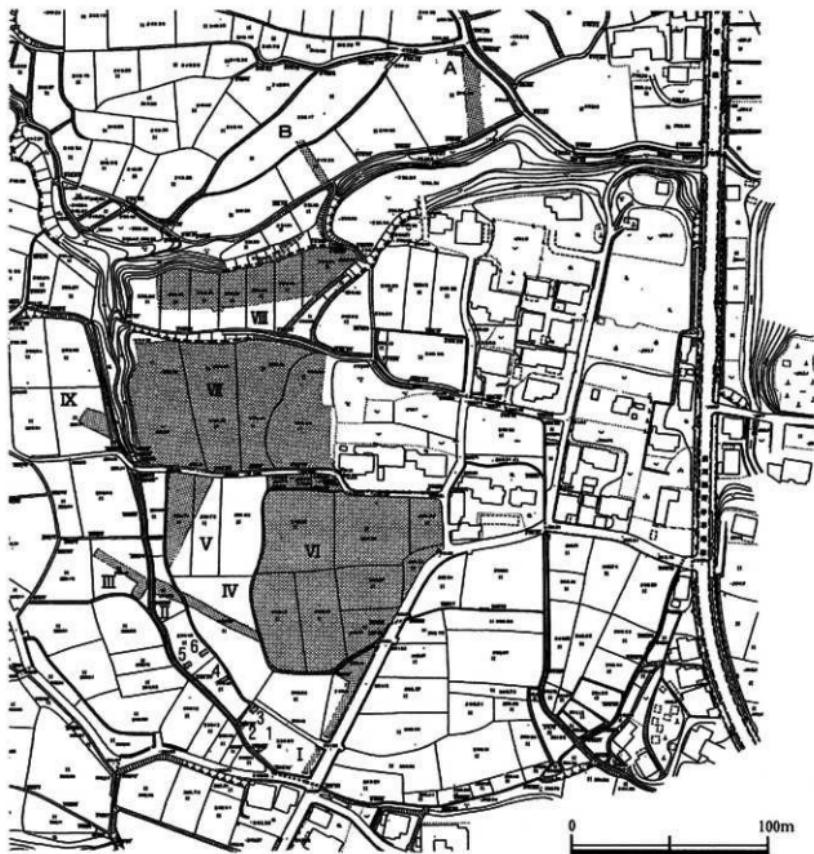
第64図 田之上城跡 地形図

外堀は発掘調査の成果と推定

b. 立地 飯野城の対岸1.5kmの地、比高10mの低位段丘の北縁、飯野の町から吉都線「えびの飯野駅」へ通じる道路が、上江の台地へ差しかかる急坂の西側・台地上にある。

c. 繩張り 東西250~300m・南北280~330mのD字型を呈する郭に外堀がある。北面の外堀は氾濫原にある。郭内のA地点には、かつて長さ25~30m・高さ1.5m・幅1.5m位の土塁が存在したらしい。B地点には、幅6.3~10m・高さ0.6前後の土塁状高まりが遺存するほかは明瞭な区画施設が無い。進入路は、北西部と思われるが、未調査であることから詳細は不明である。

なお、南西の部分・田圃の中には、近年まで長い土堤が南北に延びていたといわれるので、これが土塁であった可能性もある。

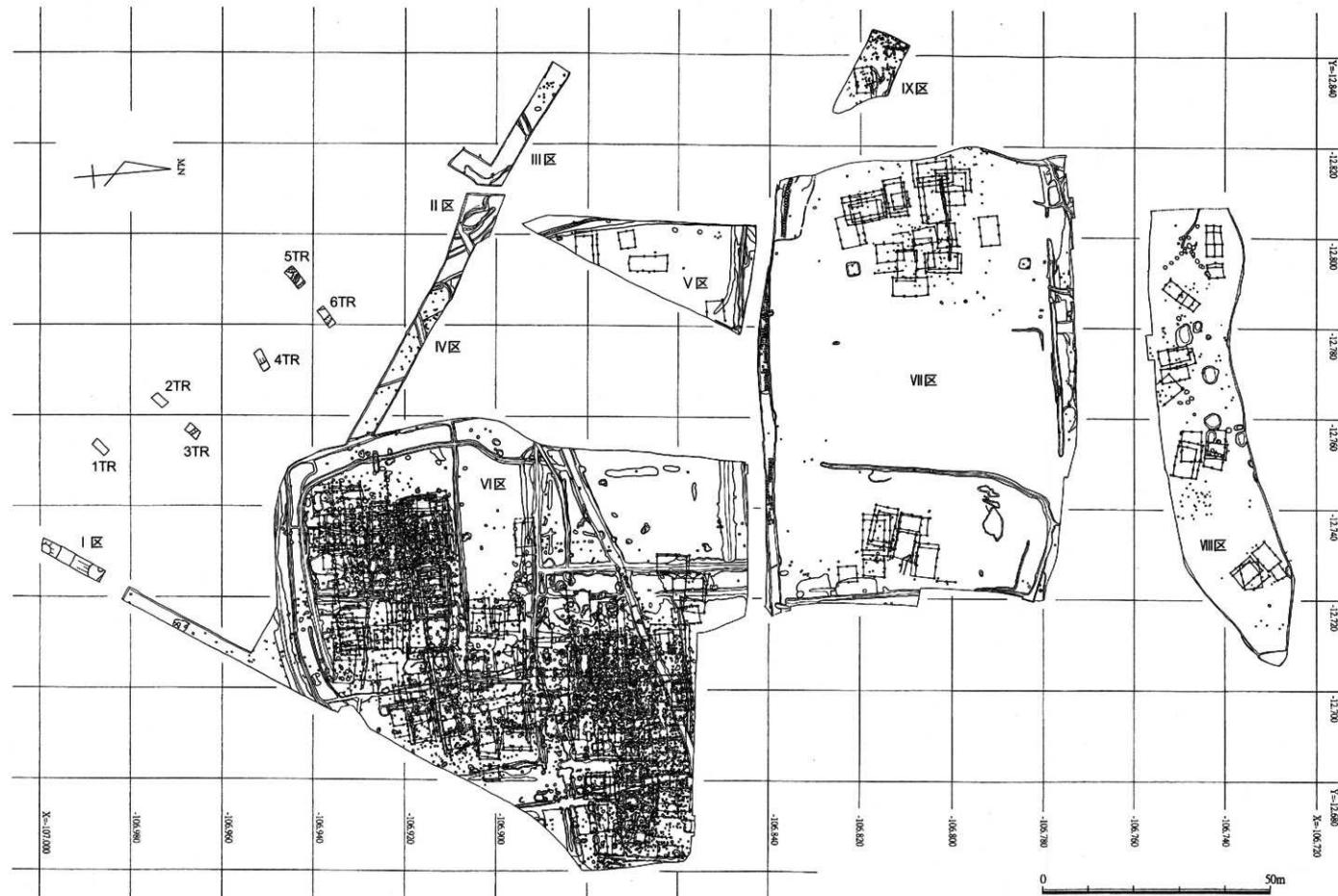


第65図 調査区 位置図

- d. 歴史的背景 「相良家文書」に「文和元年（1352）から二年に、人吉の相良一族が真幸院に攻め入り、畠山修理の代官・後藤新左衛門並びに和田又次郎などの立て籠もる山上城を攻め落とし、吉田の稻荷城に入った…」とある。
- e. 発掘調査概要 平成12、13年度、県営圃場整備事業に伴い、北西～西側約16,500m²を調査した。外堀の幅は、A・B区では27m位、I区では幅9m、底面の幅4.15mを測った。郭内はII～IV区に分けたが、VI区に遺構が密集していた。遺構は古代から中世末にわたり、15～16世紀に集中する。14世紀中葉に陥落したという痕跡は見つかず、中世末もしくは一国一城令で廢城になった城破りの様子を垣間見ることができた。
- 建物は全て掘立柱建物であるが、布掘りのものや桁行が4～7間の大型建物40棟（全体の22.2%）が検出され、兵舎などの山城特有の建物が多い様子が窺える。山城としての遺構は大きく4期に分けられ、堀や区画溝で堅固になるのは15世紀に入ってからと推定される（第65～70図）。
- f. 文獻 「相良家文書」「宮崎県史」史料編中世2 1994
田代政融著、堂屋敷竹次郎訳『新訳 求麻外史』青潮社 1972
えびの市教育委員会『小岡丸地区遺跡群』 2003

45. 田原陣（桶平塁）（第71図）

- a. 位置 えびの市大字原田字田原陣
- b. 立地 吉都線「えびの飯野駅」南方の妙見原の中にある丘で、近くに「陣の池」という池もある。
- c. 繩張り 標高295m、比高23mの丘陵突端部に位置し、高速道路建設の際に大量の土砂が削り取られ、北側の一部を残すのみで殆ど消滅している。残存部の頂上には、なだらかな階段状のテラスを設け、南端に幅約14m、長さ約10m、高さ約1mの方形の区画が築かれている。
- また、北端には「馬乗り場」と呼ばれる長さ約100m程の上塁が築かれていたらしが、現在は消滅している。
- d. 歴史的背景 一名「桶平塁」ともいい、永祿11年（1568）島津義弘が、父・貴久、兄・義久とともに大門の菱刈氏を攻めた時、伊東義祐がその隙に乗じて、8月、桶平に塁を築き、飯野・加久藤を攻めんとしたが、義弘が直ちに飯野城へ取って返しこれに備えたので、果しなかった。
- 同年11月、義弘は遠矢下総、黒木播磨を将として兵50人を差し向け、手前の古溝に伏兵を置き、鶴狩に出た風情の人数・数人を出して伊東勢を誘い出し、挟み撃ちして大打撃を与えた。また、翌年には義祐の長男・義益が病死したりしたので、7月14日伊東はここを焼き払って、小林の三山城へ兵を引揚げた。



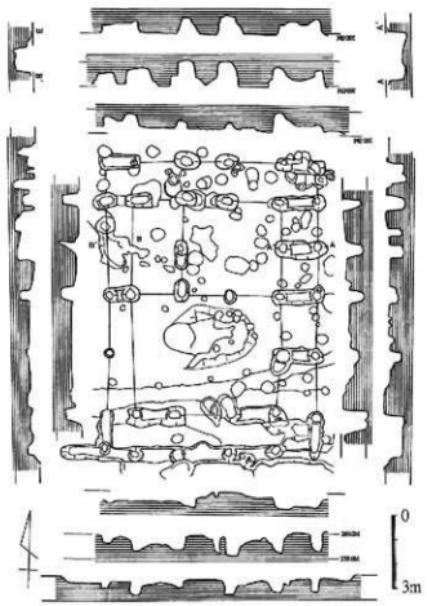
第66図 発掘坑・遺構分布図



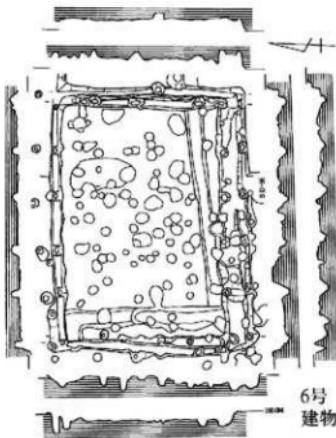
第67図 II～VI区 遺構分布図



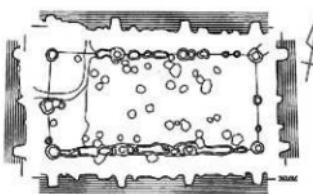
第68図 VII・IX区 遺構分布図



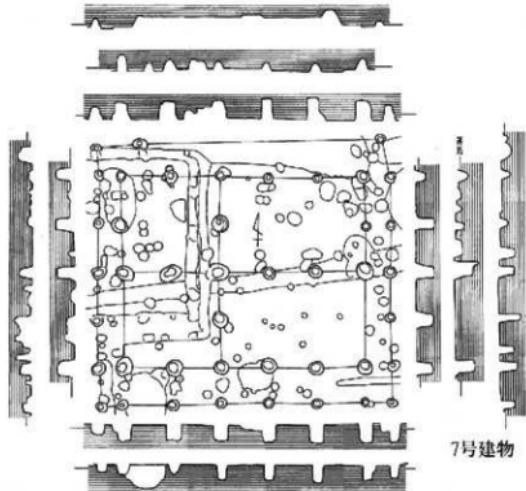
5号建物



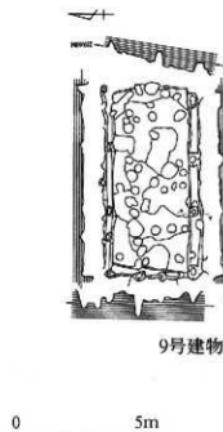
6号
建物



8号建物



7号建物



9号建物

0 5m

第69図 大型 堀立柱建物跡 遺構実測図 (1)